

ロシア及び CIS 諸国における教育改革と教師教育の
現代化に関する総合的調査研究

課題番号 15H05198

平成 28 年度中間報告書

平成 27～29 年度
基盤研究 (B) 海外学術調査

平成 29 年 (2017 年) 3 月

研究代表者 嶺井明子
(筑波大学 人間系)

目 次

I. 研究概要-----	5
II. 調査報告	
1. ハバロフスク調査①（2016年11月1日～11月6日）-----岩崎正吾、森岡修一---	9
2. モスクワ調査①（2017年2月27日～3月4日）----- -----澤野由紀子、井上まどか、タスタンベコワ・クアニシ-----	28
3. モスクワ調査②（2017年3月4日～3月12日）----- -----遠藤忠、松永裕二、黒木貴人、ミソチコ・グリゴリー---	49
4. ヤクーツク調査（2017年3月26日～3月30日）-----大谷実-----	86
III. 関連資料	
2017年2月11日開催公開研究会「ロシアにおける教育改革の25年」発表資料	
1. レモレンコ・イゴリ（モスクワ市立教育大学）	
2. セミョーノフ・アレクセイ（モスクワ国立大学）	
3. ブイロヴァ・リュボヴィ（モスクワ・オープン教育大学）	
4. パホーモフ・ヴラジミル（サマーラ州シティズンシップ教育センター）	

I. 研究の概要

研究目的 (概要)

教育改革と教員の養成・研修は相互に関連した教育の最重要課題である。いずれの国も急激に変動する内外の課題にさらされ、教育改革に取り組んでいるが、教員養成・研修制度が改革のペースに追いつかないことによる弊害が生じている場合が多い。本研究では、過去 25 年間に体制転換に伴う大きな変化を経験した旧ソビエト諸国の教育改革と教員養成・研修との関連に焦点を当て、両者の間隙をいかに埋めれば教育改革が効果的となるかを考察する。第 1 に 1980 年代後半からの教育改革動向を教師教育に焦点を当てて分析する。第 2 に近年の学力観変容に対応した教員養成・研修制度改革の実態について明らかにする。第 3 に多様なアクターによる教員養成・研修プログラム開発と実践の事例研究を行う。第 4 に教育者のライフストーリーの聞き取り調査を行い、改革の担い手が直面してきた諸問題とその解決策について明らかにする。

① 研究の学術的背景：

国内の研究 旧ソ連・ロシアの教育研究は、主として初等中等教育の制度・内容・方法に焦点が当てられてきた。川野辺敏らによる『ロシアの教育・過去と未来』（1996年）、遠藤忠らによる「教育の分権化に関する研究」（2002年）、福田誠治らによる「英才教育と学校の多様化・個性化に関する研究」（2005年）、岩崎正吾らによる「キャリア教育に関する研究」（2008年）がある。いずれも教育改革の状況を伝えているが、教員の養成・研修との関連についての研究は十分に行われていない。

また、CIS 諸国については、嶺井明子・川野辺敏編著『中央アジアの教育とグローバリズム』（2012年）、関啓子著『コーカサスと中央アジアの人間形成』（2013年）があるが、いずれも同様である。直近では福田らによる「体制転換後ロシア連邦20年の教育改革の研究」（2013年）があり、中央のみならず地方各地の教育改革の状況が研究されているが、教員の養成・研修との関連については十分に分析されていない。個人による研究では、環境教育（関啓子）、宗教教育（井上まどか）、言語教育（伊藤美和子）、障がい児のインクルーシブ教育（渡辺健治）の新しい実践に着目した研究の萌芽がみられるが、教員養成・研修との関連には焦点が当てられていない。

国外の研究 1980 年代以降、欧米のロシア・CIS の教育動向に対する関心が高まっており、例えば近年では(1) Iveta Silova (Edit.) 2010, *Post-Socialism is not Dead: (Re)Reading the Global in Comparative Education*, Emerald Books, (2) David Jonson (Edit.), 2010, *Politics, Modernization and Educational Reform in Russia from past to present*, Oxford Studies in Comparative Education, (3) Борис Старцев, 2012, Хроники образовательной политики 1991-2011, Издательский дом Высшей школы экономики, (4) Aydarova, O. Universal principles transform national priorities: Bologna process and Russian teacher education, *Teacher and Teaching Education*, 37, 2014 (p.64-75)がある。但し、(1)～(3)は教育改革の外的要因を強調しすぎており、教育改革の全体像を把握しきれていない。(4)は本研究の関心に最も近い先行研究である。ロシアの高等教育改革を取り上げて、欧州統一教育圏への統合を目指すボローニャプロセスへの参加が教員養成課程に与えた影響を教師教育スタンダードの分析を通して、5年制専門家養成課程と新しい4年制学士養成課程を比較し、両者のメリット・デメリットを指摘する視点として興味深い。しかし、教育改革と教師教育の関連が示されておらず、教育改革がどのような教師像を目指しているかを明らかにすることが課題として残る。これらのいずれの研究も、ソ連時代の教師教育の経験を分析しておらず、現代との連続面・非連続面を示していない。

また OECD は 2008 年から国際教員指導環境調査 (TALIS) を実施し、2013 年の調査には日本を含め 34 カ国 4 地域が参加するなど各国における教育改革の担い手としての教員の職能開発を含む指導環境への関心が高まっているが、ロシア・CIS 諸国はこうした国際比較調査には参加していない。

研究目的(つづき)

着想に至った経緯

本研究のメンバーの多くは、1980年代から旧ソ連地域の教育政策及び改革に関する調査研究を継続的に行ってきた。1980年代末期に教師が支えた教育改革はソ連解体後の政治・経済の混乱期には停滞し、アメリカ型の新自由主義的改革手法の席卷のなかで混乱を極めた。2000年代以降の経済的安定期のなかで、新しいコンピテンシー型学力観に基づくカリキュラムが整備された。それに伴い教師にも新しい専門性が必要となり、教員養成・研修が大きく変化しているという事実が明らかになった。そこで教育改革と教員養成・研修の関連に焦点化した本研究の構想に至った。

②研究期間内に明らかにしたいこと：

1. 教育改革の再整理と明確化

ロシア・CIS 諸国におけるソ連解体後の教育改革及び教員養成・研修制度改革の進行状況を政策文書及び統計数値に基づき正確に把握する。例えばロシアについては、1992年教育法と2012年新教育法の異同を整理し、「2013～2020年ロシア連邦国家プログラム“教育発展”」が掲げる「生涯にわたる質の高い教育システムの構築」へ向けた改革の全体像を明確化する。「教員養成の発展支援構想・案」（ロシア連邦教育科学省2014年1月）に基づき、基本的骨格を明らかにする。

2. 教員養成・研修制度に関する実態の解明

教育改革と教員養成カリキュラム（大学・中等専門学校のスタンダード）の関係、日本の学校には配置されていない多様な種類の教師の養成（補充教育・学校外教育機関の指導者、特別支援教員、ソツィアリヌィ・ペダゴグの養成）、研修機関での教員研修の実態及び課題等について調査する。その際、免許、養成、採用、研修、配置、処遇などの制度全般を視野に入れ、欧州高等教育圏に対応した高等教育改革並びに欧州資格枠組に対応した教員資格制度の改革に留意しつつ、実態を調査する。

3. 教員養成・研修のプログラム開発および実施に関わる新たなアクターの解明

教師教育に関わる国内外のNGO、企業、メディア、大学や研究機関の事例研究を行う。その際、中央政府や地方政府との関係並びに多様なパートナーとのネットワークに着目する。

4. 教育改革の担い手たちのライフストーリーの解明

教育現場の変化を直接体験してきた教師や教育行政官等のライフストーリーを聴取し、教師の新しい専門職性の形成過程を明らかにする。

③ 当該研究における本研究の学術的な特色、独創的な点、予想される結果と意義：

学術的な特色としては、以下の3つのアプローチから研究課題の解明に総合的に取り組むことである。1) **歴史的アプローチ**：ソ連時代、1990年代のアメリカの影響が濃厚であった時期、2000年代の欧州高等教育圏入りを目指した時期（ボローニャプロセス対応の改革）、2010年代以降ユーラシア経済同盟を基礎とした共通教育圏を模索している時期に区分して解明する。2) **比較教育学的アプローチ**：近年の国際情勢の変化・流動化を考慮し、旧ソ連諸国の独立後の教員養成制度改革の比較を行う。3) **エスノグラフィー**：法制度中心の調査に終わらず、激変の時代を生き抜いてきた改革の担い手である教師等の生の声を聴く。

本研究の**独創性**は、上記の視点から教育改革と教員養成・研修改革との連携の在り方を解明しようとする点にある。

予想される結果と意義 1) 教育改革に伴う教員養成・研修の在り方全体を見直す契機となる知見を提供できる。2) 日本の教育改革で強調されている学校・家庭・地域の連携に有効な仕組みを明らかにする（例：学校外担当副校長の役割）。3) 日本で新たに提起されている教員養成・研修上の諸問題、具体的には小学校の「英語教育」や「特別の教科＝道徳」に相応する新教科の教員養成・研修の在り方についての示唆を得ることができる。4) 日本で問題となっている学校外教育機関の指導者養成及び研修の状況を明らかにし、学童保育・校外教育の在り方に示唆を与えることができる。

本研究は、教育のグローバリゼーションが進むなか、国情を超え、教員養成・研修の在り方を検討する上での大きなインパクトを与えることが期待できる。

本研究の参加者は、以下の通りである。

	氏 名 (所 属)
(研究代表者)	嶺井明子 (筑波大学)
(研究分担者)	岩崎正吾 (早稲田大学) 大谷実 (金沢大学) 澤野由紀子 (聖心女子大学) タスタンベコワ・クアニシ (筑波大学)
(連携研究者)	遠藤忠 (宇都宮共和大学) 関啓子 (一橋大学) 松永祐二 (西南学院大学) 森岡修一 (大妻女子大学) 井上まどか (清泉女子大学)
(研究協力者)	川野辺敏 ウメトバエワ・カリマン (東京藝術大学) 木之下健一 (一橋大学大学院) 白村直也 (浜松学院大学) 山下正美 (東京藝術大学) ミソチコ・グリゴリー (筑波大学研究員) カキモフ・バザルハン (筑波大学大学院)

II. 調査報告

1. ハバロフスク調査（2016年11月1日～6日）
2. モスクワ調査①（2017年2月27日～3月4日）
3. モスクワ調査②（2017年3月4日～12日）
4. ヤクーツク調査（2017年3月26日～30日）

ハバロフスク調査報告

2016年11月1日～11月6日（6日間）

岩崎正吾（早稲田大学）
森岡修一（大妻女子大学）

【調査日程】

日付	時間	移動・調査機関
2016年 11月1日（火）	13:55 17:50	成田発S7-568便 ハバロフスク着 ホテル（インツーリスト）5泊
11月2日（水）	10:00～12:55 13:30～ 午後	①ハバロフスク地方教育・科学省訓育・補充教育局 昼食 ●本屋
11月3日（木）	9:30～11:30 12:00～ 13:00～ ～14:35	児童創造宮殿「小公子」にて ②児童創造宮殿「小公子」見学、館長、他対応 簡単な昼食とお茶をご馳走になる ③ハバロフスク市教育局補充教育・訓育活動課長 ④児童・青少年創造宮殿「オーロラ」館長 ●日本人墓地 ●アムール川鉄橋
11月4日（金）	10:00～17:30	ユダヤ自治州ビロビジャン ●シナゴーク ●文化宮殿 ●ビロ河
11月5日（土）	10:00～13:00 13:30～14:30 15:00～	⑤太平洋国立大学教育学部補充教育学部長 昼食 ●ハバロフスク地方郷土博物館
11月6日（日）	11:15 12:55	ハバロフスク発S7-567便 成田着

<2016年11月2日(水曜日)>

ハバロフスク地方教育・科学省訓育・補充教育局 (訪問時間: 10:00~12:55)

Управление воспитания и дополнительного образования министерства образования и науки Хабаровского края

1. 対応者

- ①Мацко Юлия Евгеньевна (訓育・補充教育局長)
- ②Ивлева Ирина Михайловна (訓育・補充教育課長)
- ③Бурая Наталья Юрьевна (ハバロフスク地方児童・青少年発達センター長)
(Хабаровский краевой центр развития творчества детей и юношества)
- ④ Волостикова Алла Евгеньевна (ハバロフスク地方校外活動センター「星座」長)
(Хабаровский краевой центр внешкольной работы "Созвездие")
- ⑤Дианов Вячеслав Анатольевич (ハバロフスク地方知事／政府議事・国際交流主
局長) (Главное управление протокола и международных связей Губернатора и Правит
ельства Хабаровского края)

⑥その他

2. 住所: г. Хабаровск, ул. Гоголя, д. 21, каб. 202

3. 連絡先: Тел.: +7(4212)30-46-16(Мацко), (4212) 30-45-00(Ивлева)

Email: macko2006@rambler.ru, ivleva@edu.27.ru

4. 入手資料: 特になし



<自己紹介、名刺交換ののち聞き取り調査開始>

・ **Мацко Юлия Евгеньевна** により出席者の紹介、および岩崎・森岡の自己紹介。
岩崎先生から今回の学術調査の目的の説明。文科省科研費による調査内容の説明。
森岡からハバロフスク訪問のきっかけと今回の調査目的の個人的補足。

1. ハバロフスク地方の補充教育の概要

・ **Мацко Юлия Евгеньевна** からハバロフスクの補充教育の概要について説明。

補充教育は学校内と、学校外の2種類あり、学校内の補充教育は原則無償。
特別な補充教育機関は市内に123か所（パンフレットでは125か所）あり、いろいろな分野に所属しており、たとえばスポーツ学校は体育施設として活動。キャンプ活動も補充教育機関として行われており、うち62か所は「教育」機関として活動。

個別に活動する場合もあれば、同一施設内で合同で活動する場合もある。

プログラムで学ぶ生徒数は約12万9千人。

<分野>

- ① 「体育・スポーツ分野」；オリエンテーリング、ロッククライミング、ラフティング、スキー、チェス等。
- ② 「芸術分野」；バレエ、民族舞踊、伝統的音楽、社交ダンス等。
- ③ 「技術分野」；レーシングカー・船舶・飛行機模型製作、ロボット、家屋ミニチュア等。
- ④ 「観光・地域分野」；カヌー、洞窟探検、キャンプ、民具、陶芸等。
- ⑤ 「自然科学分野」；化学成分分析、顕微鏡観察、生物・自然観察等。
- ⑥ 「社会・教育学的分野」；アウトドア共同生活等。

現在は以上の6分野であるが、16年12月には③⑤をさらに特化発展させて、⑦「宇宙技術・ロボット・航空機、IT分野」を新設する予定である。ロシア連邦では補充教育は75%にとどまっているが、ハバロフスク地方はそれを上回って81%の生徒が補充教育に通っている。これは同一児童の重複算定を除いた数字である。ハバロフスクは工業基点であり、そのためにも⑦の分野に対する期待が高い。重要なことは、どの子どもも希望に応じて補充教育を受けることができる、という点である。

ハバロフスクの各種イベント等と連携して、補充教育の発展が図られている。遠隔地に住んでいる子どもたちは施設に通うことが困難なケースもあり、そのような場合は遠隔地システムを利用して、理工系の学習等の充実を図っている。また、ハバロフスク校外キャンプを年中実施しており、子どもたちの制作した創作的作品等はそれらを通じて広く公開する。このように、補充教育は単に知識教育にとどまらず、子どもの健康維持や共同生活の基本として必須のものと考えられる。キャンプによって子どもたちの興味を引くテーマに即して、同じことに興味を持つ子どもたちの集団的創作力を高めていく。教室での固定化したシステムではなく、身体活動を含む全人的な教育が必要である。当市は兵庫県と交流が深く、ハバロフスク校外で1週間にわたり、毎年兵庫県の日本人児童との交流キャンプが開催されている。イベントはテーマ別となっており、期別にテーマを設定してそのテーマに興味を持つ子どもたちの集団生活的学習を組織している。

日本での技術水準の高さが大変魅力的であり、今後はこうしたキャンプ等の補充活動を通じて日ロの相互の技術的交流が望まれる。

2. 科研調査について

（ここで日本のグラントについて質問があり、岩崎先生から、文科省科研費を例にし

た詳しい説明が行われ、今回の学術調査に関してロシアから質問等も出され、グラントに対する関心の高さがうかがわれたが、これについては以下に要点のみ略述)

われわれのグラントによる調査は、昨年から3年間にわたり行われることになっており、今年が2年目でいくつかのグループに分かれて調査を行っている。われわれのグループは、今年の2月に3名(岩崎・松永・森岡)のメンバーで、モスクワ学術調査を行った。テーマは今回と同様、補充教育を中心にしたもので、テフノラーマ、モスクワ市の補充教育課関係者諸氏との懇談を中心に調査を行った。他のグループはサクト等に出かけ、教師教育、教員養成等の調査を行った。以前からのグラント調査の継続で、カザフスタンやウズベキスタン等、中央アジアの教師教育も視野におさめた研究を行ってきた。

今回のハバロフスク調査では、こうした文脈で補充教育と教師教育に特化したトピックスに絞った問題点を明らかにしていきたい、

3. 補充教育機関の管轄とその実施形態について

Q1. (岩崎) 「先ほど123か所の数字が出たが、それは教育省管轄かどうか、また子どもの参加率の数字の開きはどのような理由によるものか」

A. 教育省管轄である。また、この数字は重複算定等によるものと思われる。

Q2. 「補充教育は学校内で行われるものもあれば、学校外で行われるものがあるが、課外活動の10時間という数字とそれら(学校内、学校外課外活動)の相互関係が不明なので、その点の説明をお願いしたい。」

A 1年生から7年生までの学校外、学校内活動を合算した数字である。10時間を基準として、それ以上の活動では子供の負担が大きくなり、また逆に、その数字を大幅に下回ると十分な効果が得られないので、10時間が適正な数値と考えている。学校内での補充教育に対する教師の活動には2種類あり、1つは、学校に勤務する教師が授業終了後(または授業外で)活動を行うもの、もう一つは外部の補充教師が学校にやってきて活動を行うものである。たとえばダンスなどの活動がそれであり、校内にはダンスの専門家がいるわけではないので外部から来てもらった教師に指導してもらう。校内の補充教育はすべて無償であるが、補充教育の施設での活動は95%ほどが無償であり、5%は有償である。ただし校内の無償の場合も、新たな試みを実践するためにそのための特別経費が必要になった場合などは、父母の理解と協力を得て有償にする場合もある。サークルの重複については、ロシア連邦の調査観察機関によるとほとんどサークルの活動は週2回となっている。

4. 大人の補充教育と人気のある補充教育分野について

Q3. 「補充教育については子どもだけでなく、おとなの補充教育についても規定があるが、

その点についての説明をお願いしたい」

A. この会合の出席メンバーは子どもの補充教育に関する専門家であるが、おとなの補充教育に大きく関連するのは教員養成や医師養成等に関するものである。たとえばいったん教師になっても資格向上のために、ハバロフスク地方発展教育省等の指導の下、種々の認定講習、試験等を受講・受験するための補充活動を行うことが必要であり、そのためのカリキュラム・認定講習内容が規定されている。(この点の詳細については、後述の「極東国立人文大学」の項参照)

Q4. 「12月から新たな宇宙開発等に関する補充教育分野の機関が誕生するとのことで

あったが、現在子どもに人気のある分野、およびその他の動向について説明いただきたい」

A. ②の芸術分野が伝統的にやはり人気がある。①のスポーツ分野もやはり根強い人気があるが、ハバロフスクが技術先端地域であるために最近③④に対する関心が高いところから、新たに先端技術分野が創設されることになった。

5. 教師の負担について

Q5. 「日本では教師がきわめて多忙で、教科活動のみならず教科外活動（課外活動、部活、クラブ活動）に追われ、多大の時間を割かざるを得ない状況である。ロシアのような無償の補充教育機関が充実しておらず、学習塾やスポーツ関係のいわゆる民営の有償（それも高額な）施設がその代替機関となっているために、親の経済的負担が大きい。原則として無償の学校の補充機関的役割を果たしているのがいわゆる〈部活〉であるが、好成績を目指し維持するために、強豪チームほど生徒のみならず教師も祝日、休暇等を犠牲にして（たとえばお盆の3日間と正月4日間以外はすべて練習日）トレーニングに励む。全国大会などの優勝歴（好成績）がいわば教師と学校の社会的と直結しているため、その心理的・時間的負担は大きい。このような矛盾的状况はロシアでは生じていないのだろうか。またその他の問題もあれば教えていただきたい。」

A. ロシアでも土・日の活動を行うし、秋季休暇等でも子どもは家庭で過ごすのではなく多くは、各種補充教育機関で子ども同士、さらには教師と交流しつつ過ごすことが多い。こうしたスタイルは古くからのいわばロシア的伝統であり、そのことを苦痛に思う教師は少ない。（これはピオニールやオクチャブリストなどの集団活動、キャンプ生活等の体験学習を指していると思われる。）ただ、教師が教科外活動の成果（成績）を気にする傾向が皆無とは言えない。これは、各種コンクール・オリンピックなど全体的な活動に関する催事が多いことを考えても一般的傾向といえる。ただ、教師は単に成績だけを気にしているというよりも、子どもとともに活動することを自分自身でも楽しんでいると考えることもできるだろう。

6. 教師の採用について

Q6. 補充教育機関で教師を採用するときの、基本的方針・指標はどのようなものか。

A. 各教科の専門的教師も教育大学の基本的教職コースを修了しなくてはならない。夏季休暇を利用して講習等を受けるなどして、専門性を高めるためにおとな（教員）のための補充教育機関が存在しているのであり、それが子どもの補充教育機関と大きく異なる点である。（この点の詳細は、後述の「極東国立人文大学」の項参照）ここでインタビューを終了し、記念撮影・プレゼントの交換をして辞去。

<2016年11月3日(木曜日)>

ハバロフスク市児童創造宮殿「小公子」(訪問時間: 9:30~14:35)

Муниципальное автономное учреждение дополнительного образования г. Хабаровска «Дворец детского творчества «Маленький принц»

1. 対応者:

① Шинкаренко Татьяна Григорьевна (児童創造宮殿「小公子」宮殿長)

② Всеволодова Ирина Леонидовна (市教育行政庁、補充教育・訓育活動課長)

Управление образования администрации города хабаровска Начальник отдела
дополнительного образования и воспитательной работы

③ Лобанова Елена Валентиновна (児童・青少年創造宮殿「オーロラ」宮殿長)

Муниципальное автономное учреждение дополнительного образования детей
г. Хабаровска «Дворец творчества детей и молодежи «Северное сияние»

④ その他

2. 住所: 680002, г. Хабаровск, ул. Муравьева-Амурского, 17

3. 連絡先: Тел. : (4212) 32-49-61

Email : malenkiprinc@yandex.ru

4. 入手資料: 「小公子」紹介DVD



1. 児童創造宮殿「小公子」の概要 (タチヤーナ・シンカレンコ宮殿長)

現在、子どもの利用者は約 1,500 人（無償席）である。3 歳～18 歳の子も達が通っている。利用料は基本的に無償であるが、一部有償もある。3 歳からの幼児は、契約に基づく早期発達グループで、2 人の教師が担当している。教師は約 45 人、その内訳は、補充教育教師 22 人、コンサート・マスター 6 人、心理士 1 人、合唱指導 5 人、プログラム「宮殿ーギムナジア」担当教師 4 人、教師ー組織者 4 人、メソジスト 3 人となっている。

活動時間は早いときは朝 6 時から、普通は朝 9 時から夕方 9 時までである。ハバロフスク市の学校は、まだ 2 部制が残っており、小学 2 年～4 年は午前中ここにやってきて、午後は学校に通う。従って、朝からのグループと午後からのグループが学年によって別れてやって来る。

館長のタチヤーナさんは、コムソモールスク・ナ・アムーリエ教育大学を 1987 年に卒業、専門としての職業歴は 37 年。指導者としての資格カテゴリーは最上級。ロシア連邦普通教育名誉職員、ハバロフスク市「ハバロフスク 150 年」行政記念章、「教育功労」記念章、ハバロフスク市議会記念章、ハバロフスク地方教育・科学省表彰状など。

活動プログラムは、4 分野にわたって 28 プログラムがある。その内訳は、芸術分野 17 プログラム、技術分野 3 プログラム、ツーリスト・郷土研究分野 3 プログラム、社会・教育分野 5 プログラムである。プログラムから分かるように、この「小公子」では、ダンスや歌、絵画、フォークロア、演劇などの芸術分野に力を入れている。

2. 児童創造宮殿「小公子」の歴史（タチヤーナ・シンカレンコ宮殿長）

児童創造宮殿「小公子」の前身は、1935 年 8 月 14 日付で設立された極東地方ピオネール・生徒会館であった。管轄は、極東地方ハバロフスク市国民教育部であった。1937 年に「極東地方ピオネール・生徒会館」から、「ハバロフスク市ピオネール・生徒会館」となった。1937 年から第二次大戦前までは、会館のサークル活動はその形成と発展の時期で、40 以上のサークルと 70 人以上の教師が活動した。1941 年から 1945 年までは、戦争の困難な時期であったが、活動は休みなく続けられた。

1949 年に、カール・マルクス通りのかつて市議会の建物のあった現在の場所に移った。

この建物自体は、1908 年に建てられたものであるが、改装されて極めて美しい建物となった。1954 年に施設は、「市ピオネール宮殿」の地位を得た。

1950 年から 1990 年は、宮殿は「ピオネールの路線」を歩んだ。戦後の 40 年間は、レーニン名称ピオネール組織の活動の開花の時代であった。ピオネールの教育を行ったのは、学校と緊密に結びついたコムソモールで、労働組合、創造・スポーツ・その他の社会団体及び国家児童施設と協力して行われた。宮殿もその中の一つであった。宮殿の児童集団は、公示されたあらゆる遠征隊やピオネール作戦に参加した。例えば、「レーニンの遺訓への信頼」、「レーニンの星を輝かそう」、「祖国への百万人」、「祝砲、勝利」などである。

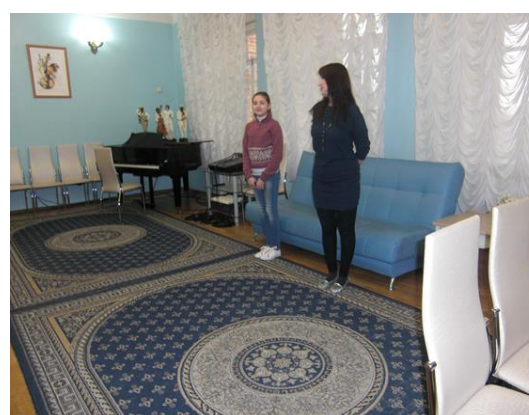
宮殿は、好きな活動を見出した 3,500 人のハバロフスクの青少年のための「我が家」となった。様々な船、飛行機、宇宙ロケットなどのモデルをつくり、ラジオやテレビを組み立て、未来の職業への一步を踏み出した。他の者は、サークルで自分を発見した。裁縫、レース編み、絵画、楽器、写真、歌、踊りなどである。また、故郷の学習で、行軍や探検を行った。ピオネールのアンサンブル「幸せな子ども時代」は、ハバロフスク地方を遙かに超えて有名となったが、それは市、地方、国の多くの舞台上で演じられた。

しかし、ピオネール宮殿は、興味や関心に基づくサークル活動だけでなく、国際友情クラブ「ヴォストーク」の活動も行った。そこでは、偉大な祖国と外国のあらゆる

コーナーとの交流が行われた。市のピオネールの参謀本部「鷺の子」は、市のピオネール団におけるあらゆる関心事の指導者であり、組織者であった。市のコムソモールの参謀本部「ユーノスチ」は、コムソモール組織の活動における当時の党の指導者の第一の補佐役であった。

時代が変わり、1992年に、わが国は新しい経済体制に移行したが、このことは、宮殿にも影響を及ぼした。1992年に、ピオネール宮殿は、「児童・青少年創造宮殿」と称されるようになった。

2000年4月29日に、子どもの希望とハバロフスク市長の決定に基づいて、宮殿は、「児童創造宮殿『小公子』」という名前になった。「小公子」は、サン・テグジュペリの同名の小説から採られた。



1. 陶器制作の部屋、2. コンサートホール、3. モダンダンスの部屋、4. 伝統ダンスの部屋（ザドーリンカ）、5. 絵画の部屋、6. 演劇の部屋、7. 技術実験室、8. 社交ダンス室、9. 幼児（園児）の部屋（3歳～7歳、無料コースと有料コースがある）、10. 心理士の部屋（カウンセラー常駐）、11. IT技術の部屋、12. ファッションモードの部屋

3. ハバロフスク市の補充教育の概要（イリーナ・フセヴォロドワ、ハバロフスク市補充教育・訓育活動課長）

補充教育機関は市の予算で運営されている。現在、ハバロフスク市には、教育局、文化局及び体育・スポーツ局の管轄のものを合わせて、市立の補充教育機関が 33 機関、私立の補充教育機関が 22 機関ある。これは今年の初めのデータである。市立の教育局管轄のものは、宮殿が 2、補充教育センターが 15 の 17 機関で、体育・スポーツ局管轄の補充教育機関が 9 機関、文化局管轄の補充教育機関は 7 機関ある。

文化局管轄のものは、音楽学校や芸術学校などであり、音楽、芸術、美術、ダンス、舞踊、バレエなどの分野をカバーしている。体育・スポーツ局管轄の補充教育機関は、スポーツ学校である。総合的なセンターは、教育局管轄になる。私立の補充教育機関で多いのは、圧倒的に外国語関係である。

連邦法により、管轄は基本的には市の管轄となっており、補充教育機関の教師の給料は市の予算から出る。補充教育をどのように考えるか、また、予算をどのように配分するかは管轄行政長の裁量によるが、ハバロフスク市長は、補充教育を重視しているので、私たちは運がよいと思っている。2年前に技術センターをオープンさせ、また、これまで伝統的な細工の工芸を実施していた会館が狭くなったので、新しく2棟が立てられ、一部はそちらに移った。

ハバロフスク市の補充教育機関に関する統計は、1995年からのもので良ければあるので、メールで送る。

4. 児童・青少年創造宮殿「オーロラ」の概要（エレナ・ロバノワ宮殿長）

児童・青少年創造宮殿「オーロラ」は、ハバロフスク市の北西部、中心から 12～13 km離れたところにあり、1954年に創設された。当時はピオネール宮殿と称していた。16年前（2000年）に、かつての文化会館の建物に移り、2002年2月4日に、現在の「児童・青少年創造宮殿（オーロラ）」となった。建物自体は、ここの「小公子」より広い。

エレナ・ロバノワ宮殿長は、2000年に宮殿長となったが、補充教育には30年以上携わっている。その間、宮殿の名前は変わり、経済体制も変化した。ここでの活動自体は何も変化はなかった。外的変化にも拘わらず、子ども達を大事にして、その個性を発達させようとしてきたこと自体に何の変化もなかった。子ども達は、このような施設で補充教育を受けられるように、私たちも努力してきたし、国もハバロフスクも支援してきた。

ロシアは、外国から見たら余り裕福ではないかもしれないが、ソ連時代から子どもや若者は大事にされてきた。現在もそうである。

オーロラの活動規則は、9時から18時までとなっており、13時から14時が休憩時間となっているが、子ども達の滞在レジムは、8時半から21時までである。約1500人以上の生徒達が、基本的には無償で利用している。教師は約40人で、副宮殿長が4人（教育担当、学術・方法担当、訓育担当及び管理経営担当）、メトジスト4人、教師組織者2人、芸術・舞台監督（指導）など4人、補充教育教師約20人、コンサート・マスター2人などからなっている。

活動分野は6分野にわたり、芸術系が18プログラム（舞踊、独唱、演劇、舞台装

置・演出、絵画)の60グループ、技術系が6プログラム(コンピュータ初歩、ロボット技術、模型実験、衣服デザイン・制作、紙模型)の18グループ、体育・スポーツ系が3プログラム(ボクシング、健康体育)の11グループ、ツーリスト・郷土研究系が3プログラム(スポーツ・ツーリズム、地方オリエンテーリング)の14グループ、社会・教育系が4プログラム(幼児の様々な活動に関するサークル、余暇組織者訓練、クラスノフーツク地区の深化歴史、英語など)の8グループ、自然科学系が2プログラム(生物・エコロジー関係)の4グループ、全115グループが活動している。

子どもの1課業は、6歳の場合20~25分、7歳で30分まで、それ以上の年齢の場合は1アカデミー時間(45分)である。また、1年間の学習グループの場合の人数は15人、2~3年間の学習グループの場合は、10~15人までとしている。

自作プログラムを認定している教師は、実施されるプログラムの目的や課題及び自作の教授・訓育過程の特質に応じて、教育期間、グループの構成人数、年齢制限、評価システム、課業時間を個別に定めることができるが、その際には、学術・方法会議の同意を必要とする。

5. 補充教育のソ連時代との比較について

●赤い服の女性：現在は、イデオロギー的な影響は強くなり、薄まった。ソ連時代は、社会主義のイデオロギーが尊重されていたので、そうした思想が補充教育にも、課外活動にも入ってきてはいたが、活動自体には影響はなかった。

子ども達は、自分の個性や興味・関心を発達させることに集中しており、教師も自分の専門を如何に子ども達に伝えるかに熱中していた。これは、政治的なイデオロギーや体制の変化にも拘わらず、現在もそうである。

ソ連時代に教えたことは、良いことを教えていた。年下の子どもを助けたり、老人を尊敬するとか、道徳心を育成するなど、現在よりも徹底していた。悪いことはしないで、積極的に良いことをするように教えていたし、社会全体もそうした雰囲気があった。このことは、現在もそうであるが、良いことをするように教えている点では、何の変化もないと言える。

現在が良いことといえば、自由になったことである。活動は自分で選べるし、新しいサークルを作るにしても自由に作ることができる。ソ連時代は、国からの監督の度合いが強かった。

●エレナ・ロバノワ(オーロラ)宮殿長：ソ連時代との比較でいえば、昔より現在の方が興味や関心に応じた選択肢の幅が広がった点である。

現在は、子どもや保護者のニーズに合わせて活動することを最も重視しており、この点が良いところである。ソ連時代は、定着したシステムに合わせて活動しなければならなかったもので、あまり変化はなかったが、現在は、子どもや親のニーズをきめ細かく調査して、それにできるだけ対応するようになっている。

現在は、世界的にも変化に対応する能力の育成が目指されており、変化への対応ということがロシアでも目ざされている。

●イリーナハバロフスク市補充教育・訓育活動課長：ロシアでは、補充教育を含めて、教育全体が5年前とは政策がずいぶん変わってきた。以前は、学校での学習が重視されており、補充教育は大して注目されていなかったが、2012年から補充教育の役割が重視されるようになった。

以前は、美術や芸術分野の補充教育が多かったが、最近ではテクノロジー分野や科学研究プロジェクトなどのサークルが増大しており、国の政策としてもそうした方向を重視する傾向にある。

また、補充教育の教師や指導者に対する要求も変わってきた。以前は、何か専門があれば教えることができたが、現在は、教育関係の高等教育を受けていないと教えるこ

とはできなくなりました。

以前は、若者はこのような補充教育機関で仕事を希望する者はほとんどいなかったが、現在は、スタッフの40%は若い人である。

●エレナ・ロバノワ（オーロラ）宮殿長：現代の補充教育の発展概念は、第一に個人化であり、個別のアプローチが主流になっていることである。補充教育の課題は、生涯における人間形成の軌跡を考慮しながら、子どもの頃からその発達を支援することである。ソ連時代のピオネールやオクチャブリャータはチームとして活動すれば良かったが、つまり、個人としての主張は求められなかったが、現在は、チームとして活動しながらも個人のニーズや課題を大切にすべきだと考えられている。子どもは、興味関心やそれぞれの適性が異なっており、そうした子どもの適性を発見しつつ、子どもの頃から伸ばしてあげることが重要である。

●イリーナハバロフスク市補充教育・訓育活動課長：個人化に関して言えば、プーチン大統領は、1年前に、生徒の社会的団体の組織に関する命令を出した。ソ連時代はピオネールやオクチャブリャータといった名称だったが、名前は全く異なるが、そうした生徒の社会的組織が必要だと考えられるようになった。つまり、個人の重視ということで、共同での社会的活動や奉仕の精神が弱くなっているため、新しい体制の下で、そうした活動の復活が求められている。

また、補充教育機関の役割について言えば、学校とは異なり、独自の課題を遂行しており、「補充」という言葉には賛成していない。私たちの合意によれば、学校は主に知識の獲得を課題としているが、補充教育機関では生徒の心の形成を課題としていると言える。学校では、関心があるがなかならぬが、同じ科目を学ばなければならない。学校の教師は点数の評価をするので、どうしても子どもはそれに圧倒されるが、補充教育機関ではそうした評価を行わないばかりか、自己表現や自己主張を最大限尊重し、それを大切にする。ここでは、学校の成績に関係なく、自分の好きなことがやれる。自分の好きなことが存分にやれると言うことは、子どもの自己向上に繋がり、学校の成績の向上にも良い影響を及ぼしている。学校の成績が悪くても、ここに来ると子どもはのびのびと活動し、顔が輝いてくる。学校の成績が悪くても、歌や演劇や手芸やスポーツなどが上手だったりするので、みんなに尊敬され、認められ、自信がついてくるようになり、子ども達は生き生きとする。学校では発表のチャンスがあまりなくても、ここでは誰でもできるので、子ども達はここに通ってくるのが好きだ。卒業してからも子ども達を見守っているが、卒業後もここにやって来る。学校の成績が悪くても、補充教育機関のお陰で自信がつき、社会人になって成功している者も多い。

率直に言うと、ここでは子どもより教師の方が難しい。というのは、学校では、子どもは行かなければならないので、教師は頑張らなくても子どもはやって来るが、ここでは子どもを如何に引きつけるか、子どもの興味や関心に如何に応えるかが直にひびいてくる。その意味で、この教師は、学校の教師以上に、子どもの一人ひとりの個性や適性や関心を見極めながら、子ども達の好奇心を引きつけ、能力を伸ばそうと苦心しなければならない。真冬でも、雪が降っても、どんなに寒くても、子ども達はサボらないで、ここにやって来る。親に言われてやって来るのではなく、自分が大好きで自分からやって来る。

補充教育機関の教師は、昨日お聞きになったかもしれないが、資質の向上に努めなければならない。3年ごとに研修があり、「教育発展研究所」で研修を受ける。研修は2週間から1ヶ月ほどであり、研修の終了時には試験を受けて合格しなければならない。試験の形態は、論文だったり、プロジェクトの企画だったり、実技だったり、様々である。大学を卒業後、ずっと同じことを子どもに教えるのではなく、3年ごとに新しい知識や技術を獲得したり、子どもへの対応の仕方を工夫したりしながら、資質の向上に努めなければならない。

「教育発展研究所」は、89の連邦構成主体に同じような施設がある。ハバロフスク地方では、ハバロフスク地方教育発展研究所がある。ハバロフスク市に住んでる教員はここに通うことができるが、通えない遠い町などに住んでいる場合は、ハバロフスク市の寮に泊まって、研修を受けることもできる。僻地の場合などは、E-mailなどで資料のやりとりをしたり、パソコンを利用したり、遠隔教育を利用して受けることもできる。

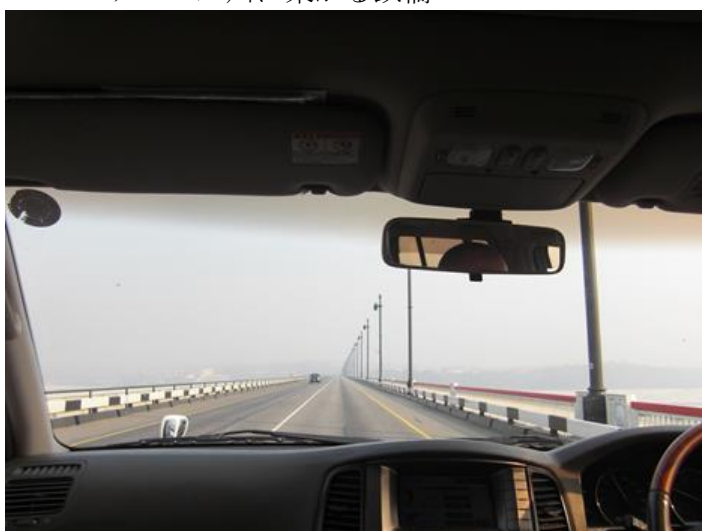
※ハバロフスク地方は、青森県と姉妹地方になっており、この「小公子」には日本からの代表団がしばしば訪れるとのこと。1996年にみちのく銀行がグランドピアノを送っていた。以前は、ハバロフスク市にもみちのく銀行の支店があったが、現在は無い。



<2016年11月4日（金曜日）>

ユダヤ自治州ビロビジャン市（訪問時間：10:00～17:30）

アムール川に架かる鉄橋

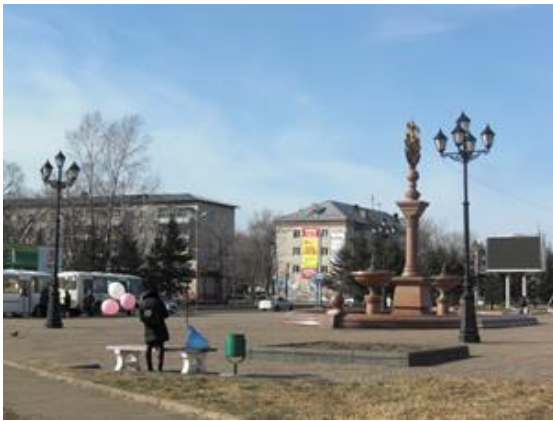


ビロビジャン入り口（ハバロフスク市内から約150km）



ビロビジャン駅前

ビロビジャン駅



入植者のモニュメント



街角



シナゴーク



ビロビジャンユダヤ教団「フロイト」



無名戦士の墓



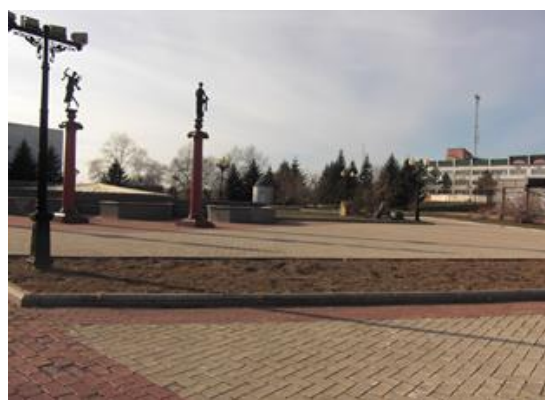
無名戦士の墓



街角



コンサートホール



ピロ河



文化会館



<2016年11月5日(土曜日)>

太平洋国立大学補充教育学部 (訪問時間: 10:00~13:00)

Факультет дополнительного образования «Тихоокеанского государственного гуманитарного университета»

1. 対応者: Нестеренко Ольга Борисовна (補充教育学部長)
2. 住所: г. Хабаровск, Расположение деканата: ауд.230А переход во 2 корпус
3. 連絡先: Тел.: (4212) 42-05-98
Email: fpk-dvgnu@yandex.ru
4. 入手資料



1. 補充教育学部の概要

ハバロフスク国立教育大学から極東国立人大学となり、昨年太平洋国立大学になったばかりで、編成変えなどが進んでおり、学部の概要(小冊子)はない。他の学部は、いくつかの学科に別れているのが普通だが、この補充教育学部は一つの構成になっていて、別れていない。教員は、オーリガさんは補充教育学部の学部長として学部全体の調整・管理を行っているが、補充教育学部としての専任教員はおらず、他の学部や学科から来て教えており、年間150人くらいが関わっている。スタッフは次年度も教える場合もあるが、1年ごとに代わる場合も多く、これも様々である。

補充教育学部で学ぶ学生は年間1,000人くらいである。カリキュラムは様々で、16時間のものから504時間のものまである。プログラムは、1年間のものから2～3年間継続するものまである。

ここで学ぶ学生は、中等教育終了後直ぐにこの学部に入ってくるのではなく、ほとんどは就職し社会人として働きながら学びに来ている者で、既に高等教育を持っている者も多い。高等教育を持っている者には、教育関係の高等教育を持っている者もいれば、違う専門の高等教育を持っている者もいる。この学部を卒業した後は、以前の職業を継続する場合もあれば、ここで学んだ教育関係の仕事に就く場合もあり、様々である。

2. 大学教員の任期制について

専任教員は、1年契約か3年契約がある。契約を締結するにあたり、教授や助教授の席が空いていれば、コンクールがあり、席を埋めることになる。競争率は結構高い。選抜された後、1年契約か3年契約かの労働契約を結ぶことになる。その他、他大学からの非常勤講師も教えに来るが、その場合は労働契約ではなく、普通の契約（サービス提供契約）を結ぶことになる。このサービス提供契約は、非常勤講師の場合だけでなく、例えば建物の修理や設備の補修の場合などと同じものである。

契約が1年か3年かは人事部にデータがあり、それらの比率についてはここでは把握していないが、補充教育学部の非常勤講師の割合は、10～30%程度である。契約が1年でも3年でも、解約しない場合には延長することも可能である。

契約制度そのものは、ずいぶん前（ソ連時代）からあった。講師から上級講師、助教授、教授へとなる場合には、コンクールや書類審査があり、人事委員会で決定する。以前は教師の契約は5年であったが、学生数の減少などにより、あまり合理的ではないと考えられるようになって、契約は短くなった。ハバロフスク国立教育大学や極東国立人文大学の時には、ずっと5年契約であった。特に、1990年代の後半からの学生年齢の若者の減少、少子化、極東から他の地域へ移住するといった人口流出などで、大学の教員の数が余るようになったことが大きな理由である。ハバロフスクなど、極東から他地域へ住みたい場合は、大学受験の時に他の地域にある大学、例えばモスクワやサンクト・ペテルブルクを選択して、出ていく若者も多い。

契約が1年や3年の場合、学生や院生の教育にどのように責任を持つかは、なかなか言うことが難しいところがある。以前は5年契約だったのでこのような問題はなかった。1年契約か3年契約かになったのはつい最近であり、太平洋国立大学になったのは昨年なので、院生が指導教員から見離されたという事例はない。しかし、指導教員が他の大学に移っても、この大学の教員だけでなく、他大学の教員を含めて複数の教員の指導を受けることができるので、何とか解決の方法はあると思っている。

3. 補充教育の最近の動向について

補充教育は最近人気が高まっている。

以前は、卒業証書に書かれていない科目やレベルの教育を担当することができた。つまり、小学校でも幼稚園でも教えることができたが、2012年の終わりに連邦法№273が導入されて、現在は、卒業証書に書かれている科目や分野しか教えることができなくなった。

2012年までは、例えば、教育大学を卒業していれば、教える科目はいろいろ担当することができた。以前は、数学の専門で卒業した者は、小学校で教えることも、幼稚園で教えることもできた。理科の教師が、小学校で国語を教えることもできた。しかし、現在は、専門が理科の教師で、20年間幼稚園の園長をやっていた者でも、幼稚園で教えることができなくなり、この補充教育学部にやってきて、そのための資格変更の補

充教育（補充職業教育）を受けて、資格を取るために、ここにやって来る。その逆の場合もある。幼稚園の教師が中等学校の教師になりたいときは、ここでその為のプログラムを受けて、中等学校に就職する場合である。このような現象のために、補充教育学部は大変人気が高い。また、2010年から導入された制度であるが、3年に1度、資格の再認定を行うことになり、そのための研修をここの補充教育学部で行うので、補充教育学部は大変活気がある。その理由は、教師達のレベルがダウンしてきたという事情がある。資格を有した教員が教えているかどうかについて、定期的な認証評価があり、不的確と判断されれば、こうした学部で「第二教育」（再教育）を受けなければならない。

勤めながら、授業を受ける場合は、ほとんどが夏休み、春休み、秋休みなどの休みを使って通うことになるが、遠い場合は、前述のように遠隔教育を利用する。

4. 大人の補充教育について

大人の補充教育は2つに別れる。一つは大人の補充普通教育であり、もう一つは補充職業教育である。前者は一般的には有料である。前者の場合で、仕事はしているのだが、外国語を学びたい場合、例えば週2回、仕事が終わってから、夕方6時から8時か9時頃まで、大学や補充教育機関のしかるべき有料講座で学ぶことになる。この場合は、大人であれば誰でも講座に入って学ぶことができるが、有料である。2年か3年学んで終了したら、卒業証書とは異なるが、大学から学んだという修了証書を受け取ることができる。大学によっては、無料の補充講座を設けることがある。

ここの大学ではないが、ある大学の場合は、年金生活者のために無料の大人の補充教育を提供している。例えば、土曜日や日曜日にテーマ別の補充教育を設けるので、興味があれば受講することができる。この場合は、仕事のためではなく、人生を豊かにしたり、余暇の充実のために行うものである。大学のスタッフがボランティアで教える場合が多い。これは、補充普通教育の場合である。

補充職業教育の場合は、いろいろなバリエーションがある。この大学の補充教育学部の席は、全部有料である。支払いの形態は様々である。以前取得した専門とは異なる専門を学ぶ場合、例えば、経済やマネジメントが専門であったが、カウンセラーになりたい場合は、全て個人で支払はなくてはならない。専門が全く異なる場合は504時間コースになる。終了すれば、大学卒業の卒業証書（ディプローム）を受け取ることができ、その専門の仕事をするすることができる。

2012年の連邦法改正による資格取得の場合は、大学では無料になるわけではないが、勤務先や所属先の管轄機関が支払うケースが多い。圧倒的には、地方の教育・科学省が大学に支払うことが多い。2012年以前は、連邦の教育・科学省が支払うこともあったが、現在はそれはない。

補充教育コースには、504時間コースの他に200時間コース、最も短いもので16時間コースなどがある。先の例で言えば、理科の先生が幼稚園の園長を継続する場合、重なる専門も多いので、長い時間のコースでなくても、例えば200時間コースで良い。どのコースになるかは、学んだ経歴により、入学するときに決められる。全く専門が異なる場合には、504時間コースになる。ただし、200時間以下のコースの場合には、卒業証書ではなく、修了証書になる。

5. 補充教育の省庁間調整及び課外活動との関係について

3つの省の管轄の調整については、教師の基準については最近統一され、教育学や心理学の知識が必須となった。プログラムについては各補充教育機関でそれぞれの担当教師が自主的に作成する。施設自体の基準は、各省によって定められる。

ФГОС に子どもの補充教育についても規定され、子どもは補充教育機関の種類や管

轄に関係なく、補充教育を受けなければならなくなった(?)。ФГОСには、子どもに育成しなければならない義務づけられる能力(コンピテンシー)について書かれており、学校だけでは足りないので、補充教育も受けることが規定されている。

補充教育機関はФГОСに規制されるわけではないが、週10時間の課外活動は補充教育によって行われる(?)。課外活動とは補充教育のことである。例えば、学校の外で、音楽などを週10時間以上受けている場合は、学校の中での課外活動には全く参加しなくても良い。どこで受けるかの決定は、子どもと親の選択による。しかし、その場合は申請書を書かなければならない。

音楽学校や芸術学校、スポーツ学校などの補充教育機関があるが、それらは管轄が教育・科学省だったり、文化省やスポーツ省だったりするのだが、必ず普通の初等中等学校に通った上で、そこに通うことになる。つまり、ダブルスクールのイメージである。芸術学校やスポーツ学校だけに行くことで教育が完結することはない。一般的には、普通の学校が終わってから、放課後にこのような補充教育機関に追加的に通うことになる。

普通の学校の教育よりも、補充教育の方が子どもの個性や関心や能力を伸ばす上ではずっと大きな役割を果たしている。学校と補充教育機関の場合は、教授システムが異なっており、学校の場合はどうしても教師の指導の下に評価が行われるが、補充教育ではそのようなことはほとんどないので、子どもが活発になり、自己表現や自己の能力をアップすることができ、生き生きとする場合が多い。

ロシアの補充教育機関でも、それぞれのレベルのコンクールやオリンピアドや競技会などがあり、その成績しだいで教師が高く評価されることはあるが、成績が悪くても、そのことによって教師の評価が下がるということはない。しかし、生徒の個性や個別的な能力のアップだけではなく、コンクールでよい成績を取れば教師の日などで、表彰されるので、それに向けて頑張る先生も多い。

6. 社会的有用活動について

ソ連時代は、ピオネール組織やオクチャブリャータなどが学校でも補充教育機関でも組織されて、社会的有用活動を活発に行っていた。新生ロシア連邦になって、教育活動が個人に特化される傾向が強くなった状況があり、最近、児童の社会的活動を組織する動きがある。

「全ロシア生徒運動」(ЗДШ:Российское Движение Школьников)というが、2015年10月25日に、プーチン大統領は全ロシア国家的児童・青少年組織(Общероссийская общественно-государственная детско-юношеская организация)の創造についての大統領令№536を出した(10月29日署名)。これは、若者の訓育分野における社会的国家政策として打ち出されたもので、ピオネール運動の組織形態を利用して、ピオネールの合い言葉であった"Будь готов! Всегда готов!"をスローガンとして掲げている。8才からの任意加入である。

設立大会(第1回大会)は、2016年5月19日にピオネールの組織された日に合わせてモスクワ大学で行われた。組織の目的は、ロシア社会に固有の価値体系に基づく人格の形成である。作られたばかりの組織なので、そんなに情報は多くはないが、ハバロフスク地方に関して言えば、同僚の一人も参加したのだそうだが、一昨日会ったオーロラのエレナさんのところの校外キャンプ"Созвездие"で、ハバロフスク地方の市町村の学校の代表者たちが集まって、ハバロフスク地方の「全ロシア生徒運動」組織がつくられたという。このような組織が、現在、ロシア連邦の各構成主体で組織されつつある。「全ロシア生徒運動」の組織の下で、様々な社会的活動やボランティア活動、軍事愛国活動などが実施される予定である。まだできたばかりなので、これからどのような活動が行われるか、はっきりとしたことは言えない。

7. 資質格向上及び研修制度に関して

資質向上及び研修制度に関しては、普通の学校の教員とほぼ同じシステムで行われる。総合教育の分野では、この補充教育学部で心理学や教育学のテーマの講義を学ぶが、各専門分野に関しては、専門分野の各学科や学部の授業を受講することになる。普通の学校の教師も補充教育機関の教師も、この大学でカリキュラムに基づいて、1週間なり2週間のコースに出席する。

研修や資質向上は、この大学でも実施しているが、ここだけではなく、ハバロフスク地方教育発展研究所(Хаваровский краевой институт развития образования)でも行うが、ここで行われるのは補充教育のみである。地方教育発展研究所は、補充職業教育の機関で、ハバロフスク地方の教育・科学省の管轄下にあり、ハバロフスク地方の予算から出費される。このような補充教育の研修施設は、ハバロフスク地方には他に5カ所あり、どれを選んで受講しても良い。自主的に自分の能力や資質を向上したい場合には、実費で受けることもできる。遠隔教育が発展しているので、ハバロフスクではなく、モスクワの有名な大学の補充教育を受けたいと希望する者も多くなった。

8. 公立と私立の補充教育機関について

私立の子どもの補充教育機関の場合、必ずしもお金持ちの子どもだけが通うのではなく、普通の家庭でも、自分の子どもに良い教育を受けさせたいという親の希望で通わせる場合や公立では提供していない種類のクラブなどがあれば、通わせたりする。これは、現在のロシアでは普通に行われている。アパート暮らしで、そんなに裕福ではなく、また、海外旅行にも行かず、車が1台しかない家庭でも、子どもの補充教育にお金をかける親は多い。

例として、「小公子」の場合を挙げると、この施設は市の中心にあるので、校外の団地に住んでいる家庭の場合は、何時間もかけてここに通うよりも、団地の中にある近くの私立の補充教育機関を選んだりする。

公立の補充教育機関の場合でも、予算が少なければ親から徴収する場合もある。また、教師で選ぶ場合も多く、これは公立・私立を問わない。公立と私立の補充教育機関に原則的な違いはない。これは明確に言えることではないが、公立では提供できない分野も多いのに対して、私立の方がより広い分野の補充教育を提供できる可能性が高いと言えるかも知れない。

公立の補充教育でも、良い資料や教材を利用する場合には、お金を取る場合も多いので、私立に比べて公立が悪いとも言えない。ハバロフスク市の教育局の方針は、予算が限られているので、有料の教育サービスもどんどん提供するように勧告している。従って、同じダンスのサークルでも、補充教育機関によって異なるが、有料席と無料席がある。また、近くのスポーツ学校の新体操のサークルの場合だが、優秀な子は無料で入れるが、余り上手でない子は、それでもやりたいのであれば、有料になるという例もある。そのやり方は、本当に様々で、一概には言えない。サークルの希望が多くて、席が足りない場合にどのように選別するかは、それぞれの館長によって異なる。

公立の場合は優遇措置があり、子どもが3人以上の場合や両親のいない子どもは優先され、無料で入れる。片親の場合は、昨年までは優遇されたが、ロシアの法律が変わって、今年から優遇措置はなくなった。貧しい家庭の子どもも同じような優遇措置がある。

音楽学校や芸術学校の場合は、学校の方針にもよるが、成績で選ぶことが多い。スポーツ学校もそうである。しかし、全部がそうであるということではなく、施設によって異なる。

モスクワ班①調査報告書

2017年2月27日～3月4日（5日間）

澤野由紀子
井上まどか
タスタンベコワ クアニシ

日付	時間	移動・調査機関
2017年 2月27日（月曜日）	成田発 13:10 (SU263) シェレメチェボ着 17:35	ブダペストホテルへ移動
2月28日（火曜日）	① 10:00～12:00 ② 13:00～15:00	① ロシア連邦教職員専門性向上・再教育アカデミー ② 聖ペトロフスキー正教中等普通教育学校
3月1日（水曜日）	③ 12:00～13:30	③ モスクワ市オープン教育大学
3月2日（木曜日）	④ 11:00～12:30 ⑤ 14:00～15:00	④ 「教員新聞」 ⑤ エヴリカ教育政策問題研究所
3月3日（金曜日）	⑥ 10:00～12:00 シェレメチェボ発 20:00 (SU262)	⑥ 聖チホン正教人文大学 シェレメテヴォ空港へ移動
3月4日（土曜日）	成田着 11:40	

<2017年2月28日（火曜日）> 午前

ロシア連邦教職員専門性向上・再教育アカデミー（訪問時間：10:00～12:00）

Федеральное государственное автономное образовательное учреждение дополнительного профессионального образования «Академия повышения квалификации и профессиональной переподготовки работников образования» (ФГАОУ ДПО АПК и ППРО)

1. 対応者：タチアナ V.ボローチナ（歴史・社会・政治教科及び法教育講座長）他 6名
2. 住所：г. Москва, Головинское шоссе, д. 8, корп. 2а (Станция метро «Водный стадион»)
3. 連絡先: +7 (495) 995-10-54, +7 (495) 787-60-58 факс, www.apkpro.ru
4. 入手資料: «Вестник Образования. Официальное издание Минобрнауки России» №9 2016, №1-3 2017; Сетевой научно-методический журнал «Современное дополнительное профессиональное образование» №3 2016.

ロシア連邦教職員専門性向上・再教育アカデミー（以下、アカデミー）では「歴史、社会・政治教科及び法教育講座」のタチアナ・ボローチナさんに連絡をとって、受け入れを依頼した。ボローチナさんは2004年から欧州評議会の「ヨーロッパ的民主主義のための教育」プロジェクトのロシアでの代表を務めており、2005年から自身が講座長である「歴史、社会・政治教科及び法教育講座」においてシティズンシップ教育センターが設置され、当時ロシアにおいて国内外からの協力を得ながら積極的な展開をみせていたシティズンシップ教育の推進者の一人である。ボローチナさんとは2006年10月、2007年3月、2011年10月に会ってヒアリング調査を行った経緯がある。

今回の受け入れの形式は前の2回にあったように（1回目は連邦教育科学省を訪問した際に会った）、ボローチナさんの講座の部屋で彼女と講座の教員に非公式に話を聞くのではなく、アカデミー副所長室の横の大きな会議室においてラウンドテーブル形式で出迎えられた。また、この形式になったからだと考えられるが、時間が限られており、ヒアリングというより、アカデミー側から次々と三つのテーマで発表があつて、質疑の時間が非常に制限された状況になった。

アカデミー側の発表テーマ

1. リュドミラ・クロチコヴァ、教育・心理学講座教授「訓育における国家政策。2025年までの訓育発展ストラテジー：基本方針」
2. タチアナ・ボローチナ、歴史、社会・政治教科及び法教育講座長「現代ロシアにおけるシティズンシップ教育(граждановедческое образование)の質及び発展の展望に関する全国調査」
3. アレクサンドル・プルトチェンコフ、歴史・社会・政治教科及び法教育講座教授「生徒たちの市民アイデンティティ育成の一環としての生徒自治会の発展」

各発表の概要

1. リュドミラ・クロチコヴァ「訓育における国家政策、2025年までの訓育発展ストラテジー：基本方針」

現代の子どもたちは親世代に比べて、情報化の進行に早く対応できる賢い子どもたちである。それと同時に、彼らの価値体系、倫理的な側面、良心的な側面、人間的な側面において様々な課題が生じている。すなわち、教育の訓育的成果には課題があるということである。これを受けてロシア政府は2015年5月29日付で「ロシア連邦における2025年までの訓育発展ストラテジー」を決定した。ストラテジーの基本方針は次のとおりである。①家庭の決定的役割を認め、次世代の訓育におけるロシア社会と国家の様々な機関の取り組みの統合のための条件を整備する、②親の子どもたちの訓育に対する責任の向上、親の社会的、教育的コンペテンシー、コミュニケーション能力の向上の促進に基づいて、家庭訓育の支援を整備する、③ロシア連邦の教育機関における訓育活動の効率を上げる、④子どもたちの社会化を成功させ、教育、文化、スポーツ、科学、探検、観光・ツーリズムとその他機関の訓育的可能性を統合させるための社会文化的インフラストラクチャーを形成する、⑤障害児を含めて、社会と国家の保護を必要とする子どもたちの訓育インフラストラクチャーへの平等なアクセスを保障する。

質疑応答

質問（プルトチェンコフ）：日本には訓育に関する基本方針のようなものがあるか。

答え（澤野）：戦後から日本では道徳は教育活動として行われてきたが、新学習指導要領

において教科として導入されたので、3年後には一つの教科として教えられることになる。教科として教えられる「道徳」はどのように評価されるかは大きな課題である。

2. タチアナ・ボローチナ「現代ロシアにおけるシティズンシップ教育の質及び発展の展望に関する全国調査」

2025年までの訓育発展戦略において子どもたちの市民・愛国心教育が重視されている。2015年にシティズンシップ教育の質について調査が行われた。調査の主催者は教育・科学質評価連邦局(Федеральная служба по надзору в сфере образования и науки)であり、「教員新聞」は情報サポート、アカデミーは方法論的支持をした。調査の目的は、児童生徒の市民性の形成、社会的能動性の向上における教育制度の発展の展望を明らかにすることであった。調査の主要課題は、1) シティズンシップ教育の現状を明らかにすること、2) 諸外国で実施しているシティズンシップ教育と比較して、ロシアの課題を明らかにすること、3) シティズンシップ教育の今後の発展方向を定め、教員研修プログラムに取り入れること、4) これらについて社会に広く公表していくことである。調査方法は、マルチプルチョイスのテストとオープンエンドのテストである。テスト問題の内容は「社会科 Обществознание」という科目のテーマに相当する次の項目で整理された。①寛容と多様性、②人間の法的基準と責任、③名誉と尊敬、④アイデンティティと愛国心、⑤社会的サポート、個人の自己実現と達成、⑥現代世界における協同と平和への愛(миролюбие)、⑦変化への開放と準備(открытость к и готовность к изменениям)、⑧民主的管理と人民権力(демократическое управление и народовластие)、⑨経済的リテラシーと職業的成功(профессиональная успешность)。さらに、評価される次の5つの分野が定められた。それは、市民的知識(社会科の知識のみならず、人文、自然科学、数学のすべての科目を横断する知識)、市民的技能(гражданские умения)、社会的プロセスの理解、市民的立場、市民的活動の経験。

調査対象は42の構成主体から248人の学校管理職(校長)、3,452人の学校教員、5,271人の第8学年生である。

校長たちに聞いた質問の一つは、どのような社会的環境は子どもたちの市民的育成に影響するか。その答えは多い順に図書館、補充教育機関と映画館である。社会的な問題として上げられるのは、家庭の貧困、アルコール依存症などである。さらに、重要なこととして校長たちが教員の積極性を指摘したが、多くの教員が決断をする立場に立ちたくない傾向が強いことを強調している。また、生徒たちについては、規律の正しさ、問題行動(喫煙、飲酒、麻薬など)の少なさを指摘している。シティズンシップ教育における重要な方向については校長らが愛国心教育を取り上げている。

教員に聞いた質問の中で児童生徒の問題について聞いたとき、欠席が多いことが指摘された。シティズンシップ教育の中でどのような教材や資料を使うについては、国が定める教材・副教材、指導書、インターネットからの情報という順に挙げられた。学校生活の中で変わってほしいことについては、もっと親に子どもの教育に参加してほしいという答えが多かった。

生徒たちに自分たちのアイデンティティのよりどころは何かと聞いたら、自分の家庭にアイデンティティを求める(子どもである、兄弟であることなど)が多く挙げられた。ロシアに増えている移民についてはどう思うかという質問については、移民が増えても良いが、ロシア社会のルールに従うべきだという答えが多かった。人生で成功するために必要な条件については、良い教育を受けることが最も多く挙げられた。学校生活について改善

してほしいことは、もっと親と地域社会とのかかわりがあってほしいという答えが多かった。生徒たちの情報源はテレビ、ラジオ、インターネットという順になっている。社会的参加について聞かれた際に、ほとんどの生徒が社会的組織、団体には入っていないことが明らかになった。そして、最後に「良き市民」とは誰かという質問に対して、自分の権利と義務をよく知り、責任感のある人間だという答えが多かった。

質疑応答

質問(井上)：①連邦レベルで親の学校生活への参加を促す規定はあるか。

②生徒たちの欠席が多いということがあったが、日本には不登校、引きこもりという問題がある。ロシアにはそういう問題があるか。

答え① (ヴィソツキー)：①伝統的に各学校には父母会(родительский комитет)があって、それは現在もいろいろな形態で機能している。それとは別に学校評議会がある。これは国家・社会的管理(государственно-общественное управление)の枠組みで機能している。その評議会のメンバーには選挙を通して保護者の代表者が入る。学校評議会は公式な組織であるが、父母会は非公式な組織である。父母会は子どもたちのレジャーの組織化、余暇活動の実施、施設整備の支援を行うことが主な活動内容である。学校評議会への親の参加は始まったばかりなので、まだ課題が多い。

答え② (ボローチナ)：日本の引きこもりや不登校に相当する統計は取っていない。しかし、欠席の主な理由は授業時に遊びに行ってしまうことである。つまり、授業時に遊んで、下校時間に合わせて帰宅するといったような欠席の形態である。

質問 (プルトチェンコフ)：日本では市民教育はどのように行われているか。

答え (澤野)：日本の中学校と高校(ロシアでいうと7年生から12年生まで)では社会科の「公民」という授業で市民社会について知識を教える。その他に「総合的な学習の時間」においてプロジェクト活動を通して、実際の行動・参加を促す。

質問 (井上)：プレゼンテーションのスライドには校長たちが子どもたちの市民的育成に影響するものとして挙げた図書館と補充教育機関のほかに宗教団体ともあったが、どのような組織か。

答え (ボローチナ)：それは教会の日曜学校とか、それから学校の「宗教文化と世俗倫理の基礎 Основы религиозной культуры и светской этики (ОРКСЭ)」という教科を教えるさいに、学校が授業のサポート役として宗教団体の関係者を招待できる。

(ヴィソツキー)：宗教団体との関係は非常にセンシティブな問題である。学校は世俗的な場所なのに、まだ学校の教員や親、そして宗教団体の関係者はそれを十分に理解できていないところがあって、必要以上に学校と宗教団体とのかかわりを望む場合がある。でもこれは法律に反している。

質問 (井上)：日本では学校の地域学習として子どもたちが地域にあるお寺や神社に行くことがあるが、それに対して日本人の親の中で反対の人がいる。ロシアの場合はどうか。宗教団体の関わりに反対する親がいるか。

答え (ボローチナ)：ОРКСЭは多民族国家であるロシアにある4つの主要宗教(ロシア正教、イスラム、ユダヤ教と仏教)と世俗倫理と世界の宗教という6つから構成されている。この教科は初等教育第4学年から教えられるので、親の相談して決める。伝統的にロシア正教が強い地域ではロシア正教、イスラム教が強い地域ではイスラム教が選ばれるこ

とが多い。あるいは、例えば、タタールスタンのようなところではイスラム教より世俗倫理を選んでいる親が多い。すべて親の選択次第なので、仏教を二人だけが選んでも、その二人の子どものために仏教について教える。

(ヴィソツキー)：重要なことは、大都会、中心地域(モスクワ、サンクトペテルブルクなど)の親ほど宗教団体とのかかわりに批判的な親が多く、逆に地方で(チェチェン、ダゲスタン、コストロマなど)では肯定的な親が多いということである。これは日本でも同じであろう。

3. アレクサンドル・プルトチェンコフ「生徒たちの市民アイデンティティ育成の一環としての生徒自治会の発展」

市民性の育成は、生徒たちの積極的な活動をなくしては成り立たない。私はここ15年間教育省の指示で生徒自治会(ученическое самоуправление, совет обучающихся)に関する研究をしてきた。ロシア教育アカデミーとここの教員研修アカデミーで続けてきた研究と政策提言の結果、2012年に制定された新しい教育法の第26条に生徒自治会 совет обучающихсяに関する規定が入った。教育法でも規定されているように生徒自治会は生徒たちのイニシアティブによって設置されるものである。そのような生徒たちのイニシアティブはもちろんのこと、教師のそのための活動をなくしては成り立たない。したがって、この生徒自治会に関する教員研修は重要である。この15年間の教員研修アカデミーで取り組んできた教員研修の実施を通して生徒自治会の問題について調べてきた。そこで明らかになっているのは、教師たちが学校に通っていた頃には生徒自治会という組織が存在していなかったから、生徒自治会のイメージをつかめないので、なかなか理解が深まれないことである。つまり、自分が経験していないことを子どもたちに教えなければならないということである。大きな問題は、生徒自治会は子どもの社会的組織(детские общественные организации)と置き換え可能なものとして理解されていることである。社会的組織に関する別の法律は子ども社会的組織は8歳と14歳から子どもの社会的組織の設立が可能であると規定されているが、これは生徒自治会とは全く別のことである。しかし、子どもの社会的組織と生徒自治会の両方が子どもたちの市民的育成が行われる重要な場である。先ほど話があった学校評議会には教員、親、地域社会と並んで生徒自治会が独立した組織として参加する。しかし、子どもたちがその重要性を理解し、遊びではなく、真面目に参加し積極的に活動に取り組めるためにはそれをサポートする教員の研修が必要である。近年この生徒自治会の意義の拡大に向けた動きがある。それは2014年に大統領令決定により「全ロシア生徒運動 Российское движение школьников」が設置された。この運動の目的は、生徒自治会、子どもの社会的組織などの活動を方向づけることである。特に、プロジェクト活動などを通して、地域社会の問題への取り組みを組織化することである。

次に、「金融リテラシー финансовая грамотность」について述べておきたい。先ほど話が市民的育成に関する調査から明らかになっていることは、学校の校長や教員、そして生徒たちにも金融リテラシーはまだ十分に備わっていないことである。高学年の生徒たちでも自分たちの活動のために誰かがお金をくれると待っている。自分たちから進んでそのお金を探すということについて知らないし、知っていてもどうすれば良いかわからない。そのような金融リテラシーについては教員研修の中で生徒自治会と一緒に扱う重要なテーマである。

教員研修について述べると、近年は「教育的移動 образовательная миграция」モデルを

使って、地方の教員研修所や教育機関にアカデミーの教員が出かけ、そこで関連のテーマについて研修を行うとともに、地方で実施されている教員研修への助言、指摘などを行うことである。もう一つの重要な取り組みは、研修後のフォローアップである。アカデミーの研修を受けた教員は研修後に様々な形でアカデミーの教員からフォローアップを受けることである。それは、授業設計、課外活動の企画、プロジェクト企画、研究論文の執筆のサポートなどである。

質疑応答

質問（澤野）：教員が生徒自治会を経験していないという指摘があったが、その教師たちは年齢からすればソ連時代に学校教育を受けているので、ピオネール運動の経験をしていると思うが、それは生徒自治会とは違うだろうか。日本ではかつてピオネール運動は生徒たちの自治活動の一つとして紹介されており、評価されていた。ソビエト教育の一つの

答え（プロトチェンコフ）：もちろん、ピオネール運動と生徒次回会の性格は異なる。ピオネール運動は共産党の下部組織であった。自治会は生徒たちの自治その

（文責：タスタンベコワ・クアニシ）

<2017年2月28日（火曜日）>午後

聖ペトロフスキー正教中等普通教育学校（訪問時間：13：00～15：00）

Негосударственное образовательное учреждение средняя общеобразовательная школа "Православная Свято-Петровская школа"

1. 対応者: 校長アンドレイ神父（иерей Андрей Постернак）
2. 住所: Москва, Тессинский переулок, 3
3. 連絡先: +7 (499) 641-03-25, +7 (495) 916-16-61
4. 入手資料: パンフレット、DVD

聖ペトロフスキー正教中等普通教育学校は初めての訪問である。今回、校長のアンドレイ神父に、宗教系私立学校をめぐる状況、および宗教教育について、お話をうかがった。

<質問：私立学校と普通の学校の宗教教育の違いを知りたい。また、この私立学校にはどのような子どもが通ってきているか。>

全般的な状況としてロシアでは、私立学校は、宗教学校にせよ非宗教学校にせよ、非常に少ない。正教の宗教系学校は1%未満である。モスクワの国立学校は、約1500校から半分の約700校になった。コンプレックス化が進んだからで、1つ1つのコンプレックスには数千人の児童が在籍している。他方、モスクワの私立学校は約150校で、各々の在籍児童数は非常に少なく、100人前後である。正教学校（私立）は20～30校あり、各校の児童数も100～200人である。モスクワの正教学校（私立）のなかで、この学校が一番大きく、430人の児童が在籍している

本校は、1992年に設立された教会附属の学校であり、クズネツォフの聖ニコライ教

会の附属学校です。クズネツォフの聖ニコライ教会の神父は、聖チホン正教人文大学の学長である。

在籍する児童たちの多く（430人中380人）は、大家族である。ロシアでは3人以上の家族が大家族と認められるが、ここでは5人以上が大家族である。

設立当初の考えは、私立だけれど、教育内容は普通教育と変わらないもの、というものだった。今もスタンダードと変わらない。もうひとつの理念は、教員、子ども、保護者がロシア正教会で洗礼を受けている、つまり信者であるということである。教育プランそのものは、普通学校とは異ならないが、特徴は、4年生から11年生まで、「神の法」（Закон Божий）の授業が週一時間あるということである。

この建物は、1998年から使っている。ここは教会でもあり、週に2、3回、礼拝を行なっている。児童が教会の活動に参加する。児童たちが聖歌を歌い、懺悔をし、朝からお祈りの時間も設けられている。普通学校との違いは、ロシア正教会に従って行なっているということで、宗教的な環境があるということだ。

<質問：教員・職員達は正教大学の出身であるなど、特別の訓練を受けているか。>

いいえ。聖チホン正教人文大学の卒業生や宗教系大学の卒業生であるという条件は必須ではなく、自分の教育分野の専門を修めていればよい。宗教教育を受けているかどうかの資格が必須であるのは、「神の法」の授業を担当している教師のみである。

教員は約80人で、半数（40人）が常勤、残り半数（40人）が非常勤である。警備員、食堂の職員などを入れると約100人である。ロシア正教の神学教育を受けている人は3人であり、また、約20人は聖チホン正教人文大学の卒業生である。世俗的な専門領域を修めているが、聖チホン正教人文大学で学んだため、正教についての素養がある。

<質問：卒業生の進路について聞かせてほしい>

1992年から累計約460人の卒業生がいる。近年では、毎年約20人の卒業生がいる。卒業生は様々な大学に進学しており、人文社会科学系が多いが、そのほか医学、工学、芸術的な専門へ進む人や船長など、多様である。

<質問：卒業生や保護者に聖職者はいるか。>

1993年の卒業生で、今、修道院のシスターになっている人がいる。卒業生というわけではないが、教員のうち、聖職者は私も含めて4人である。保護者の中には神父が多い。30人～40人くらい。クズネツォフの聖ニコライ教会には、18人の神父がおり、専任が一人。聖チホン正教人文大学との関係があり、神父の数を増やしていいということになり、多くなっている。なお、モスクワの救世主大聖堂でも、神父は6人ほどである。

<質問：教会に通っていないと受け入れないというのは、この学校に関わる人全てか。>

教員、児童、保護者、管理者全員である。ただ、この学校のための条件である。他の教会学校にそれが当てはまるとは思わない。他の学校では、教会に通ってなくても受け入れて、学校で、教会に通うように促そうとする。ただ、自分の経験から言って、教会に通っていない児童を受け入れて、学校の教育で教会に通わせるようにするのは無理である。

本校では、同じ価値観を共有しなければならない。同じことを考えている集団だからやっつけられるのではないか。

<質問：これから齋戒期が始まるが、その前のマースレニツァでどのような行事を学校で行なったか。>

マースレニツァは教会暦とはやや異なる。教会では、マースレニツァはあくまでも齋戒期の始まる前の、文化的慣習と位置づけられているため、普通に行なわれているような行事を、本校でも行なった。例えば、高学年はブリヌィを作り、中学年はコンサートや劇を上演、カリンカを踊る等である。

<質問：財政的な基盤について聞かせてほしい。>

児童が大家族の子ども達であり、経済的には不安定な家族が多いため、決まった金額の授業料を請求していない。そういう意味では無償である。他の国立学校と同様に、教室の維持費については親からもらっているが、その金額は非常に少なく、財政的な基盤を維持できない。

国からの助成金は、法律で定められている通り、義務教育では、どこで教育を受けても、一人当たりの金額が決まっており、それを助成金としてもらっている。一人当たりの金額は、地域によって異なる。金額はオープンにされており、児童一人当たり、6万3000ルーブル/年である。モスクワの普通の国立学校の予算を見ると、2倍で、一人当たり約12万ルーブルである。これは不公平だ。本校は児童生徒数が430人と多いため、何とか維持できている。

もうひとつの財源は、モスクワの社会福祉局（департамент социальной защиты）からのものである。この福祉局からもらっているお金によって、一人当たりの金額の不足分を補足しており、何とか経営ができています。ただ、これは教育や課外活動など、教育だけに使えるお金である。最後の財源として、学校への寄付金があるが、多くはない。寄付金は学校に関係している人たちから（例えば児童の親など）で、知らない人からの寄付金ではない。

<質問：モスクワの社会福祉局の助成金には、何か条件があるか。>

国の教育局からの助成金（一人当たり6万3000ルーブル/年）に関する条件は、生徒を対象に行なわれる、教育の質の評価のためのテストに必ず参加しなければならないというものである。社会福祉局からの助成金については、使途が細かく決められている。修学旅行、教員の給料など—それも全部教員の給料というわけには行かず、割合が細かく決められており、それに則らなくてはならない—、また、たとえば衛生関係の基準や教員免許の更新など、いろいろな条件がある。

<質問：帝政時代は「神の法」の授業は必修であったが、聖ペトロフスキー正教中等普通教育学校ではどのような位置づけか。>

帝政ロシアでは、正教学校というのは存在せず、国立にせよ私立にせよ、すべての学校が正教会の教えに則っていた。政教分離の発想がなかったからだ。どちらかというと、帝政ロシアと今の間には連続性はないと言える。本校の「神の法」の授業を担当する教員も、（教育内容の）基準はあるものの、一番大事なのは、先生と児童のコミュニケーションである。「神の法」を児童達がよく知っているかということそうではない。国立学校の科目「宗教文化と世俗倫理の基礎」（ОРКСЭ）（以下、ОРКСЭを、本校では「神の法」の授業に代えている。ОРКСЭは国立学校では重要な課題であるが、本校ではそうではない。

<質問：科目「神の法」あるいはОРКСЭについて意見を聞かせてほしい。>

ОРКСЭの「正教文化の基礎」の教科書のうち、クラーエフ監修の教科書を「神の法」の授業の副教材として使っている。ОРКСЭについて、この科目は価値観、

世界観、心情そのものを育成するものでもあるので、教科書がメインというわけではなく、どのように教えるのか、というのが大きな課題である。とても優れた教科書でも教え方によって駄目になることもある。

<質問：О Р К С Э が導入された時、教育省の指令には、この科目では宗教に関する知識のみを教えるということが強調された。この点について意見を聞かせてほしい。>

知識だけの科目にする、というのは無理だと思う。正教を文化として、知識として教えるのであれば、正教についても「世界宗教文化の基礎」の範囲内で、知識としてだけ教えれば良かった。しかし、実際には「正教文化の基礎」と銘打ったものがある。そのように銘打つのであれば、価値観、世界観、心情そのものも関わってくる。この問題に答えはなく、今でも議論は続いている。知識として教えている人が多いかもしれない。

<質問：「神の法」の授業では、具体的にどのような授業を行なっているか。>

本校には、3人の「神の法」の教師がいる。1人が主任で、2人が補助である。教師は、教会の暦に従って、その日その日の意味を教えていく。たとえば、これから斎戒日が始まるとか、この日はアダムが楽園から追い出された日、など。それを教えることで、児童たちは教会に行ったときに、神父が今日は何の話をしているのか、理解が深まるようになる。教員と児童とのやりとりにおける訓育についてであるが、教師の姿勢が児童に伝わる、つまり教師が見本になる。しかし、それはそれほど頻繁にあるわけではない。

(文責：井上まどか)

<2017年3月1日(水曜日)>

モスクワ市立オープン教育大学(教員研修所) (訪問時間：12：30～15：00)

Государственное автономное образовательное учреждение высшего образования города Москвы «Московский институт открытого образования»

1. 対応者：アレクセイ. I. ルイトフ学長他7人(下記プログラム参照)
2. 住所：125167, г. Москва, Авиационный переулок, д. 6
3. 連絡先：+7 (495) 151-9047 www.mioo.ru
4. 入手資料：

ブイロワさんのお取り計らいにより、「モスクワ市の教育システムにおける資格向上の現代的傾向」をテーマとするラウンドテーブルを企画していただいた。ラウンドテーブルの目的として「ГАОУ ВО МИОО で実施されている教員資格向上の実際的問題の検討と成功事例の報告ならびに研究・教育協力のさらなる発展に関する協議」が掲げられ、下記のプログラムにしたがって報告が行われた。

<ラウンドテーブルのプログラム>

1. 開会の辞：Алексей Иванович Рытов (学長。教育科学博士。教授。市の用務があつて中座)
2. 「連邦国家教育スタンダードの実現に向けた教員の養成・研修」 Анна Анатольевна Якушкина (就学前・初等教育センター長)
3. 「連邦普通教育国家スタンダード実現の条件の下における課外活動実施に向けた教員の養成・研

修」 Любовь Николаевна Буйлова (訓育・補充教育講座副長)

4. 「生徒のロシア市民としてのアイデンティティ形成 (МИООにおける資格向上プログラム実施の経験から)」 Надежда А. Жирова (総合的プログラムならびに相互ネットワーク開発部・部長)、

Наталья Александровна Бондаренко (総合的プログラムならびに双方向ネットワーク開発部・分析官)

5. 「首都教育システムにおける民族・宗教的要素」 Екатерина Ю.Нурмухаедова (総合的プログラムならびに相互ネットワーク開発部・分析官)

6. ラウンドテーブルのまとめ

[Мария Николаевна Лазутова](#) (学長室顧問、歴史科学博士、教授、1993-96年ロシア教育省副大臣、1999年に日本2ヶ月半滞在し初等職業教育の制度について調査した。途中から参加してラウンドテーブルを仕切る)

[Гарина Альфредовна Мейчик](#) (教科横断的養成・研修ならびに総合的プログラムセンター・センター長)

1. ルイトフ学長

みなさんがソビエト時代の教育がどのようにロシアで受け継がれているかを調べに来てくれたことを嬉しく思っている。やはりソ連時代の教育の成果が最も現れているのは宇宙開発や軍事関係の開発、農業の分野に現れている。ソ連時代の教育政策では子どもたちをどのように個性・能力を発達させていけるかということを重視されていたことを物語っている。現在の教育大臣オリガ・ヴァシーリエブナはソ連時代の正の遺産を受け継ぐべきと考えていることは歓迎すべきことと考える。 <参加者紹介>

2. アンナ・アナトーリエブナ・ヤクーシナ就学前・初等教育センター長

ブイロワ氏によれば日本では関心があるということで、モスクワにおける初等教育スタンダードの導入状況についてお話ししたい。(アンナ・アナトーリエブナは初期からこのスタンダード導入のための初等教員研修にかかわってきた。)

2009年10月に大統領令によってスタンダード導入のメカニズムが定められた。2010年9月から複数の初等教育学校においてパイロット事業が開始された。2011年から新スタンダードは毎年1年生に入学する子どもから段階的に導入されている。モスクワでは最初186校がパイロット事業に参加した。500人の担任と500学級が参加し、各学級の児童数は25人なので、1万2500人の児童が参加した。パイロット事業は環境・設備が整っており、コンピュータなども整備され、教員自身もイノベーションに開かれているような学校で行われたので、いい学校で始められた。

パイロット事業が始まる前に6月毎日のように500人の教員が8時間一同に会して研修が行われた。教員自身が生徒の立場にたって授業をして受けるという研修だった。自分たちが生徒の立場にたって個別学習やグループ学習を体験して、それをモデルとして自分の学級に取り入れることができるように、研修が行われた。

モスクワには1万4千人の初等教育段階の教員がいる。これには全科を担当する担任教員だけでなく、数学、英語など科目別の教員も含まれる。新しいスタンダードの導入にあたってはこれら1万4千の教員の研修が必要だった。研修を効果的に行うために、500人のうち300人が研修を受け、並行して学校に戻って1年生に授業を行い、次年度に1年生の担任になる先生に教え経験を共有していくという、という「カスケード・メソッド」と

いう方法をとった。

150箇所では300人の教員が各地区でチューターのような形で研修を行っている。

300人から現在では500人のチューターが、研修を自分たちでも行えるよい人材となっており、モスクワ市の様々な大規模プロジェクトに参加してもらっている。これが導入過程の複合体となっており、パイロット事業に参加する学校の選定、リソースセンター、指導センターの選定、いつ何をどこで導入するか、設備の整備、チューター制度を導入するということがすべて同時並行的に行われていた。

スタンダードで求められている数学のグループ学習、ペア学習、個別活動、ITを使った学習などの教育活動を補充職業教育のなかでも教員自身が体験することを重視した。

スタンダードは子どもたちのITコンピテンシーを重視しており、非常に高い基準を設定している。子どものITコンピテンシーは教員自身のITコンピテンシーにも密接に関わっている。

これらすべての小さいモデルがITコンピテンシーの様々な学習方法だが、初等教育から基礎教育段階に上るときに子どもに求められる目標がある。子どもにはPCを使うときだけでなく、様々な環境のなかでどのような情報をどのように扱うか、教科別、教育的に、また教員自身のユーザーとしてのコンピテンシーも分けて示している。

教員研修の方法、環境そのものとして最も大事なものは、Moodleを使って教員たちの専門的ネットワークを作り、講義内容・ゼミ内容、経験を共有する場面、メトディストから支援を受けたり、子どもと一緒に利用もできるようになっていることである。研修を受けて終わりということだけでなく、そのあとのフォローや、モスクワ市内のベストプラクティスも学び、取り入れることができるようになっている。

強調しておきたいことは、様々なツールを充実させて活用していくことである。たとえば算数において数を教えるときの様々なツールや実験などの教材をサポートするようなツールもある。

もう一つ重要なことは教員がコウシタスタンダードの導入に対しどの程度開かれているかということだ。幸いモスクワ市内の初等教員は非常にアクティブで、研修において効果的・効率的に受けてきた。モスクワ市の初等教員の平均年齢は47-49歳で20年以上の経験があり、自らの教授法・教育観をもっているにもかかわらず、スタンダードに応じた新しい方法を取り入れ、グループ学習・プロジェクト学習など積極的に取り入れている。たとえば最近のモスクワ電子学校について掲示板に載せただけでも200にくらいがやりたいと回答し、学校単位でもやりたいという電話がかかってくるほどであった。

だが、スタンダードの導入の成果はまだ把握できていないが、この子どもたちが前期・後期中等教育を終了して大学に入学してはじめて成果がわかるだろう。だがモスクワの4年生はTIMSSでは好成績をあげているので、スタンダード導入の成果の一つの表れと考えることができるだろう。

<質問：生徒に与えるツールはどのように作っているのか。教育関係の民間企業からの提供があるのか。> 企業はマテリアルを提供し開発する場合もあるが、教員と必ず共同して開発する。教授法やマニュアルなど教員が開発する場合もある。私たちはそれらを共有できるようにすることを重視している。

3. リュボフィ・ニコラエブナ・bu イロワ訓育・補充教育講座副長

私は日本で補充教育の教員研修についてお話したが、今日は課外活動の導入のための

研修についてお話ししたい。課外活動は聞き慣れていることだが、新しいスタンダードにおいては非常に革新的な意味合いをもっており、活動内容も変わってきた。課外活動のスタンダードにおける役割は、教科教育の内容を互いに結びつけることと、学校全体の教育活動と訓育活動の橋渡しをすること、訓育、健康であることなどを含む課外活動のスタンダードが決まってくる。

課外活動の教育プログラムは、他の教育プログラムをさらに充実させていくことであって、余暇活動の過ごし方ではない、完全な教育活動であることを理解することが重要だ。

課外活動は教育プロセスなので、スタンダードを教員に理解してもらうことが課題となっている。そこで、DPOMOS.RU というポータルサイトを作成し、様々な情報を提供した。このサイトに教員が登録し、様々な研修のプログラムから自分が必要なものを一つ選び、契約して研修を受けるようになっていく。これにたいし、MOODLE.RU は研修そのものをウェブ上で受けられるようになっていく。評価のツールや補助教材も使えるようになっていく。

教員研修プログラムの内容はいくつかの部分からなっている。

第1部は法的基盤の学習である。ロシア連邦とモスクワ市政府のそれぞれの教育方針、モスクワが他の構成主体とは異なる独自の教育方針をもっていることを理解することが重要である。

第2部は年齢に応じた教育心理学と生理学的な子どもの発達段階の理解である。授業での交流活動と課外での交流活動の違いを理解することも重要である。

第3部は教員が課外活動の教育プログラムを作るための教授法などの支援である。活動プログラムの分野別のパターンもスタンダードに即して示されている。

第4部は一番難しいもので、課外活動の評価をどのようにするかということである。課外活動の結果はすぐには出にくく、長期的に考えなければならない。評価においては個性、個人の特性を理解するとともに、メタ知識の形成をどのように評価するかを考えるとすることはきわめて難しい。

教員研修を行うときの条件として重要なことは、教員が結果を理解することである。ただ理論的なことを学んで知識のみを習得してもちかえるということではなく、32時間の研修のなかで成果を出せるような研修を行うことである。研修を終えて学校に戻った時に実際に使えるプログラムの企画やすぐに使える教授法を研修のなかで自ら考えてつくっていくことが重要である。

また研修を受けた教員が学校現場の先生にフィードバックすることも重要である。研修を受けた教員が疑問を払拭するようにすることが大事である。

また、研修後の評価として、最初にテストをして何を知っていて何を知らないかをチェックし、研修の途中に中間的評価を行い、最後に目標がどの程度達成されたかの最終評価を行っている。

4. ジーロワ&ボンダレンコ

ロシア市民としてのアイデンティティを形成することは、連邦国家教育スタンダードの最も重要な目標の一つである。

「市民的アイデンティティ」という言葉は5-6年前から使われるようになった言葉である。その理解、概念の内容も様々だが、私たちは「ロシアの市民的アイデンティティ」として自分が文化・伝統に関わること、ロシアの歴史に関わり、法律を遵守し、ロシアの科学的、経済的、社会的、文化的発展に参加する準備ができていること、と定義している。

このような定義は複雑であるため、「ロシアの市民的アイデンティティ」は、文化、言語、政治、社会、民族・家庭の5つの要素によって構成されるものとしている。

第1の文化の要素は5つの中で最も重要なもので、1)国民の文化、伝統、歴史の意義の理解、2)多民族国家のなかにおける自民族集団の文化の登頂と立場、位置づけ、3)世界文化の中におけるロシア文化の位置づけと役割という3つの段階から形成されるとしている。

第2の言語的要素というのは、ロシア語を国家語として民族間共通語として学び使うということだけでなく、自らの母語も使うことも重要としている。

第3の政治的要素は今のロシアのなかでどのような政治的プロセスが行なわれているのかを理解し、世界のなかでの位置を理解することである。

第4の社会的要素とは、自分の民族集団、コミュニティでの様々な考え方や伝統的考え方を理解する一方で、ロシア全体の法律を理解しそれに従うことである。

第5の文化・宗教的要素は、多文化間共生を促すものである。(宗教については後述する。)

ロシアの市民アイデンティティは個人の倫理観の形成や自己決定においてきわめて重要であるロシア国民として、青年としての価値観を理解し、青年として文化・社会において自己決定を行うことにかかわっている。

ロシアは多民族国家だが移民統合も重視している。考え方は2つある。一つは多文化主義で欧州で取り入れられているが、最近のテロリズムにみられるように欧州では失敗している。もう一つは米国でみられるもので、メルティング・ポットとして多民族が一緒になっているが、主流文化にマイノリティーを同化させようとするものである。ロシアはこれらとは異なる「インクルトラティヤ」の道を行く。例えば移民の子どもが学校に来た時に、ロシアのアイデンティティの各要素に触れることによって自分のアイデンティティ、世界観を形成していくことを目指している。

ロシア市民のアイデンティティの形成においては教員なしでは難しいため、教員養成・研修が必要となっている。その際、教科の枠を超えたメタ科目的アプローチが重要である。

教科を超えたプログラムを開発するセンターとしてメタ科目センターがある。移民の統合について重要なことは、モスクワ以外のロシアの構成主体でも移民が増えており、移民の子どもがロシアの学校や学校外の子どもの集団に入ってきたときに、ロシア語とはどのようなもので、ロシア人はどのような人でどのような文化や伝統の特徴があるかを理解することが重要と考えている。

センターのなかにはインタラクティブなテクノロジーの講座があり、教員が授業だけでなく課外活動でも使えるインタラクティブなテクノロジーの開発を行っている。いくつかのプログラムがあり、一つは多文化教育におけるインタラクティブな教授法の使用。二つめが教科のなかで、スタンダードにしたがった形でインタラクティブなテクノロジーを用いることである。三つ目がロシア市民アイデンティティの形成をインタラクティブなメタ教科アプローチでどのようにしていくかということである。

この教育プログラムは研修にきた教員が受けるものである。いくつか内容・テーマがあるが、教員に市民アイデンティティとは何かとどのように形成されるのか理解させることが重要だが、一方的講義ではなく、インタラクティブな学びのなかで理解させるようにしている。

ロシア市民アイデンティティ形成のツールは、文化と伝統にふれることと、地域の人や政治

家、芸能人も参加するふれあいの場をつくり交流させることである。

第2段階として実際にテクノロジーを教える。批判的思考を形成するためには教員が様々なテキストを用いる政治的文書、小説、新聞記事などを用いて子供に批判的思考力を培う。

このマスターテクノロジーというのが、様々な場面を考えて子どもと教員がいろいろな体験をしていくというものである。問題解決学習テクノロジーは、社会のなかで問題とされていることについて考え、子どもと教員が一緒に関わり、一緒に解決策を考えている。インタラクティブなテクノロジーを使うことが問題解決型、参加型学習を目指しており、そのなかでは生徒の実体験が重視される。

ここで強調しておきたいことは、教員研修プログラムの内容が実践を重視したものであり、毛週を受けている時に、自分が使えるものを開発していくということである。学校に帰ったときに、ツールや教材、教授法などがパッケージのように入ったものを開発することが重視されている。

このセンターでは昨年大規模調査を行った。普通教育と補充教育の統合に関する調査である。この調査を通して明らかになったことは、我々の開発している教員研修プログラムが非常に役に立っているということである。

<質問：実践に役立つ研修は素晴らしいがどのようにして可能となっているのか。>

テクノロジーは実践ですぐ使えるもので、アンケート調査、高学年と低学年の生徒の交流の場を設けるとか、政治家、芸能人に参加してもらうというような、やろうと思えば簡単にできるようなものである。教員研修の過程で作ったテクノロジーは持ち帰って終わりではなく、フォローアップもしている。授業で使う際に直面した問題について助言も行う。

教科横断的アプローチというのも、英語と数学、物理と文学の統合など実際に行なわれている。その成果は当センターの論集に刊行して広めている。学期間中だけでなく、次年度の準備をするときにもこちらで助言している。

テクノロジーについての講座は開かれたもので、フランス、アメリカ、イギリスなどの外国からも取り入れている。（日本のテクノロジーはまだ入ってきていない。）ロシア独自のテクノロジーもあればソビエト時代に開発されたものもある。

これらのテクノロジーは、教員が研修を受けているときは生徒の立場で学ぶが、学校では自分が子どもに指導する立場となるので、非常に効果的である。

5. エカチェリーナ・ヌルムハエドヴナ・総合的プログラムならびに相互ネットワーク開発部・分析官 「首都教育システムにおける民族・宗教的要素」

ロシア連邦は多民族・多宗教社会だが、学校教育は政教分離が原則である。だが、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などは倫理形成には役に立つ。そこで、1990年代に宗教団体と教育界の交流が始まり、選択科目として民族や宗教についての学習が導入された。

本校では、2009年から教員がどのように宗教について教えるべきかについて18時間から140時間の研修を始めた。当初は10-11学年の教員研修のなかで宗教の歴史に関する講座を選べるようにした。

2012年からはロシア連邦の命令によって4年生で「宗教文化と世俗倫理の基礎（ОПКСЭ）」が必修となった。ОПКСЭの特色は、宗教を文化として教えることを

目標としている点にある。教育課程は、正教文化の基礎、世界の宗教文化の基礎、世俗倫理の基礎、イスラム教文化の基礎、仏教文化の基礎、ユダヤ教文化の基礎の6つのモジュールからなる。モジュールは保護者が学校の父母会でモジュールを選んでいるが、本来は例えば一人でもイスラム教文化を学びたい子どもがいた場合には教えなければならないことになっている。両親がそれぞれちがう宗教を信仰している場合も、補充教育などで対応する必要がある。

本校では6年前から O P K C Э のすべてのモジュールの研修を行っている。研修では、1) 世俗倫理、2) ロシア正教文化、3) 世界の宗教文化の順に選択する教員が多い。

また、例えば地理の教員は日本をテーマとする授業で日本の宗教について教える。このため本校でも、関連する教科を担当する教員のための研修も行っている。

4年生の年齢では、自分とは何者か、自分の国について考えるようになり、価値観に目覚める。このため善悪について教えるのに適した時期である。高学年では「ロシア民族と精神文化の基礎」という科目がある。因みにロシアにはハンティー、マンシー、ウデゲなどの単位の大きい民族 (нация) は62ある。

本校で O P K C Э の研修を行う際に宗教団体の聖職者と連携する場合がある。聖職者でも教員資格をもっていれば授業を行うことができる。

O P K C Э で重要なことは、同じクラスのなかで宗教のちがう子ども同士が対立しないように教育することである。本校の教員研修では、異なる宗教の子どもが共生に向けて対立を解消できるようにすることが目標とされている。

ロシアの学校では子どもの民族性 (народность) を大切にすることを通して、ロシアの市民・国民としてのアイデンティティを形成している。

公立学校は世俗学校でなければならないが、私立ならば宗教系学校を設立することができる。本校では私立宗教系学校の教員の支援も行っている。

モスクワ市ではまた「教員の道徳的前進」というコンクールを実施し、教員が道徳的ヒーローとなることを奨励している。また、総合的教育コースとしての O P K C Э のプロジェクト活動および研究活動、教科領域「ロシア諸民族の宗教・文化的基礎」、教員と生徒のためのメディア・プロジェクト「世界の宗教の歴史・文化学習」のコンクールも行っている。

O P K C Э の教材や副教材は、教員だけでなく聖職者からも評価を受けながら作成しているため、バランスのとれた内容となっている。

6. マリア・ニコラエヴナ・ラズロワ 閉会の辞

教育制度はあらゆる時代を通じて世界に共通する動向もあれば、各国の戦略に応じた部分もある。私は博士論文で16カ国の教育制度を比較し、教育は過去・現在・未来の世界秩序のイデオロギーを保つという原則を提示した。研究者が交流し、共同研究や共同セミナーを企画し、教育について意見交換をすることで、世界秩序を保つことのできる教育ビジョンを作る必要がある。

(文責：澤野由紀子)

<2017年3月2日(木曜日)>午前
独立教育出版「教員新聞」(訪問時間:10:00~12:00)
Независимое педагогическое издание «Учительская газета»

1. 対応者: ピョートル G.ポロジェヴェツ編集長
2. 住所: г. Москва, Ананьевский переулок 4-2
3. 連絡先: +7 (495) 628-8253, www.ug.ru
4. 入手資料: «Всероссийский конкурс «Учитель года России 2016»; П.Г. Положевец, А.Н. Иоффе «Национальное исследование по оценке качества граждановедческого образования в России»; Т.В. Болотина, Н.М. Воскресенская, И.Г. Димова, В.П. Пахомов, П.Г. Положевец «Всероссийская акция «Я – гражданин России» Воспитание гражданина и патриота» Научно-методическое пособие (Москва, 2013)

① 協同の教育学について イリーナ・ディモヴァ副編集長

澤野: 1980年代後半に教員による下からの改革「協働の教育学」という運動が知られるようになり、「教員新聞」はその運動の情報発信、また教員組合を支えるメディアとして知られた。私の質問は、「協働の教育学」30周年を迎えた現在は、どのような状況にあり「教員新聞」の役割はどのように変わってきているかである。

ディモヴァ副編集長(1991年から「教員新聞」で務めており、全国コンクール「優秀な教員 Учитель года」と「私はロシア市民 Я – гражданин России」の準備、実施、評価に関わっている):

確かに、「教員新聞」は1980年代後半に革新的教員ら педагоги-новаторыの考え、理念、テクノロジー(教授法)をサポートした。この運動は「協働の教育学」という運動として発展し、このとき「教員新聞」は独裁的教育(авторитарная педагогика)の崩壊の基盤を築いたと言える。みなさんは「協働の教育学」の基本理念はご存知だと思いますが、再確認すると生徒を個人としてみる生徒中心主義的なアプローチ、教育・訓育過程における教師と生徒の協働、個人の自由を尊重する価値体系に基づいた教育プロセスである。もちろん、このような考え方がまったく新しかったわけではなく、ルソーやウシンスキーの教えに基づいており、シュタイナー教育などの要素も取り入れていた。しかし、当時の国(ソ連)にとっては何が新鮮だったかということ、教員の意識の変革であった。「協働の教育学」の発信者、この考え方の一人者として教育学の歴史に名前を刻んだ教育学者たちがよく知られているが、再確認するとそれはアモナシユビリ、シャタロフ、イリイン、イワノフ、シェチニン、ニキチノフ夫妻、ルセンコワなどである。これらのそれぞれの教員には独特な教え方があり、それが注目されて、高く評価されていた。例えば、シャタロフは「軸となるメモ опорные конспекты」、ルイセンコワは「軸となるスキーム опорные схемы」などがある。ここで大事なことは彼らの教授法が異なっても、その基になる考え方、教育的理念は同じであった。それは子どもを個人としてみることに、子どもの個性、考え方、ニーズを尊重することである。

当時の公式な教育学 официальная педагогикаはこの考え方には否定的であったので、「教員新聞」はそういった意味では主流な考え方に対抗する立場をとっており、新しく考える教員たちの「声」となっていた。そのときソ連という国の解体、国家体制、社会の変化とも重なり、この運動の拡大が求められた。その拡大、あるいは新し

い展開を広げたのは「教員新聞」である。それは新しい教授法、独自の教授法を開発している革新的教員たちを選ぶコンクール「優秀な教員 Учитель года」を1989年に始めたことである。もちろん、教員たちが競争し合っているのか、このようなコンクールが本当に必要なのかといった様々な議論が紙面上では繰り広げられた。その結果として、全国から寄せられた教員たちの意見を吟味したうえで、このコンクールが始まった。このコンクール自体は「協働の教育学」の継承、次の段階への発展につながったと我々「教員新聞」関係者は信じている。というのは、このコンクールに関する規定には「協働の教育学」の考え方に基づいて、新しい教授法を開発している教員たちが参加することが条件として入っていた。そしてもちろん、コンクール上出される課題や選定基準にも「協働の教育学」の考え方、実践方法が選定の基準に反映されていた。つまり、「協働の教育学」の後継者を探し、彼らの中で最も優秀な実践を全国に公表することが目的であった。このコンクールを通して、ユニークな教え方をしている優秀な教員たちが出てきた。そしてこのコンクールを通して分かったのは、彼らはまさに「協働の教育学」の真の後継者たちであることである。コンクールに参加する教員たちに彼らの尊敬する教育学者、ロールモデルについてきくと、「協働の教育学」の設立者たちの名前が挙げられる。

このコンクールを実施してきているのは、コンクールに参加する教員たち自身が新しい運動を展開していることである。1980年代後半には革新的教員たちの実践はテレビで放送されるといったことがあったが、今はインターネット上ではすべての参加者の授業実践の様子はアップロードされており、チュコトカからカリニングラードまで都市部でも、農村部でも学校の教員たちはそれにアクセスでき、新しい実践から学ぶことができる。「教員新聞」はこのコンクールを通して、教員たちの創造力、クリエイティビティを促進する役割を果たしていると言える。つまり、「教員新聞」は「協働の教育学」をただ受け継いだのではなく、ただそれを次の段階につなげただけでなく、この間かえ方をさらに広める、一般化するという重要なミッションを果たしてきていると言える。

さらに、現在まだ現役でいらっしゃる革新的教員たちとも交流し、例えば、シャタロフ先生、アモナシュビリ先生にコンクールの審査員を務めていただいている。シャタロフ先生はつい最近「教員新聞」にいらっしゃって、「協働の教育学」について書いた本を贈呈してくれた。

(文責：タスタンベコワ・クアニシ)

<2017年3月2日(木曜日)>午後

エヴリカ教育政策問題研究所(訪問時間: 14:20-15:00)

Институт проблем образовательной политики «Эврика»

1. 対応者：アレクサンドル・イゾートビッチ・アダムスキー・エヴリカ教育政策問題研究所
2. 面談場所住所：Комитет гражданских инициатив, 1й Троицкий переулок 12 к5. 2-й этаж, комната 201
3. 連絡先：+7 (495) 247-58-00 <http://www.eurekanet.ru>

エヴリカへの訪問を希望していたが、アポイントメントの取り付けが遅れたため、面会場所と時間が定まらず、市民イニシアチブ委員会の建物内の会議室で行われる大学に物理学専攻のマギストル課程を開設するための会議開催の直前に1時間だけの面会時間を取っていただくこととなった。だが私たちが道に迷い20分以上遅刻したため、40分弱の面談となった。15:00からの物理学専攻のマギストル課程を開設するための会議にはモスクワ市立大学のレモレンコ学長も参加するということがあったが、お会いせずに帰ってきてしまった。

<市民イニシアチブ委員会(КГИ)について>

市民イニシアチブ委員会は、アレクセイ・レオニードビッチ・クドリンの率いる35人の著名な政治家、経済学者、科学者、芸術家等が2012年4月に設立した。国の現代化と民主的イニシアチブの強化による社会の発展を目指すエキスパートの団体で、約60のネットワークがある。教育の発展も活動目標の一つとなっている。エヴリカ教育問題研究所は市民イニシアチブ委員会のパートナーとなっている。

<最近のエヴリカの活動>

多言語教育のプログラムを開発し、国際的ネットワークを構築した。現在4カ国72カ所の幼稚園で多言語教育を行っている。

高等教育に関しては、教育政策と教育メディアのマギストラツラと基礎科学と英語で学ぶ物理学のバカラブリアートに加えて、マギストラツラに英語で学ぶ物理学、都市部の教員、方法論教諭（子どもの世界観の完成を目指す教員）の3課程を開設した。

<電子ジャーナル “Вести Образования”>

教育ニュースは、ロシア語版の他に、フランス語とモンゴル語で配信している。日本語版も作らないか。日本の教育のイノベーション、経済や社会についてのニュースを紹介してほしい。電子ジャーナルは対話の場となる。研究者や社会活動家に執筆をお願いしたい。内容はオリジナルなものとし、ロシア語への翻訳はこちらでもできる。まず著者を選び、テーマを定め、誰を対象とするか方針を決めてほしい。

<ロシア連邦の教育大臣が代わって教育政策においてどのような変化があったか>

政治にはサイクルがある。世界的な傾向として、革新的サイクルから保守的なサイクルに変わっていている。アメリカもそうだし、日本もそうではないか。ロシアではこれまで教育の専門家が教育大臣になっていたが、今は政治家が大臣になっている。大臣の立場は保守的だが、ロシア国民の一部の価値観を共有している。それは、すべての分野に影響しており、教員養成にも影響を及ぼしている。

革新的な教員養成においては、子どもとの対話や個人の成功を重視してきた。保守的な教員養成では、教科をどう教えるかを重視している。

だが私は平行線のものはずどこかで交差すると確信している。

今は制度において保守的な考え方のルネッサンスとなっている。大学と学校における教育実践について、革新的-保守的の双方の視点から評価したい。

<ОПКЭの現状について>

ОПКЭは宗教教育に対する二つの極端な立場の中庸であり、現在はバランスがとれていると思う。ソ連時代の学校は世俗学校ではなく、無神論の学校だった。ソ連解体後は宗教が復活し、学校をミッション的にしようとする動きがあった。

憲法第14条と連邦教育法は国家と教会の分離を定めている。このため、妥協策として宗教を文化として教えることとなった。これはもちろん、他国でも行っていることである。宗教をどのように教えるかについては様々な考え方がある。ミッション系の学校では宗教そのものを教えているが、一般の学校では文化として宗教を学ぶべきである。だが、学校に十字架やムスリムのスカーフなどの着用を認めるかどうかは複雑な問題で、教育のなかだけでは解決できない。宗教間の対話や政治的な決断が必要な問題である。

現在、宗教文化の教育に関しては親の選択に任されている。

宗教復活の時期には教会などの宗教施設が拡大していくが、学校では宗教を文化として教えることが重要である。宗教はあくまでも文化の一部であり、また文化については宗教なしには学ぶことはできない。最も重要なことは、宗教を文化として学ぶことであり、その境界線は超えないようにするべきだ。

(文責：澤野由紀子)

<2017年3月3日(金曜日)>

聖チホン正教人文大学(訪問時間:10:00-12:00)

Православный Свято-Тихоновский Гуманитарный Университет

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 対応者: Татьяна Владимировна Склярова2. 住所: Москва, Ул. Новокузнецкая, д.23, кор.5А.3. 連絡先: +7(495)953-92-53, +7(495)951-67-844. 入手資料: Т.В. Комарова, 《Основы православной культуры: рабочая тетрадь 4 класс ч.1-2》(Москва, 2014) |
|--|

聖チホン正教人文大学は、二度目の訪問となる。今回は、聖チホン正教人文大学の教員養成について、および、国立学校で導入されている科目「宗教文化と世俗倫理の基礎(ОРКСЭ)」(以下、ОРКСЭ)について、質問に答えていただくかたちで調査を行なった。

<質問: 聖チホン正教人文大学の教育学部は、教員養成に関わる新しいスタンダードや現代化プロジェクトを採用しているか。>

現代化プロジェクトからきわめて直接的な影響を受けている。現代化プロジェクトの策定過程には関わっていないが、策定されたことを実施しなければならない立場にある。

たとえば、2015年に、モスクワの就学前教育機関で働く保育士は、高等教育段階での専門家養成を受けなければならない、つまり、教育大学卒業でなければ保育士になれないことになった。教育大学を卒業していない場合には、乳母にしかねない。高等教育を受けていない人は解雇される危険性があり、急遽、教育学関係のプログラムを策定した。

また現代化プロジェクトに沿って、すでに学校で働いている人で教員養成過程を修了していない人を対象とした教育プログラム(教育学関係の単位がとれるようなプログラム)を提供している。補充専門教育で、様々なバックグラウンドを持った教員た

ちのために、さまざまな教育プログラムを用意している。

<聖チホン正教人文大学の学生は正教の信徒であるか？>

国家の認定を受けた大学であるため、 $\Theta \Gamma \Theta$ の結果で受け入れている。そのため、どういう宗教的バックグラウンドを持っているかは大学側にはわからない。洗礼を受けていない学生や無神論者、プロテスタントの学生などもいるが、そうした宗教的バックグラウンドがあるからといって退学させるようなことはない。学生の自由に任せ、学生自身が価値体系を形成していく。

<質問：4年前に $\Theta \text{PKC} \Theta$ の世俗倫理の授業について、学校のプロジェクト学習を見学した。当時は、 $\Theta \text{PKC} \Theta$ が始まったばかりで模索しているという印象を持った。現在、はどのようなっているか。>

導入されて何年も経っているが、いまだに $\Theta \text{PKC} \Theta$ への抵抗がある。というのも、新スタンダードの導入後、新しい要求に従って $\Theta \text{PKC} \Theta$ をどのように変えていくかをめぐる議論がなされ、まだ合意がなされていないからである。 $\Theta \text{PKC} \Theta$ をめぐる問題を3つに分けると以下ようになる。

1. 組織的問題：どのようなコースを選ぶか、どのような教員研修を行なうか、どのような教材を用いるか。
2. 教育内容をめぐる問題：スタンダードに合わせた教育内容がどのようなものでなくてはならないか、について合意がない。
3. 人材をめぐる問題：新スタンダードの理解、教員養成過程の修了、神学的知識を含む教養、これら全てを有する人材は限られており、人材の少なさが問題となっている。

<質問： $\Theta \text{PKC} \Theta$ についての見解を聞かせてほしい。>

$\Theta \text{PKC} \Theta$ は、多様な宗教、多様な民族の存在するロシアにおいて、寛容・相互理解・社会統合を育むという目的のもとで導入された。つまり、 $\Theta \text{PKC} \Theta$ の科目のうち、どれを選択してもこの目的を達成できる、共通の意味があるという前提で導入された。もちろん、学校は共通の意味をもつことを教えるという役割を果たすべきである。しかし、重要なことは、それぞれの違いをはっきり教えなければ、他者に対する理解・寛容が育たないということである。違いを教えなければ、なぜ違うのかという理解も深まらない。そこが問題であると考えます。

<質問： $\Theta \text{PKC} \Theta$ の授業の一環として、聖チホン正教人文大学の先生や院生が招聘講演を依頼されることはあるか。>

本学の学生・院生・教員が多く招聘講演を依頼されている。ただ、 $\Theta \text{PKC} \Theta$ に関わることのできる本学の学生・院生は、教員養成に関わっている教育学部の学生・院生であり、そのほかは一部の歴史学部や言語学部の学生・院生である。今後は、神学部や宣教学部にも教育学関係の科目を設置し、 $\Theta \text{PKC} \Theta$ に関われるようにしていきたい。

<質問： $\Theta \text{PKC} \Theta$ の正教文化の基礎の教科書について、意見を聞かせてほしい。>

$\Theta \text{PKC} \Theta$ の教科書全般については、新スタンダードの導入後、「活動を中心とした学習」（アクティブ・ラーニング）が求められているため、その条件に合った教科書を執筆・出版する必要がある。現在、本学のプロジェクトとして、「活動を中心とした学習」という条件に沿った正教文化の教科書についてのプロジェクトが進行中である。なお、「正教文化の基礎」に関する多数の教科書のうち、クラーエフ著の教科

書の作成に私は関わっている。また、私が指導する博士課程の大学院生が学習ノート（生徒が自宅で個人学習のために用いる教材）の作成に関わっている。

<質問：OPKCΘを補強するようなプログラム・方法論が聖チホン正教人文大学にあるか。>

OPKCΘは初等教育段階（1～4年生）に導入され、中等教育段階（5～9年生）には、「ロシア諸民族の精神的・倫理的文化の基礎」が導入されている。

中等教育のこの科目（「ロシア諸民族の精神的・倫理的文化の基礎」）では、何を教えるか、誰がどういう教授法で教えるか、まだ議論が続いている。現在、専門家が教科書・教材を作成し、教育科学省が検定を行い、条件に合っているか判断している段階である。本学の教員たちは専門家として、教科書の検定や評価を行っており、また新スタンダードが求めている条件と教育内容の照合の必要性を、学校の教員たちに理解してもらうという活動も行なっている。

さらに、「正教文化の基礎」という科目とそのほかの科目（歴史、文学、自然科学、物理学、化学）との間に、整合性を持たせるようなプログラムも作成している。

プログラムとして成功をおさめつつあるのは、「正教文化の基礎」をめぐるオリンピック（4～11年生の生徒が参加）である。オリンピックのテスト問題には、新スタンダードが求めている条件にも合うような問題を作成している。その意味では、私たちが先行・予測するかたちで、教育内容を開発しているということでもある。このオリンピックの優勝者は、本学や神学部を有する大学に、推薦入試のかたちで入学することができる。というのも、オリンピックの優勝者は、ΘΓΘの歴史テストの満点取得者に相当するからである。

研究として未開拓となっているのは、10～11年生の宗教文化の教育内容に関することである。

<新教育大臣として就任したヴァシリエヴァ大臣は、正教に対してどのように態度をとっているか。親正教とも聞いている。>

ヴァシリエヴァ大臣が正教を支持していると聞いたことはある。ただ、実際の彼女の活動において、正教に対する特別扱いはこれまでみられない。彼女の方針のなかで、我々が肯定的に受け入れていることは、ロシアの教育の正の遺産、強みを生かすという立場に立っていることである。これまでの教育大臣は、グローバル化対応の教育で、国際的な動向に乗り過ぎていて、1年前まではアメリカやヨーロッパなどの教育改革ばかりが注目され、ロシアの本来の教育の特殊性や良い経験、素晴らしさが忘れられてしまっていた印象を持っていた。他方、ヴァシリエヴァ大臣は、特に教員養成の分野で、ロシアの強みを生かすという立場に立っている。

（文責：井上まどか）

モスクワ調査報告②

2017年3月4日～12日（9日間）

遠 藤 忠
松 永 裕二
黒 木 貴人
ミソチコ グリゴリー

月日	時刻	訪問機関
2017年 3月4日 (土)	13:10-17:35	成田発→モスクワ着
3月5日 (日)	11:00-14:00	①ナージャ・ルシエワ名称第1466番学校付属児童創造センター「ロゴス」 Школа №1466 им.Н.Рушевой, Центр детского творчества «Логос»
3月6日 (月)	12:00-15:00	② モスクワ国立教育大学 Московский педагогический государственный университет (МПГУ) ③モスクワ市立教育大学 Московский городской педагогический университет (МГПУ)
3月7日 (火)	9:30-11:30	④ロシア科学アカデミー「情報科学・制御」連邦研究センターФедеральный исследовательский центр «Информатика и управление» Российской Академии Наук
3月8日 (水・祝)		国際婦人デーのため訪問なし。自由時間
3月9日 (木)	10:00-13:00	② ロシア科学アカデミー固体物理学研究所（モスクワ州チェルノゴロフカ市） Институт физики твердого тела Российской Академии Наук (г. Черноголовка Московской обл.) ⑥高等経済大学教育研究所 Институт образования НИУ «Высшая школа экономики»
3月10日 (金)		市内書店にて書籍購入
3月11日 (土)	20:00	モスクワ着
3月12日 (日)	11:40	成田着

<2017年3月5日(日)>

①ナージャ・ルーシェワ名称第1466番学校、児童創造センター「ロゴス」
ГБОУ Школа №1466 им. Н. Рушевой, Центр детского творчества «Логос»

●対応者

- ① Заикина Елена Викторовна (「ロゴス」センター長)
 - ② Видутина Оксана Вячеславовна (ナージャ・ルーシェワ名称第1466番学校校長)
 - ③ Трешина Инга Валерьевна (補充教育教師協会会長)
- その他、機関の職員数名

●入手資料

- ① 『児童創造センター「ロゴス」 我々の成果』 Центр Детского Творчества“Логос” Наши До стижения (年次報告書) ...2010-2011年度、2011-2012年度、2012-2013年度分、計3冊
- ② DVD2枚 (「ロゴス」の子どもたちが演じたフォークロア、劇が納められたもの)
- ③ 『少年少女』第65号 ДЕВЧОНКИ МАЛЬЧИШКИ №65 (「ロゴス」発行の雑誌、2012年発行)
- ④ ナージャ記念学校の小パンフレット
- ⑤ ナージャ記念学校博物館の小パンフレット
- ⑥ ナージャの挿絵集...プーシキンの肖像画、ブルガコフ『巨匠とマルガリータ』の挿絵



ナージャ・ルーシェワ (1952 - 1969)
出典: ロシア NOW 「名声を得た少女たち」
<https://jp.rbth.com/arts/2014/01/30/469>
05

<学校の概要>

国家予算教育機関ナージャ・ルーシェワ名称第1466番学校(以下、ナージャ名称学校)は、1966年に開設された470番学校に淵源を持ち、現在は4つの就学前教育機関、2つの初等普通教育機関、2つの基礎・中等普通教育機関及び補充教育機関である児童創造センター「ロゴス」、計9つの教育機関の複合体となっている。学校にその名を冠しているナージャ・ルーシェワとは、1952年生まれ画家である。

<ナージャ・ルーシェワについて>

ナージャ・ルーシェワは、1952年モンゴルに生まれ、



彼女の挿絵と博物館のパンフレット。パンフレットの絵は、学校のシンボルともなっている。

その後すぐにモスクワへ引っ越した。学校開設当初、8年生～10年生にかけて在籍したが、在学中17歳という若さで病死してしまう。しかし、その短い生涯の中で約10,000点もの作品を残している。また、彼女の才能は生前からソ連全土に知れ渡っており、高く評価されていた。死後においても宇宙飛行士ゲオルギー・グレチコが「もし宇宙人に、地球を代表する作品は何かと聞かれたらこれを見せよう」と彼女の作品を宇宙へ持ち運んだというエピソードもある。

独特なタッチで描かれる彼女の作品はブルガコフの『巨匠とマルガリータ』、トルストイの『戦争と平和』などの挿絵にもなっている。また、日本にもおいても個展が開催されたこともある。

<訪問の流れ>

- ①「ロゴス」到着、センター長及び校長による機関の概要説明
- ②絵やクラフトなど、子供たちの作品を閲覧
- ③「ロゴス」内の見学
- ④子供たちによる人形劇、フォークロアを鑑賞
- ⑤昼食を交えながら歓談
- ⑥校長室に移動しインタビュー・質疑応答
- ⑦ナージャ名称学校へ移動し、同校内に設置されているナージャ記念博物館を見学。当館長よりナージャについての説明を受ける。
- ⑧解散

(1) 児童創造センター「ロゴス」

<「ロゴス」センター長の話>

ようこそモスクワにお越しくださいました。補充教育について調査されたいとのこと、大変にうれしく思います。

この児童創造センター「ロゴス」は1992年に設立された。当時はモスクワの違う場所に作られ、私は初代のセンター長として関わった。1999年に現在の場所に移された。

この建物はもともと幼稚園で、ある意味私たちの活動には適しているが、必ずしもサークル活動などを行うことを意図して作られているわけではない。他の補充教育機関の建物も同様で、幼稚園の施設などを利用することが多いため、舞台などの設備が十分に備わっていないことが多い。舞台関係の活動は、振り付け、演劇、演奏、人形劇、フォークロア、民族舞踊などを行っている。人形劇の衣装を自分たちで作るスペースもある。また、就学前教育の子どもたちやその家族とグループ活動や英語学習などの発達学習を行っている。私たちのような多機能な施設では、スポーツ活動を行うことも多いが、ここでは十分なスペースがないためそのような活動は行っていない。

この機関は、2015年まで独立した機関として活動した。モスクワでは、2015年から様々な教育機関を大きな教育コンプレクスとして統合するキャンペーンを行っていたが、すでに小中学校が統合されたところに私たちのセンターも併合された。私はその時まで所長だったが、今は正式にはメソジストである。

独立した機関としての補充教育と、学校教育の中で行われる補充教育には、それぞれ特徴がある。

<教育コンプレクスの校長の話>

教育コンプレクスとして行われる補充教育は、就学前の段階から始まる。就学前教育の段階では、有料なサービスである。学校教育の中での補充教育は、有料・無料両方存在する。この教育コンプレクスでは2種類の補充教育を行っており、一つはこの施設（ロゴス）で補充教育の専門家が活動している。もう一つは、学校の中で教員が補充教育を行っている。私たちの学校のほうでも、補充教育専門の教師を雇っている。

補充教育は3つくらいに分かれており、創造センターではスポーツ関係は行っていないが、フィットネスや弓道、バレエなどのスポーツ活動を学校の中では行っている。2017年9月1日からは、学校コンポーネントの一環として、体育の3つ目の授業の中で5～11年生がサンボを行うことになっている。同じように、1年生は体育の授業の中でチェスをするようになる。芸術分野の活動については、ロゴスで積極的に行っているが、学校の中でも少なからず実施している。モスクワが科学技術分野を積極的に推進しようとしているが、私たち積極的に科学技術の活動を行っていきたいと考えている。9月1日の時点で、3～5歳はレゴを、5～7歳はロボットを使った科学技術活動を補充教育として行っている。小学校以上の子どもは、無料でロボットを用いた活動をするようになる。5年生以降の子どもについても、ロボットを用いた補充教育を継続して行う予定だ。

校長先生の強い思いもあり、協働学習を導入している。これはシュトゥルムと呼ばれるクラブ活動で、軍事・愛国心的要素もあり、救急救命的な要素もある。革命直後にジェルジンスキーがホームレスの子どもたちのために様々な活動を組織していたが、このクラブはそのようなものをモデルにしたものである。

私たちの学校はナージャ・ルーシェワという少女の名称になっているが、これは17歳という若さで亡くなった有能な画家である。生前より、有名な画家であった。最近、ブルガコフの『巨匠とマルガリータ』の新版が出版されたが、その中に彼女の絵が挿入されている。私たちのコンプレクスの中に彼女が通っていた学校が入っており、そこに彼女の博物館を作っている。私たちのコンプレクスでは、就学前教育の段階からその博物館に子どもを連れていき、彼女がどのような人物だったのか教えている。また、本校主催で絵のコンクールを開催しており、モスクワ市のどの学校の子どもたちも参加できるようになっている。さらに、心理学的な要素も取り入れており、おとぎ話のセラピー、砂のセラピーなども行っている。

記の説明を受けた後、同教室内で展示されていた「ロゴス」の子どもたちの作品（絵、クラフトなど）について、説明を受けながら鑑賞した（写真参照）。次に施設内を案内していただいたが、当日行われていた「発達支援活動」の様子も見学した（写真参照）。その後、小舞台のある部屋へ移動し、子どもたちによる人形劇、フォークロアなどを鑑賞した。



「ロゴス」の生徒たちの作品



「発達支援活動」の様子。
左の人物はこの活動の講師。



生徒たちによる人形劇（左）、フォークロア（右）の様子

<質疑応答>

—私たちは長年ソ連・ロシアの教育について研究をしてきているが、ソ連教育、社会主義教育の特徴・伝統の一つが補充教育だと考えている。日本においては、補充教育と類似している特別活動や部活に関して様々な問題を抱えているが、ロシアの補充教育に学びたい。

補充教育に関する私たちのアソシエーションが行っている取り組みを全土に広げたいと考えているが、日本における具体的な取り組みは何かあるのか？

—日本における取り組みの一例として、特別活動担当教員のアソシエーション（学会）がある。

そのような日露の協会間でビデオを見せあうなど、協力はできないか？

—研究者、実践者など、多様なメンバーが参加している。言語の問題はあるが、まずは日本語のホームページを参照していただきたい。

1. 学校コンプレクスでの補充教育と独立した補充教育との違いについて

〔質問〕学校コンプレクスにおける補充教育と、独立した補充教育との違いについてもう少し詳しく説明していただきたい。日本における特別活動は、補助的な教育的役割を付与されてきたが、特別活動が充実している学校は教科の活動も充実する傾向が認められるようになってきている。教科など従来の学校教育活動と補充教育との連携はどのようになされているのか。

〔回答〕以前から、学校においても独立した補充教育機関においても、補充教育を担当する教員がいた。しかし、学校の中での補充教育は、校長から見れば補助的であまり重要ではないものとして位置づけられていた。独立した補充教育機関では、もちろん補充教育が最重要だと考えていた。まずそのような認識の違いが両者にあった。独立した機関においては、補充教育専門教員の専門性を高めていくために、メソジスト・オーガナイザーなどが活動の内容について議論する機会が設けられており、私たち校長も以前はそのような活動を進める監督的な役割が主だった。

しかし、現行の学校コンプレクスにおける補充教育では、各学校がコンプレクスに統合された際にメソジストやオーガナイザーは解雇されてしまった。本校では校長の理解もあって、ほとんどの職員が残ることができたが。

私は以前、モスクワ市の補充教育関係の委員会に所属していたが、補充教育機関においては2つの役割があった。一つは教育的な役割、もう一つは社会・文化的な役割である。以前はこれらが4:6くらいの割合で予算配分がされていた。社会文化的活動の多くはコンクールやイベントなど様々あるが、PTA的な活動や出版物など無くなったものもある。私たちがコンクールを主催することもあったが、現在はそのようなことが中々できず、他が主催するコンクールに参加するという形が増えている。

2. コンクールについて

〔質問〕コンクールを主催できなくなった具体的な理由は何なのか？

〔回答〕それらを主導していたメソジスト・オーガナイザー（コスチュームや演出などを進める監督的な存在）がいなくなったことによる。これは予算配分も問題というより、制度改革の中で実験的にそのような役職を無くすことになった。私たちのコンプレクスでは例外的にそのような役割を担う職員を残している。

〔質問〕以前日本でも、学校のPTA活動に関して無駄をなくそうという議論が展開されたことがあった。しかし、学校というのは様々な仕事をする人が関わるような無駄に見えることも必要だと思われる。今の話を伺うと、補充教育に関して自主的に行っていた「いい意味での無駄」がそぎ落とされているような印象を受けたが？

〔回答〕その通りだと思う。これから将来的にどうなっていくのか。以前のレベルを保持しようと私たちは心がけている。職員配置に関わる問題は、私たち側の問題であり、なるべく保護者や子供たちがそのような問題に気づかないように以前やっていたことをやるように努めている。多くのコンプレクスでは以前無償だったことが有償になったりしているが、私たちの学校では無償での活動を何とか維持できている。

3. 補充教育の質保証に関して

〔質問〕学校コンプレックスに補充教育が統合されることによって、補充教育の質保証がより求められるようになってきているのでは？

〔回答〕むしろ、逆になってきているかもしれない。独立した機関の時は、教育活動に対して様々な行政的なチェックを受ける必要があった。当時そのようなチェックの基準は何もなかったが、メソジストたちが自分たちの教育活動の質を高めるために努力し、示していた。しかし、学校教育に統合された現在は、そのようなチェックがない。また、以前は行政区ごとに補充教育施設の所長が集められ、教授法に関する委員会があった。そこでお互いの経験を共有したり議論できたが、今はそのようなものは無くなっている。つまり、現在行われている学校の中での補充教育は、教育成果を求められることがない。教授法に関しても何も求められていない。しかし、私たちは以前と同じように教授法の向上に努めていくようにしている。

日本でもしこれから補充教育を進めていくなれば、自分たちで苦勞して教授法を考えることがないように、基幹的なベースを準備するべきだ。学習者の最終的な評価に関する規定などは、それぞれの機関ごとに作るのではなく、共通したものがあつたほうがいいのではないか。私たちは、何も基準がないままそれぞれが独自にプログラムを作成してきた。

〔質問〕補充教育は、それぞれの子供の活動の経験の中から「どうしたら自分の力を伸ばすことができるか」という問いを与えることにつながる。その中で、生きる力をつけていくことになる。なので、外にある知識を与えることで成果が測れるのではなく、一人ひとりの中にある力を目覚めさせることが補充教育の本当の成果のはずだ。そのためには、教師の「創造力」が非常に求められると思うが。

〔回答〕その通りだ。（連邦全体の）標準的な教育プログラムは、そのような点も含めて作成することが必要だと考えている。しかし、残念ながら、ロシアでは上の人たちがこのようなことに興味を持っていない。なので、私たちが自主的なレベルでアソシエーションを組織し、努力している。

（文責：黒木貴人）

<2017年3月6日（月）>

②モスクワ国立教育大学 Московский педагогический государственный университет（訪問時間：12時～15時）

- 対応者：Лубков Алексей Владимирович (ректор), Дудова Людмила Васильевна (проректор по межрегиональной и международной политике), Буйлова Любовь Николаевна (профессор Московский институт открытого образования)
- 住所：119991, Россия, Москва, ул. Малая Пироговская, 1/1
- 連絡先：Тел/факс +7 (499) 245-03-10、HP : <http://xn--c1arjr.xn--plai/>
- 入手資料：ПЕДАГОГИЧЕСКИЙ УНИВЕРСИТЕТ (газета Московского педагогического государственного университета 9 февраля 2017 года), «Профессора из университетов Японии в гостях в МПГУ» (<http://xn--c1arjr.xn--plai/novosti/professora-iz-universitetov-yaponii-v-gostyah-v-mpgu/>)



学長のヴコフ・アレクセイ・ウラジミロビッチは歴史学博士、副学長のデユトワ・リュドミラ・ワシリーエヴナは地域間・国際政策担当の副学長、専門は哲学で40年間教師教育に従事しているが肩書は准教授。この両名に2月11日の東京シンポジウムに参加したブウワロワが同席した。まず、副学長がモスクワ国立教育大学について大要次のような説明を行った。

本大学は今年創立145年になる。ロシアで女性に最初に門戸を開いた大学でもある。学生数は現在約4万人、45国からの留学生1450名も学んでいる。教員数は70名。教員の三分の一は博士号を有し、半分以上は博士候補である。このように本学の教員の質は高い。

多くの専門がある。数学、物理、社会科学他、教員養成を行っているが最近では就学前教育の教員が人気だ。バカブリアート、マギストラツカー、アスピランツカーあり、学位審査委員会は15ある。

本学は研究の拠点になっているだけでなく、教授法センターでもありロシアの子どもたちは本学の専門家が作成した教科書を使用している。

研究や教授法開発の拠点だけでなく、本学は少数民族の文化遺産を保護する役割も果たしている。本学ではレーニンが講義をしたし（1997年まではレーニン名称大学であった）、2001年の新学期（9月1日）にはプーチン大統領が来校し挨拶をした。今年が開学145年、直に150年となるので様々は記念行事を企画している。日本からも是非参加してほしい。

現学長は本学の卒業生だ。専門は歴史で歴史学部長や副学長も務めた。この学長のように本学の学長の多くは本学の卒業生だ。これは本学の誇るべき伝統の一つだ。本学は多くの著名な研究者を輩出してきたが、21世紀に向けて本学では教育と研究の結合強化をより深めたいと思っている。本学は3つのユネスコ講座を有している。それは、音楽、民族、メディアの3つである。

以下、質疑応答（質問（1）～（9））

（1）教育改革の成否は教員の質次第と思う。貴学では創造的な教員をいかにして養成しているのか。

先週の木曜日にプレス発表を行った。「今後の本学の発展3年計画」について話したのだが、そこで教師の人格的発達が重要であることを強調した。知識だけではだめだ。日本の明治維新から我々が学ぶところは大きいと思う。明治維新において日本は西洋を無批判にただ単にコピーしたわけではなかった。ロシアにおける過去25年間の変革を再検討する時期だと思う。25年間の変革においては、伝統的な訓育が軽視されたのではないかと反省している。子どもたちには知識だけでなく、価値意識や道徳性を身に付けることが不可欠と思う。我々は伝統的にこのような要素はもっているのだ

から、それを大切にすべきと思う。同時に比較教育的な観点も大事だ。ジュリンスキーが本学にはいるので彼の力を借りたい。

(2) ロシアの伝統的な教育学の見直しを行っているのか。

当然やっているし今後もしなければならない。先のプレス発表の折に、「ボールペンではなくて羽毛ペンに代えるというのか」との質問があった。決してそういうわけではない。日本人はボールペンだけでなく万年筆も使う（当日松永はペリカン万年筆でメモをとっていた）。日本の技術革新は素晴らしいが同時に伝統も維持している。我々も残すべきものは残すようにしたいのだ。

(3) 教育と研究の結合は、教員養成においてどのように具体化させているのか。

各教科の教授法センターがあり、学生を1年生の時から研究やプロジェクト活動に参加させるようにしている。セミナーや問題解決学習、実習などを重視している。物理学、生物学、化学などの自然科学分野は伝統もあり成果をあげているが、文系は旧ソ連時代のイデオロギー的なアプローチから抜け出せにくく、それが足枷となり新しいアプローチに移るのが困難のようだ。

本学では国際交流活動にも力をいれ、国際共同研究をメキシコの大学他と実施している。また本学には就学前教育施設やリツェイなどが付設されているので学生が実習を受けるのも有利だ。この3年間の動向としては、教育学心理学分野で応用的な研究が強まっていることだ。

(4) 教育と研究の統合を前提とした教員養成は4年間では無理ではないのか。フィンランドのように5年間で養成する計画はないのか。

ある。実際に5年制課程のバカブリアート設置を検討中である。

(5) ご存知のように日本の高等教育では私的セクターの果たす役割が大きく、教員の養成にも大きな貢献をしている。ロシア連邦崩壊後ロシアでは私立大学が出現した。ロシアにおける私立大学の役割（教員養成における役割も含めて）やその問題点、可能性について意見をお聞きしたい。

本学ももともとは私立の教育機関であった。その後国立（帝国立）になり今日の姿にまで成長した（サンクトペテルブルク大学やスラブアカデミーは帝国やロシア正教会のサポートを受けて誕生したもの）わけだが、ソ連崩壊後に誕生したロシアの私立大学は全てが健全に成長発達しているとは言い難い。トップの私立大学、上位10～15の私立大学はともかくとしても、残りの私立大学は財政面、教員の質、教育内容の質などの面で国立大学と比べるとかなり見劣りがするというのが現状だと思う。今後の動向として、国立大学自らが社会的需要のある専門に関してはその中に私的セクターを設置して運営していくということなども考えられよう。

(6) 「教師教育現代化プロジェクト」の今日までの成果についてお聞きしたい。また、昨年8月に新教育大臣が就任したが、そのことによって教師教育改革の方針に変化があると思うか。

現代化プロジェクトはあと1年で終わる。3年前にスタートした時に教師教育改革の重要な側面に焦点を当てながらやってきた。これまでの反省としては、バランスが

取れていない部分、弱い部分があるということだ。つまり教育内容面が不十分ということだ。2017年以降は、教育内容とくに訓育、道徳性育成の強化に力点を置くようにしたい。教師教育における教育実習の重要性に変わりはないが、今後はこれまでよりもそのウエイトは下がると思う。個人的に私は日本に強い関心を持っている。現代化と伝統のバランスの良い事例だと思うからだ。新しい教師教育改革計画の作成においても参考にしたい。(残念ながら、新教育大臣誕生に伴う教師教育改革の方針変更に関しては回答がなかった。)

この後、学内施設を副学長が案内。中央の歴史的な円形ホールは見事なもので、これまでもロシアの映画の撮影に使われたりしたようだ。「戦争と平和」の絢爛豪華な舞踏会のシーンなどが有名とのこと。145年前のままの図書館には、その当時に使用されていた長机と椅子が今でも現役であった。700人、1500人収容の階段状大講義室は教壇に立つとその大きさに圧倒された。音響がとともよく昔のままに今日でもマイクは使わずに講義ができるとのこと、確かに演壇で発声してみたらその響きは凄いものだった。この大学にはもともとロシア正教会が付属していた。そのチャペルは、現在教授会室としてまた国内外からの来賓のスピーチを受ける空間として機能しているとのことであった。

施設見学後、副学長室で再度対談を再開。我々の質問を受けて副学長が回答するというやり方でさらに1時間ほどを費やした。

(7) 教職へのロシアの若者の志望状況はどうか。

本学への志願率はおしなべて高く特に問題ではない。ロシアでは29の国立大学と100以上の私立大学で教員養成を行っている。ということは、それだけの需要があるということでもある。とは言え、大卒者の将来の進路として教職はトップというわけではない、でも、ボトムというわけでもない。教職の人気は給与改善などもあって、このところ高まっていると思う。男子で教職に就くものも増加中だ。国立大学の無償席(公費負担の入学生枠)は全体的に縮小傾向にあるが、教師教育に関しては増加している。本学の卒業生の全てが教職に就くわけではないが、教職以外の分野でも卒業生は立派に就職している。特に人間関係、コミュニケーション関係の分野では教師教育を受けた強みが生かせるようだ。

(8) 大学教員の給与改善は順調にすすんでいるのか。

進んではいると思う。しかし、今日のロシアでは大学教員・研究者の養成に問題があると思う。これは教育大学の教員・研究者に限らない。その理由の一つは、教員・研究者として一人前になるのに時間がより一層かかるようになったことだ。現在の大学教員・研究者養成の標準は4+2+3の9年制、かつては5+3であったので1年間延長したことになる。

(9) 新しい教師教育改革計画、特に訓育面の重視について補足説明をお願いしたい。

2018年から3年間の新しい教師教育改革計画では、教師教育のプログラムの70%は全大学共通とするが残りの30%は各大学の裁量とすることが同意されている。新しい計画では補充教育教員や **Вожатый**(旧ピオネール指導者)の養成も強化されると思う。**Вожатый**の養成はもともとウリヤノフスク州から要請されたものだが、今日では **Вожатый**に児童生徒の長期休暇期間中における安全対策要員としての役割が求められ

ようになっていし、企業からの訓育活動の専門家としての需要も高まっている。ただし、旧ソ連邦時代のような共産主義イデオロギーの具現者、指導者としての役割はない。

(文責 松永裕二)

参考資料 (モスクワ国立教育大学のホームページに掲載された我々のインタビュー調査に関する報道)

(出所 : <http://xn--clarj.xn--plai/novosti/professora-iz-universitetov-yaponii-v-gostyah-v-mpgu/>)

Профессора из университетов Японии в гостях в МПГУ



6 марта в МПГУ состоялась встреча ректора университета Алексея Владимировича Лубкова с делегацией профессоров из университетов Японии. В состав делегации вошли профессор Эндо Тадаши из университета Утсуномия Кьюва, (Utsunomiya Kyowa University, Utsunomiya-city), Юджи Матсунага из университета Сейнан Гакуин, Фукуока (Seinan Gakuin University) и профессор из Университета Хиросима Бунка Гукуин, Хиросима (Hiroshima Bunka GakuDen, Hiroshima). Встреча была организована по просьбе японской стороны. Коллеги из Японии проявили интерес к проблемам реформирования системы образования в России, в том числе изменениям в подходах к системе высшего педагогического образования, результатам реализации Федеральной программы реформирования педагогического образования, вопросам развития дополнительного образования. В ходе беседы много внимания было уделено подходам к вопросам воспитания в современной российской школе, а также проблемам учебно-методического сопровождения системы общего образования. Были затронуты и вопросы партнерства государственных и частных вузов в подготовке кадров в России и Японии, в том числе педагогического образования, поскольку в Японии 70% вузов – частные. С особым вниманием японские коллеги изучали вопросы, связанные с российским опытом подготовки водителей. Отдельное внимание уделили обсуждению вопроса престижности педагогической профессии в России, востребованности ее в обществе. Гости из Японии также обратили внимание на необходимость сотрудничества в вопросах развития педагогического образования в новых условиях, подчеркнули важность организации исследований в области психолого-педагогических наук, методики. Встреча показала, что коллеги из Японии чутко следят за изменениями в российской системе образования, произошедшими в последние 25 лет. Японцы подчеркнули, что сотрудничество и взаимодействие может быть взаимовыгодно. Была достигнута договоренность о продолжении контактов на всех уровнях. После официальной части проректор по межрегиональной и международной политике Людмила Васильевна Дудова провела экскурсию по историческому зданию МПГУ.

③モスクワ市立教育大学 Московский городской педагогический университет
(訪問時間：午後4時30分～6時)

- 対応者：Игорь Михайлович Реморенко(ректор)
Владимир Дмитриевич Нечаев(проректор по программам развития и международной деятельности)
Дмитрий Львович Агранат (проректор по учебной работе)
Катерина Львовна Кабахидзе(начальник управления международного сотрудничества)
- 住所：г.Москва,ул. Садовая-Самотечная,8
- 連絡先：+7 (499) 181-24-62、HP：<https://www.mgpu.ru/>
- 入手資料：Moscow City University



遠藤先生の挨拶「レモレンコ学長には2月に東京でお会いしてからひと月もせずまたお会いすることができて大変嬉しく思います。本日は宜しく申し上げます。」の後、松永が次の質問でインタビュー調査の口火を切った。

「本日貴大学を訪問する前に、モスクワ国立教育大学の学長と副学長にお会いして話を伺った。モスクワ国立教育大学では、訓育面での指導力強化などを中心に教師教育改革が推進されているようだが、貴大学ではどのような改革が展開中なのか、まずその概要をお聞きしたい。」

学長は、「今日のモスクワの天気は悪いが我々の大学はいつも晴れているので、今日の会合が実り豊かなものになることを期待する。我々は、このように日本の研究者と協力できることを大変望ましく思っている。今日は、我々の教師教育改革の取組み、とりわけモジュール制度の導入・試行について説明するために前もって資料を用意したので、早速教学担当副学長 Дмитрий Львович Агранат にプレゼンテーションをしてもらうことにする。」述べ、彼のパワーポイントによるプレゼンテーション (Презентация о Модернизации педагогического образования в России) が開始された。

Дмитрий Львович Агранат のプレゼンテーション

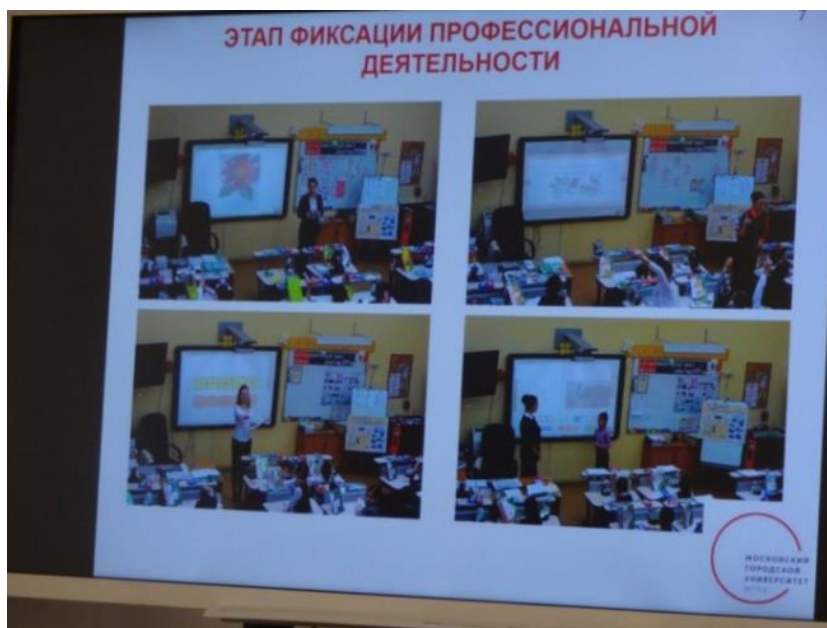
我々の大学は、3年前から「教師教育現代化プロジェクト」に参加している。このプロジェクトの目的は次の通りである。一つは、学生たちの教育成果を職業教育のスタンダードに対応させること、二つ目は、教員養成においてシステム活動アプローチを採用すること、三つ目は教育成果に基づいて教育プログラムを作っていくこと。こ

の場合基本的な柱となるのがモジュールである。

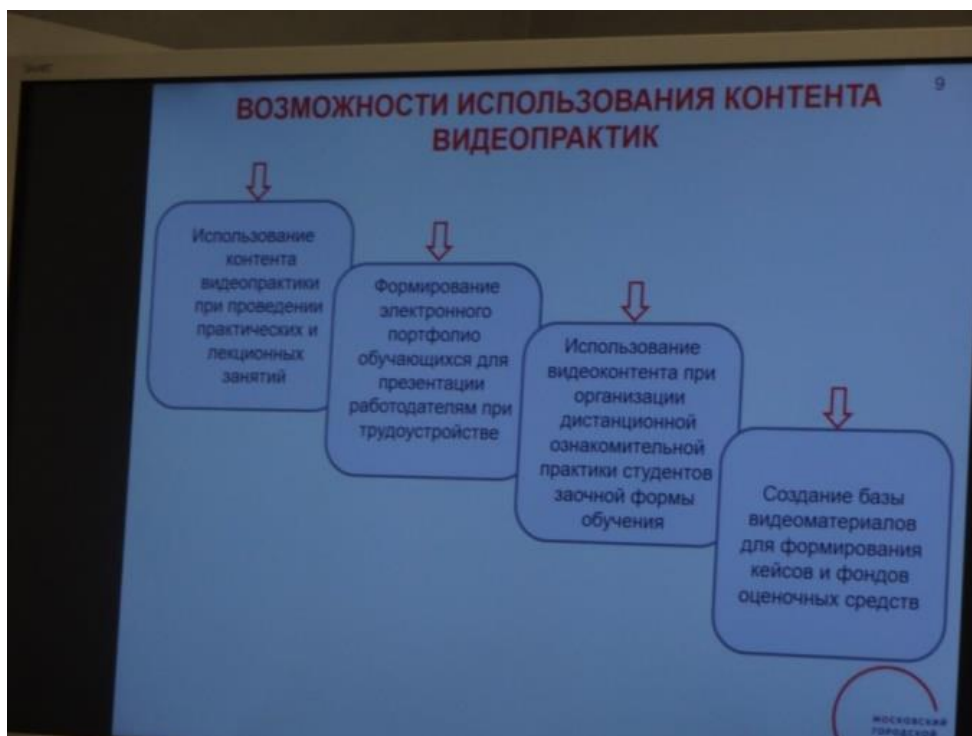
このモジュールを採用することによって学生は、複雑な統合された成果を得ることができる。モジュールでは、教室での授業、実習など学生の全ての活動が一つの目的のために統合されている。教室での授業でも実習においても学生たちは何らかの作業をしており、これがシステム活動アプローチとなる。このプロセスにおいて学生はアクティブな参加者となり、言われたままの受け身の学習ではなくて自ら進んで主体的に学んでいくことになる。

このスライド (slide1, 2, 3) は、学生の録画された教育実習を様々な観点（当該教科の専門家、教育方法学者、心理学者など）から分析しているところである。これは、職業的コンピテンシーを形成するために行われている。学生の活動をこういう風に記録に留める（фиксация, фиксировать）ことによって、その成果を確認したり修正すべき点を見出したりすることができる。

(slide1)

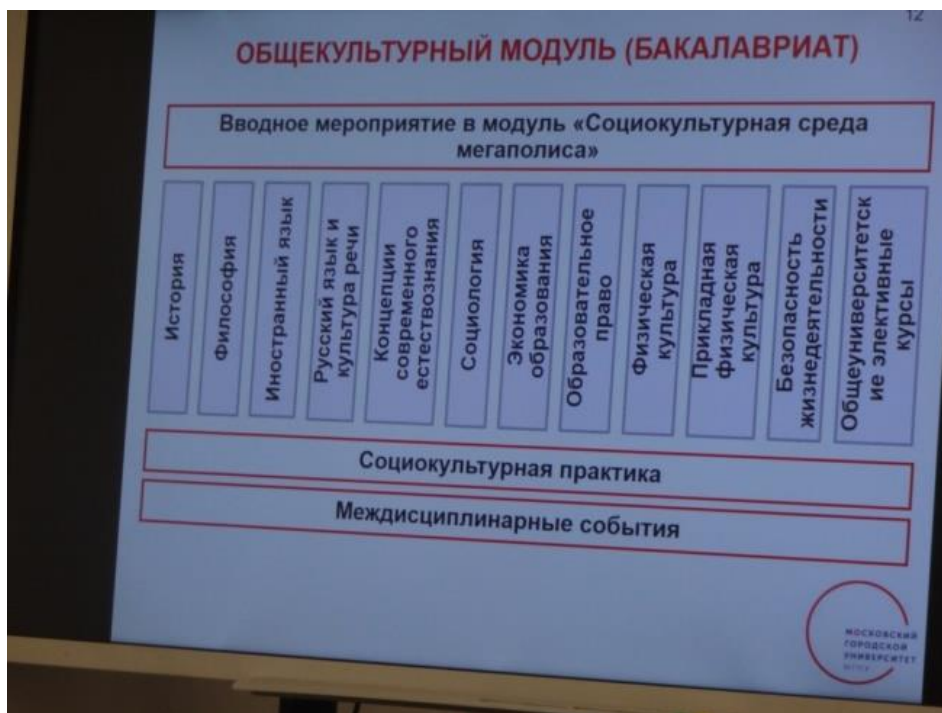


(slide2)



(slide3)

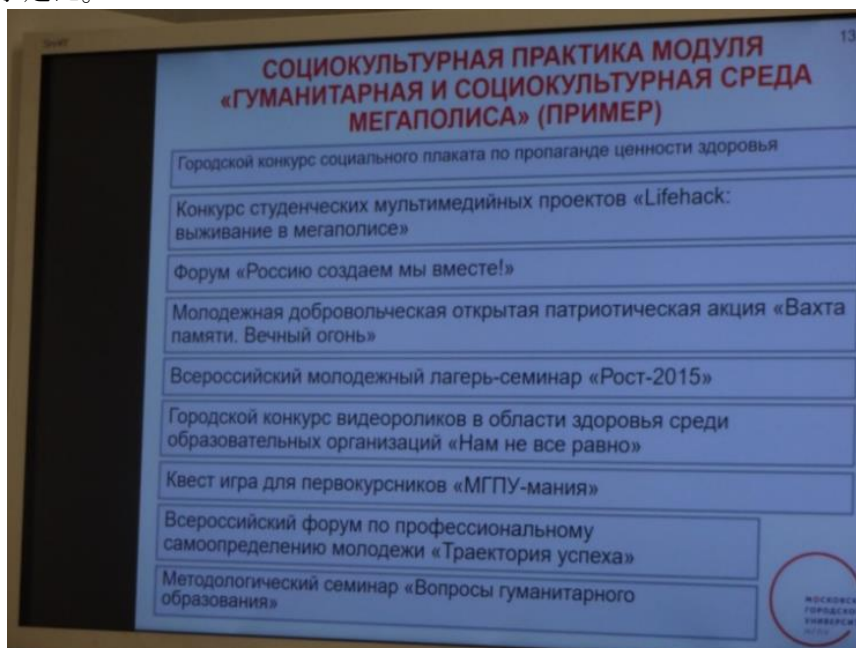
次に我々のモジュールについてももう少し詳しくお話ししたい。二つのモジュールがある。一つは、一般教養的モジュール（общекультурный модуль «бакалавриат»）（slide4）。このモジュールによって、教職に就く上で必要な一般教養を身に付けさせる。



(slide4)

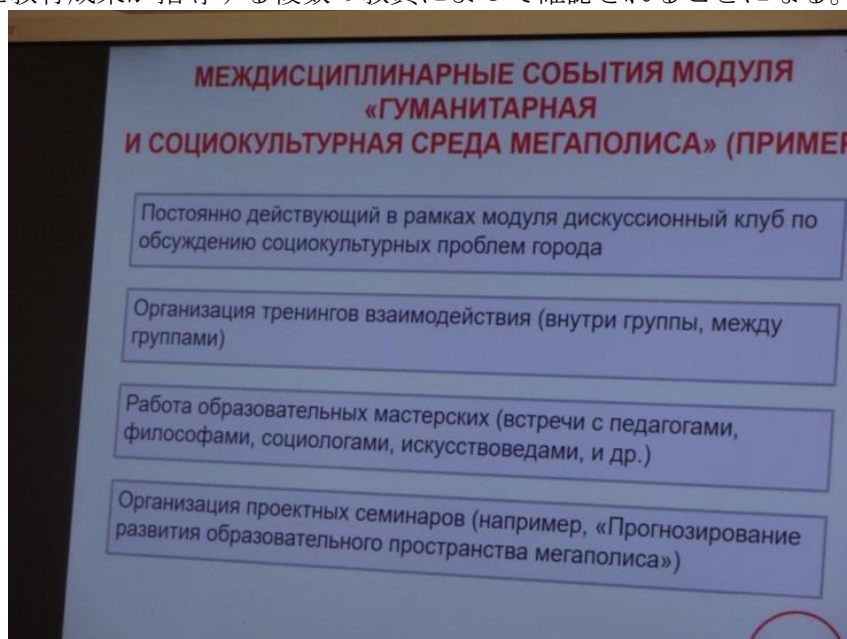
このモジュールに入っているのは、歴史、哲学、ロシア語などである。このモジュール

ルの興味深い点は、社会文化的実習（социокультурная практика модуля «гуманитарная и социокультурная среда мегаполиса»（пример）（slide5）というものがあることだ。この実習は、学生のイニシアティブで実施される。我々はモスクワ市のための教員養成を行っているので、この実習もモスクワ市の社会文化的な機能や空間・環境に基づいている。具体的には、市の博物館やテクノパークなどの活用である。来年度から講義の一部は、大学から博物館やテクノパークに場を移してそこで行われることになる予定だ。



(slide5)

социокультурная практика の他に、学際的事件（междисциплинарные события модуля «гуманитарная и социокультурная среда мегаполиса»（пример）（slide6）というのがある。このモジュールでは、複数の 学科 の学習によって学生が獲得した教育成果が指導する複数の教員によって確認されることになる。

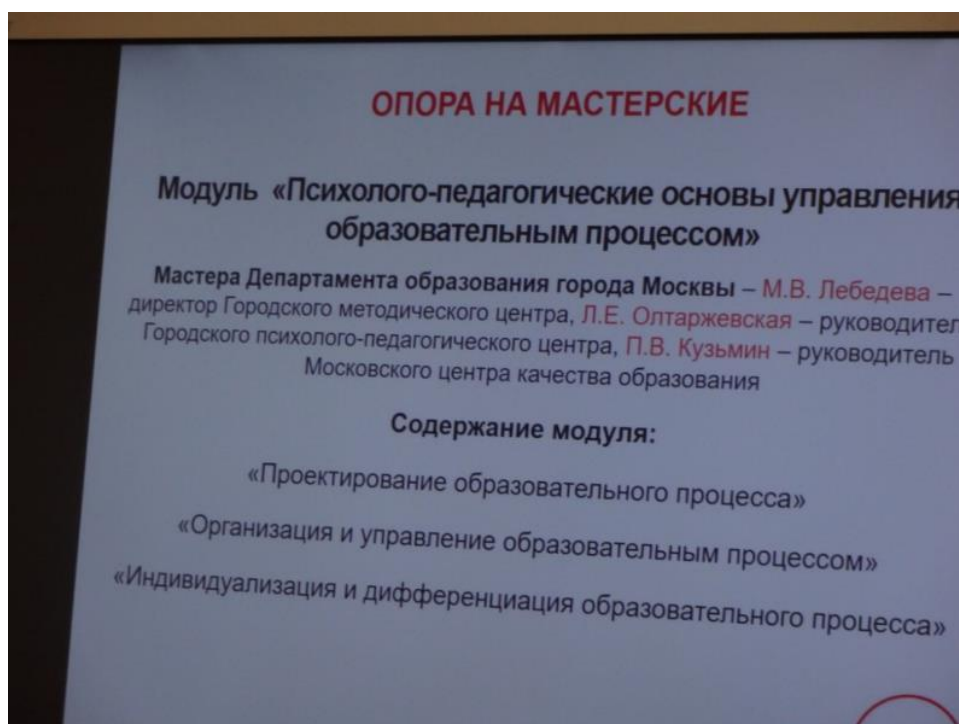


(slide6)

この一般教養的モジュールの他に、一般教育学的モジュール（общепедагогический модуль）もある。これは、一般教育学的な職業コンピテンシーを形成するモジュールである。このモジュールには教育学や発達心理学があり、教員を目指す全ての学生にとって必修である。

また別の形態のモジュールとして職業的モジュール（профессиональный модуль）がある。これは、教育プログラムのプロフィールによって違って来る。このモジュールは、教員に求められる具体的な資質・能力を踏まえて作成されている。このモジュールは各分野の専門家と共同で作成される。

一つの例として、モスクワ市の教育行政を担っている3名が、マギストラツウーラで講義をしているモジュールを紹介したい。このモジュールの中には、3つの дисциплина がある（slide7）。それは、「教育過程の設計」、「教育過程の組織と管理」、「教育過程の個別化と差別化」である。この3名は、我々と一緒に教壇に立ってこのモジュールを講義している。このモジュールの講義が終わってから総合的な試験が院生には課せられる。

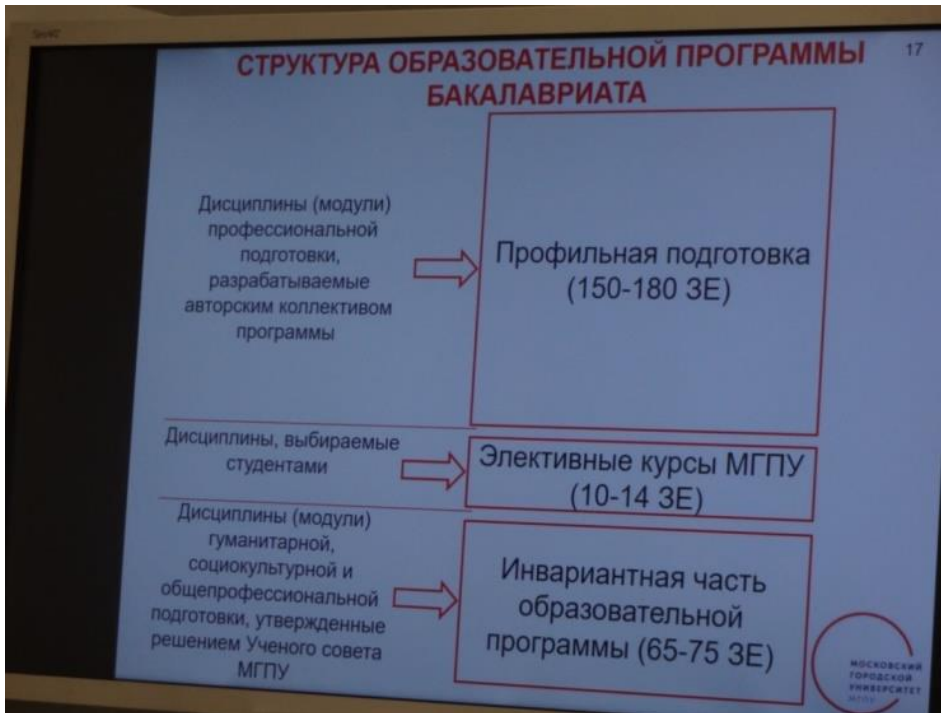


(slide7)

バカラブリアートは、次のように3つの部分で構成されている（slide8）。

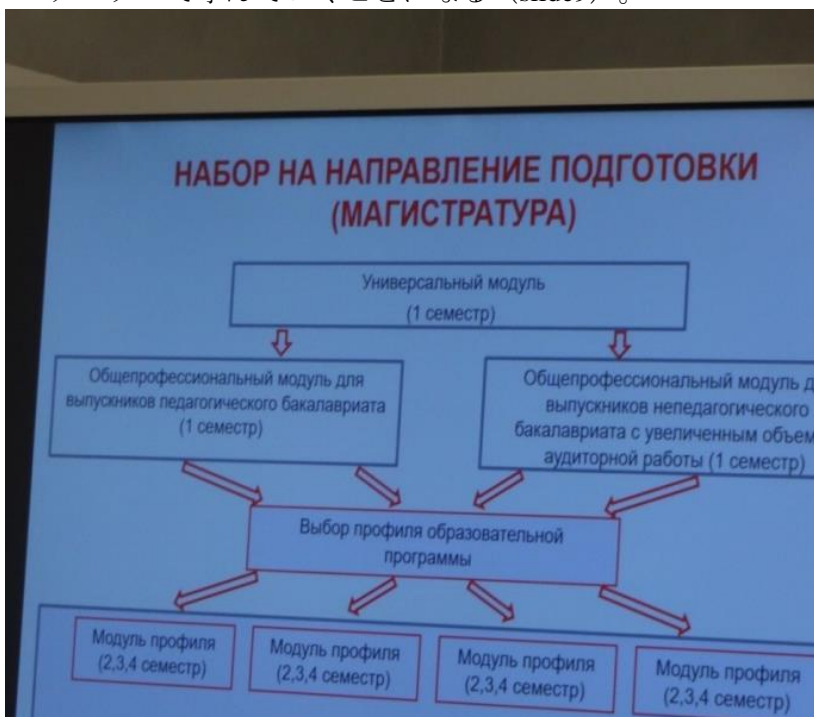
- ① 65～75 単位 必修科目（モジュール）
- ② 150～180 単位 専門科目（モジュール）
- ③ 10～14 単位 選択科目

将来的には③の選択科目の比率を高めていくつもりである。



(slide8)

例えば、修士課程の段階でこのモジュール制度（ユニバーサルный модуль）がどのように展開されているかということ、本学では教育学修士には学士課程の専攻を問わず入学できる。つまり、学士課程で教育学を学んでいない者も修士課程に入ってくる。これは問題でもあるので、修士課程入学後院生は二つのグループ、つまり、教育学履修者と未履修者に分けられる。教育学未履修者は、教育学関連科目が多く入っているモジュールを選択することになる。1セメスターが終わった段階で院生は教育プログラムモジュールを選択して、プロフィールモジュール（модуль профиля）を2，3，4セメスターで学んでいくことになる（slide9）。



(slide9)

この修士課程でどのような課題を研究していくのか、その研究が自分にとってどれだけ興味深いかを熟考して、生は自分のプロフィールモジュールを選択している。

今年度の修士課程では、昨年度よりも多くのプロフィールモジュールが提供されている。当然ながら、学生たちが選ばなかったプロフィールモジュールは実施されない。だから、モジュール制度の導入は、大学教員にとっては、ある意味、良い授業に向けての競争が強まったことになる。

以上のプレゼンテーションの後、1時間ほどの質疑応答となった。以下がその質疑応答である（(1)～(14)）。

(1) このモジュール制度はいつから開始されたのか。

2年半前からだ。まだ全学的に導入しているわけではない。いくつかのプログラムで試験的にやっている段階だ。重要なことは、形式的にこの制度に移行することではなくて、この制度導入によって教師教育の内容や質が実質的にどのように改善されるかを確認することだ。

(2) 従来からの講座はそのままでその講座から何人か出てきてチームを作りモジュールを作成すると理解してよいか。

大体その通りだがより正確に言うと、それぞれの教育プログラムのためにそのプログラムを実施するチームが作られる。例えば、必修の教育プログラムは、色々な講座から教員が集まって担当している。

(3) システムを変える時には伝統的勢力からの抵抗が生じるのが通常だと思う。彼らには、新しいシステムの導入意図を理解してもらわなければならないわけだが、このモジュール制度の導入には、子どもの学習に関する心理学的な理解の現代化、新しい学習心理学を教師教育にも適用するという目的があるのだと思う。そこで、その心理学的な背景について簡単にご説明いただきたい。

まず、抵抗に関してだがそれはもちろんある。しかし、我々は古いものを一掃してその代わりに全く新しいものを入れ込もうとしているわけではない。従来の制度にも、このモジュール制度に移行する際に実際に使える効果的な要素が十分備わっていると我々は考えている。教師教育において新しい課題が生まれたということを同僚に説明しようとしている。この課題の解決のために使えるテクノロジーを紹介している。学内でこのようなテクノロジーに基づいて新しいプログラムや教材が開発されている。このようにして、我々は、学外で開発されたものだけでなく学内で開発されたものも共有することができる。

学生には、伝統的なものではなくて新しいモジュール制度で学ぶ傾向（モジュール制度を好む傾向）が強まりつつある。学生の方が直面する課題は何かをよく理解しているように思う。教員側からすれば、これは学生を奪い合うための競争を意味している。この競争は教員にとっては刺激やモチベーションになる。

モジュール作成に参加する教員は、学内のある講座に属している者もいれば学外者もいる。彼らの中には大学ではなくて教育に関する NPO 的組織などに属している者もいる。例えば、アダムスキーなどがそうで、彼はここで教壇にも立っている。

2年半ほど前から始まったこのモジュール制度では、その教育プログラムに予算が付けられている。教育プログラムのリーダーは、与えられた予算の範囲内で必要とさ

れる教員を選ぶことになる。

(4) このシステムで学ぶことによって学生はどのように変わったのか、その変化についてお聞きしたい。

学生は何を学ぶべきかについて良く理解できるようになったと思う。また、教育プログラムの修得に対するモチベーションも高まった。学生たちの教育プログラム、教員に対する要求水準も高まり、そのプログラムを履修して自分たちの要求が満たされないことが分かるとそのプログラムを去っていく。

このシステムは、欧米のメジャー、マイナー、エレクトィブの制度にある意味似ているところもあるが、このシステムはロシア的に開発されたものである。欧米のシステムとの違いは、モジュール制度では学生の研究活動と従来型の教室での授業及び実習が統合されており、それらが総合的に評価される点である。

(5) モジュール制度では実習のウエイトが高いと聞いているが、その際に、学生の主体的な学習過程の評価はどのように行っているのか。

最も難しい課題の一つだ。これは高等教育における一つの伝統とも関係しているが、今まではプロセスを評価することが一般的だった。モジュール制度では、具体的に何が身に付いたか、その成果を評価することが大切になる。全てがうまくいっているとは言えないが、全体としてはこの方向に向かっていると思う。モジュール制度では、ケース、課題、テストなどを開発中である。これらによって、将来教師として働く上で不可欠な専門的な職業スキルを測定することになる。残された問題は山ほどあるので、日本で開発・蓄積された方法や経験があれば教えていただきたい。

最近テレビで、日本の病院で働く外科医の養成に関する番組をみたが、外科医の養成においても、活動的なアプローチによって外科医として現場で働く上で必要不可欠なスキルが身に付いているかどうかチェックされていることが分かった。こういった経験は我々にとって大変貴重である。これは、一つのアナロジーだと思うが。

ごく最近教育スタンダードとは別に職業スタンダードというものが出来た。これは、当該職業において必要とされるコンピテンシーを示したものである。教員養成においても大学での教師教育の内容を教師の職業スタンダードで掲げているコンピテンシーに対応させなければならないが、まだそれに着手したばかりというのが現状だ。しかし、学生たちは、徐々に職業スタンダードで示されたスキルを身につけなければならないこと、大学ではそのスキルが身に付いているかどうかチェックされるということを理解するようになってきた。

(6) 私は日本で 40 年間教師教育に携わってきたが、この 40 年間は改革の連続だったと思う。15 年ほど前に現職教師の評価基準を作成する研究チームに入ったことがある。その時の基本的な考え方は、大学で教員を養成するのだがそれは一人前の教員ではないというものであった。つまり、教員というのは 5 年、10 年という長い時間をかけて自立した一人前の教師に育てられるということであった。だから、現職の教員でも定期的に、5 年目、10 年目、15 年目と節目ごとに評価を受けるシステムが成り立っている。日本の教師はロシアの教師と同じように、長い年月教職生活を続ける、生涯を教師として生きる人が多いので、このような評価システムが可能なのだと思う。

我々はマギストラツウーラでこのモジュール制度を導入しているのだが、院生の多くは教職体験者（元教師）である。私自身学校で 7 年間教えていた。私の学生時代の

仲間たちは誰一人として、卒業後に教師として働く準備はできてはいなかったと思う。子どもの規律維持や教師への注目のさせ方などについて沢山の本を読んだのだが、全然上手くいかなかった。具体的なクラス、学校の状況に応じて色々と工夫が必要だったし、それぞれの学校でその同僚はどのようなチームなのかを理解するには時間も必要だった。

我々の研究によれば、大学卒業後教職についてからコンサルティングや支援を全く受けていない教員はその大部分が教職を辞めていた。しかし、教職に就いた最初の1年間の間に仕事上の悩みを相談できる体制(メールや SNS などによる相談活動を含めて)があれば、初任者の7～8割の者は教師の仕事を継続することができた。

(7) 日本では初任者にはベテラン教師がチューターとして付くという制度がもう30年ほど前から機能しているが、ロシアではどうか。

ロシアでもそうだ。

(8) 日本と同様にロシアでも、5年で教員の半分以上が離職するともいわれるアメリカとは異なって教師の離職率は低い。だから、両国では教員養成と現職研修(資格向上)を一体化することが可能だしそれがますます求められているのだと思う。モジュール制度についての感想だが、これはとても興味深いアプローチだと思う。しかし、その際に学生の学習目的、学習成果の設定がとても重要だと思う。学習目的が曖昧だったり厳しすぎたりしたらモジュール制度を導入してもその成果は乏しいのではないだろうか。

同感である。

(9) 2点ほど質問したい。1点目は、日本の大学では今後アクティブ・ラーニングの指導力をもった教員を養成することが求められているが、モジュール制度はアクティブ・ラーニングと関連しないのかということ、2点目は、貴大学の下部組織であるウシンスキー名称職業教育インスティトゥートでは2015年から国際技能競技大会(WorldSkills Competition)に参加しているとのことだがWorldSkills Competitionとはどのようなもので、また、これに参加するのは何故なのか、という質問である。

ウシンスキー名称職業教育インスティトゥートは中等職業教育機関である。我々は中等職業教育の専門家ではないが、このWorldSkillsの考え方では、学生が将来の仕事で必要されるスキル(実践的活動力)を身に付けたかどうかを評価することになる。その実践的活動力としては、子どもたちに関するモデル化された諸活動というもの、例えば、保護者に子どもが抱える問題を的確に伝える、子どもたちを外に公園などに連れていってお絵描きをさせる、インターラクティブな黒板を使って授業をする、等がある。学生のこのような活動はエキスパートによって観察され、ディスクリプターを使ってその活動が評価されることになる。これらの活動は、中等職業教育におけるアクティブ・ラーニングの一形態とも考えられよう。

残念ながら、WorldSkillsシステムでは、幼稚園の先生の適切な活動モデルはまだ十分に作成されてはいないと言わなければならない。溶接工やウェブデザイナーなどの職業に関しては、WorldSkillsシステムにおいてそのスキル基準は明確に定まっているが、教育の分野に関してはまだ曖昧な部分が多い。とはいえ、ロシアにおいてもこのWorldSkillsシステムに対する関心が高まってきたので、我々も参加してみようと考えた次第である。

(10) 2点、質問したい。1点目は、このモジュール制度は今後どのように発展していくのか、現在は貴学の一部での導入に留まっているようだが将来的には全学的に、さらには全口的に導入されて教員養成のスタンダードモデルになりうるとお考えかどうか、2点目は、1点目にも関連するが、モジュール制度の導入はロシア連邦全体での「教師教育現代化プロジェクト」の一環と理解しているが、この教師教育現代化に対する評価と今後の展望についてお聞かせいただきたい。

モジュール制度は、とても便利で学生にとっても教員にとっても分かりやすいものなので、今後全口的に広がっていくのは間違いないと思う。このモジュール制度というのは、教育成果に基づいて教育プログラムを作っていくようになっているので、教員が自分たちの教育能力を改善していく一つの重要なツールと考えている。もう一つ言えることは、このようなアプローチを取り入れると職業的な構造だけでなく教育現場も同時に変わっていくことが期待されるということだ。教員にとっては、彼らのルーティン化された毎日がより創造的で興味深い活動になっていくことになる。「教師教育現代化プロジェクト」の一環としてモジュール制度は、既にこのような成果をもたらしているのだから、これはロシア連邦の教師教育のみならずロシア連邦の教育全体に貢献していると考えている。

我々は、教師教育にとどまらず経済、法律などその他の分野の専門家養成にもこのモジュール制度を適用していきたいと考えている。ただし、ロシアは民主的な国家なのでこのモジュール制度の発展展望に関しても様々な意見があることをご理解いただきたい。今朝先生方が訪問されたモスクワ国立教育大学は、我々とは少し異なる見方をされていることをご確認されたのではないかと思う。しかし、教育制度の中で様々な見方、多様性があるということは良いことだと思う。

(11) 教育大学では、貴学とは若干異なって、教育内容並びに訓育を重視していかなければならないとおっしゃった。訓育については、こちらでも重視されているのではないかと思うが、このモジュール制度では学生の訓育面、訓育活動での資質能力をどのように形成しようとしているのか

もちろん教師はもちろん訓育活動もしなければならないのだから、モジュール制度においても、例えば、ボランティア活動などを通してその準備を行っている。具体的には、既に紹介した社会文化的実習においては、様々な社会文化的なイベントに積極的に参加させそれを通して訓育活動のための資質能力向上を目指している。キャンプなどに **Вожатый**(旧ピオネール指導者)として参加し子どもたちに対して責任を負うことは、将来の教師に必要な訓育面での資質能力を培う上で大変有効である。既に述べたように、大学の多くの授業を教室から博物館などに移す予定であるが、このような現場での実践的な授業も将来の教師の訓育能力を高めるのに貢献するはずである。我々は、訓育とは言葉ではなくて様々な活動を通して培われるものだと確信している。

もう一つ加えると、我々の学生は、実習の中で高齢者や特別な支援を要する人たちと接する機会を沢山持っている。このような機会もまた学生の訓育活動面での資質能力育成にとっても役立っていると思う。この大学はモスクワ市の教育大学なのだから、モスクワ市が直面している様々な課題に学生が社会プロジェクトとして積極的に取り組んでいくことが重要だと考えている。

(12) わが国では 20 年ほど前から、新しい学習領域として子どもたち自身が教科学習で学んだ知識を使ってある課題について積極的・主体的に学ぶ時間が設けられるこ

とになった。わが国の教員養成大学では、このような新しい学習領域の指導の仕方をどのように教授するかが課題になったが、その際に私の大学ではこちらのモジュール制度のようなやり方で対応しようとした。つまり、色々な講座から教員（専門家）が派遣されて一つのチーム（6人で構成）を作って、手探りながら改善を繰り返しつつ学生の指導に当たってきたわけである。このような体験を通して我々教員自身も非常に変わった。こちらのモジュール制度も、大学教員に対して同様な効果を持っていると思うがいかがか。

興味深いご経験をご披露いただき有難うございました。

(13) モジュール制度の導入は、ロシア連邦における教師教育の困難で新しい諸課題に対する果敢な挑戦だと思う。今後のますますのご健闘を心からお祈りいたします。

我々も、皆様のご質問にお答えすることによって、我々自身の活動を反省しより良く理解するためのとても良い機会となりました。このような討論の時間を持つことができると嬉しく思います。

(14) 本日お忙しい時期にもかかわらず長時間にわたって我々の質問に誠実にお答えいただき誠に有難うございました。心からお礼を申し上げます。

こちらこと有難うございました。今後ともこのような交流が継続できればと期待しています。又是非ご訪問下さい。

(文責 松永裕二)

参考資料

(1) Модель исследовательской магистратуры: итоги апробации новых модулей основных образовательных программ в Московском городском педагогическом университете (http://psyedu.ru/journal/2015/4/Vesmanov_et_al.phtml)

(2) Итоги апробации новых модулей педагогической магистратуры в МГПУ (<http://old.xn--c1arkau.xn--p1ai/files/projectdocuments/3f01a5d37cbd1d96ace50f9c2fb2e492.pdf>)

(3) Модуль 2. Педагогическое сопровождение ребёнка-сироты

(<https://www.youtube.com/watch?v=crVIZcliz9s>) : YouTube

<2017年3月7日(火)>

④ ロシア科学アカデミー「情報科学及び制御」連邦研究センター

Федеральный исследовательский центр «Информатика и управление» Российской Академии Наук (訪問時間：10:30-12:00)

- | |
|--|
| 1. 対応者：イーゴリ・ソコロフ所長 Игорь Анатольевич Соколов |
| 2. 住所：Россия,119333,Москва, ул.Вавилова,д.44,корп.2. www.ipiran.ru |
| 3. 連絡先：Факс: +7(495)930-45-05 , тел.: +7(499)137-34-94, e-mail: isokolov@ipiran.ru |
| 4. 入手資料：なし。 |



以下、所長のソコロフ氏とのインタビューの質疑応答。

<本センターの概要及びソコロフ氏の経歴について>

本センターは現在、連邦研究センターとして最大の規模のものである。創立は 2015 年。本センターには 5 つの研究所等が含まれている。すなわち、1983 年 8 月 2 日に設置された情報科学問題研究所 Институт проблем информатики を始め、ダラドゥニーツィン記念計算センター Вычислительный центр、システム分析研究所 Вычислительный центр（以上、いずれも旧科学アカデミー所属）、医学における最新情報技術研究所 Институт современных информационных технологий в медицине、教育情報科学研究所 Институт образовательной информатики¹である。建物は 5 棟。

職員はおよそ 1200 人、うち科学アカデミー会員は正・準含めて 15 名。センターからは 8 つの学術雑誌が発行されている。

本センターは、情報学関係の広範な分野をカバーしており、現在の最大の研究課題は人口知能 AI と情報セキュリティー問題である。

ソコロフ氏は 1954 年生まれの 62 歳。モスクワ大学計算機数学・サイバネティクス学部を卒業後直ちにアспиранトへ進学。1979 年通信制御システム研究所 НИИ систем связи и управления に就職。1980 年博士候補号取得。1990 年、ロシア科学アカデミー情報科学問題研究所 Институт проблем информатики РАН に異動。1998 年、論文「軍民共用巨大遠隔通信システム構築の基礎」で博士号取得。1999 年同研究所所長となる。モスクワ工科大学 МИРЭА 情報科学問題講座主任。2003 年ロシア科学アカデミー準会員。2008 年にロシア科学アカデミー正会員となり、2013 年から 2015 年の改革の最中に科学アカデミー幹部会主席研究者幹事 Главный учёный секретарь²を務めた。2015 年から本センターの所長。

<2013 年のアカデミー改革の背景、目的、現状、そして今後について>

¹ 1980 年代に情報科学の技術者の養成の必要性が意識されるようになった。1986 年に研究組織 ВНТК "Школа"（Временный научно-технический коллектив "Школа"）が結成され、情報科学を学校の教育科目にする試みが本格化した。この組織の実質的指導者は本研究所の所長アレクセイ・セミョーノフ Алексей Львович Семёнов である。本研究所は、セミョーノフ所長の下で教育情報科学に関する研究に携わり、2006 年にはセミョーノフの複雑系理論に関する研究で科学アカデミーのコルモゴロフ賞およびユネスコ賞も授与され、さらに、研究所には 2009 年にはロシア連邦大統領・政府賞が授与された。（参考：

Программирование в 1980-х годах (http://www.computer-museum.ru/books/n_ershov/1_ershov_programm_1980.htm#endnote1 2017.04.09.閲覧)、обо мне,Бим-Бад official Site(<http://www.bim-bad.ru/obo-mne/index.php> 2017.04.09.閲覧)、Институт Образовательной Информатики(<http://www.frccsc.ru/frc/iej> 2017.04.09.閲覧))

² 幹部会主席研究者幹事 Главный учёный секретарь は、正会員の中からアカデミー総裁の推薦を受けたものがアカデミー会員総会で投票により選出される任期 5 年の重職である。その職務はアカデミー幹部会事務局を主宰することである。すなわち、幹部会事務局長と言い換えることができる。

アカデミー改革の必要性は 1990 年代のある変化から生まれていた。その変化は、研究機関の中の非アカデミック部門で始まった。研究機関はアカデミーの研究機関、大学、産業セクターの研究機関の 3 種に分類できるが、非アカデミック部門とは最後の「産業セクターの研究機関」のことである。90 年代の経済的混乱・落ち込みの中で産業セクター研究機関の能力が著しく衰えた。アカデミー研究機関と大学には大きな変化はなかった。したがって、それらに関する政策も従来通りのものであった。しかし、研究者の生活は不安定となり、国外へのいわゆる頭脳流出も大きな問題となる一方、国内にとどまっている研究者も研究に専心できず、応用研究に走る傾向が著しくなった。

2000 年代に入って、国家の目が初めてアカデミック・セクターに向けられるようになった。二つの着眼点。一つは高等教育機関の研究機能を強化するということ。もうひとつはアカデミーの経営システムの改革であった³。

2008 年⁴のアカデミーの経営システム改革の方向は、外部(国家や民間団体)によるコントロールの試みであり、10 年ほど前から、管理のためにはマネージメントの専門家が必要との意見が強くなってきた。この方向は 2013 年の法改正により実現され、連邦学術機関庁 ФАНО がアカデミー傘下の研究機関のすべてを管轄下に収め、その経営にあたることになった。この結果、アカデミーはアカデミックなセクターのみとなった。

経営を研究と財政に分けるという考え方はソ連時代にもあった。当時、事務管理部 управление делами という組織があった。その組織では政府が事務方の責任者を任命していた。二つの組織(研究管理と事務管理のことか?)は 90 年代以後独立した組織となった。

ロシアの法制度の変化は激しく、アカデミー体制とのずれが大きくなっていった。たとえば、研究所はアカデミーの管轄下の組織として存在していたが、実は法制上の裏付けがあるわけではなかった。

2008 年に国家機関に関する重要な改革が行われた⁵。それは、国家機関を予算形態によって 3 種に分けるものであった。すなわち、官営機関 казенная организация、予算機関 бюджетная организация、自律機関 автономная организация の 3 種である⁶。科学アカデミーも当時アカデミー傘下にあった研究所も予算機関と位置づけられた。同格機関の上下関係はあり得ないはずだが、それが生じてしまった⁷。

³ 2004 年アンドレイ・フルセンコが教育科学大臣になって最初のアカデミー改革案が提出された。その内容は研究機関の再編縮小及び民営化などであった。2006 年には「学者クラブ」案と呼ばれる新たな提案がなされた。これらの案の主内容は実現することはなかったが、2013 年の改革で基本的な内容は受け継がれ、法制化された。すなわち、管轄下研究機関の財政権はアカデミーから切り離され、新設の連邦学術機関庁の下に置かれ、アカデミーは「学者クラブ」化し、実権を失った(遠藤忠「ロシア科学アカデミーの改革について」ユーラシア研究所『ロシア・ユーラシアの経済と社会』 2015 年 10 月号 №998、参照)。

⁴ 2006 年の間違いか? 2004 年 3 月、フルセンコ教育科学大臣が就任してまもなく、最初のアカデミー改革案が発表された。その後、2006 年に後に「学者クラブ案」として知られるがされ成されている。いずれの案もアカデミーをはじめとする学术界の激しい反対で実現には至らなかった。2013 年の動きはアカデミー改革としては 3 番目の動きであった。

⁵ 2010 年 5 月 28 日付連邦法 №83-ФЗ 「国立(公立)機関の法的位置の改善に関するロシア連邦法規の修正について」のことではないか。とすれば、ここでも時期についてのずれがある。

⁶ 官営機関は予算上の裁量権が最も弱くすべての費目は国家から指定されている。予算機関と自律機関には国家からの補助金が交付され、その用途の細目については裁量権をもっている。いずれの機関も収益活動を行うことができるが、収益を自己裁量で使うことができるのは自律機関と予算機関だけであり、連邦出納局地区機関に法人名口座を開設すること、銀行などの信用組織に口座を開設し預金や有価証券の購入売却などを行うことは自律機関のみに認められている。

⁷ 「生じてしまった」とは自然現象のような表現だが、もちろんこれは意図的なものとみるべきである。アカデミーと傘下研究所が分離する法制上の条件整備が行われたのである。

科学アカデミーを省庁化する構想もあったが実現しなかった⁸。実現したのは御存じのようにまったく別のかたちであった。すなわち、アカデミーと研究所が別の機関になったのだ。この改革によってアカデミーは研究機関ではなくなった。つまりアカデミーの任務から研究が除かれ、養成と研究成果の広報が残ったのだ⁹。

しかし、アカデミーと研究所の一体化は実質的に保障しなければならないものであって、努力を継続している。

2008年以前には、国家全体の研究計画は存在していなかった。教育省は大学での研究計画を策定し、各省庁は管轄下の各産業分野の研究計画を策定していた。もちろん科学アカデミーやその他の国立アカデミーはそれぞれの計画をつくっていたのだ。

2008年の改革で、科学アカデミーを含め6つの国立アカデミー統一研究計画が作られ、教育科学省ではロシア科学技術発展計画が作られた。これは軍事研究を除く大学と産業分野の研究計画に関する統合的な研究計画であった。

2016年12月の大統領令№642「ロシア連邦科学-技術発展戦略について О Стратегии научно-технологического развития Российской Федерации」により大統領府に戦略策定のための審議会がつけられ、科学や高等教育分野の戦略が作られることとなった。戦略査定にあたっては幅広い議論が行われている（ソコロフ氏はこの会議のメンバーでもある）。

以前に発せられた（連邦法）253号よりこの大統領令642号が優先する¹⁰。この点が大きな変化である。

科学-技術発展戦略には3つの重要な視点がある。

①科学研究は社会経済的優先事項によりその方向性を規定される。例えば、デジタル経済化とか、エコロジー社会化とかいうような視点によって科学研究の優先事項が決められるということである。

②研究組織の構造。加速器、生物実験装置、スーパーコンピュータなどテーマごとに主要研究拠点をづくり、拠点ごとに学術会議 *научный совет* を置きそこで拠点の運営について審議する。会議には当該研究分野の研究者、高等教育関係者、企業関係者、国家行政官僚の四者が参加する。

③統一的国家計画。大統領の指示により策定中。科学-技術発展戦略に基づき高等教育機関を含む研究機関で戦略を具体化するための実施計画を策定している。

2013年のアカデミーの改革は形式的であって（アカデミー体制の危機ということも多く反対があったが）、むしろ、自由度が向上したと思っている。孔子も言っているのではないが「風が吹いているときは壁をつくるのではなく風車をつくるのだ」と。

⁸ 2016年10月26から28日にかけて開催されたアカデミー総会では、研究所の整理・統合をやめるよう要求する決議とともに、アカデミー関連の学術機関全体を教育科学省の管轄下から引き離し科学・技術に関する独立の省を創設し連邦学術機関庁をその一部局にするという提言も決議されたという

（<http://expert.ru/2016/12/20/idet-volna/> *Ирина Федотова* «Expert Online» 2016, 2017.02.16.閲覧）。ソコロフの語り口では、2016年の総会以前にも同種の案が存在したかのようである。

⁹ 2013年制定のロシア科学アカデミー規則によれば、アカデミーの任務として以下の8項目が示されている。①国家政策への提案、②連邦の学術政策の立案と調整、③科学既述計画の専門的評価、④国家機関等に対する学術指導サービス、⑤国内外の研究成果の分析とその利活用に関する提案、⑥他機関・団体との学術協力関係の強化、⑦学術インフラ整備提案、学術と教育の結合強化、基礎研究のイノベーション力の効果的实现、研究者の社会的地位の向上、⑧学術成果の普及・宣伝。

¹⁰ このインタビューのなかでは、253号は「大統領令253号」と理解したが、ロシア政府の法令公式ポータルには大統領令251～254号が掲載されていない。大統領令№253で検索してみると見つかるが、ロシア連邦の裁判官の任命に関するものが出てくる。ところで、連邦法253号と考えれば、それは2013年9月27日付連邦法№253「ロシア科学アカデミーおよび国立科学アカデミーの再編ならびにロシア連邦諸法の修正について」と考えられるから、文脈的に整合する。そうだとすると、法律より大統領令が優先することになるが、これは別に考えるべき問題である。

(どうということかという質問に対して)、新しい体制では、施設・設備と研究所における研究の管理運営そして不動産の管理の三つがそれぞれ異なる行政システムで管理されている。研究機関の管理運営に関しての自由度は確かに低下した。しかし、旧来のアカデミー体制では、アカデミー（総会、幹部会、総裁、地方支部、部門...）が組織全体の研究に関する計画を作成することになっており、そのように動いているように見えたが、実際は下級の組織で作られた計画を上級で追認するだけというのが実態であった。このようなボトムアップ的なやり方はよくなかったと思う。

2008年以降、国全体の研究改革の方向性を考えるようになった。このことが新しい戦略の原則である。つまり、研究の内容を議論するようになったのだ。ロシアには戦略的な計画についての法律はあるが、各部門に分離したものであった。2016年の大統領令によって国家全体の発展計画が作られるようになったのだ。

ロシアの研究環境の現在の問題は、優れた研究者がいる一方で研究インフラが不足していることである。現在進められている研究センターの動きは、そのようなインフラ整備を可能にするものである。また、センター化によって既存の研究機関が統合され巨大化¹¹するだけでなく新しい研究分野や研究部門をつくることも同時に行われている。また、巨大装置や設備を備えた共同利用センターのシステム化も検討し進めている。

(政治や産業からの介入の恐れは考えられないかとの質問に対し)、.....。

(研究者の養成についてはどう考えるか)、本センターでも15専攻のアспиранトゥーラをもち、さらにいくつかの大学で拠点講座をもって養成にあたっている。それらの大学講座の中には、センターに所属する研究者が講座長になっている講座もある。モスクワ大学の情報学部では本センターの研究者が3つの講座の講座長を務めている。さらに、モスクワ市内にあるその他の10校ほどの大学で研究教育センターをもち、研究や教育（講義）に携わっている。

私が残念と思うことは、アспиранトゥーラが教育段階として位置づけられていることである。アспиранトゥーラは教育段階ではなく研究者養成の第一段階として位置づけられなければならない。アспиранトはかつて研究者として扱われていたのだが、今では学生として扱われなければならない。アспиранトは論文の合格をもって終了していたのだが、今では論文を書かなくともアспиранトを終了し学位を取れるようになった。残念なことだ¹²。

(報告者:遠藤忠)

¹¹ アカデミー傘下の研究所を含めすべての研究機関を対象に格付け作業が行われている。チェルノゴロフカ訪問に関する報告の中でも触れられるが、各研究機関の格付けに応じて存続、再編、閉鎖の措置が取られることになっている。再編方法の有力候補は、他の研究機関との統合であるが、格付けで優秀な評価が与えられた研究機関であっても単純な存続ではなく、再編の中核組織として他の研究機関との統合が進められている事例がみられる。本文中の「センター化」とは科学センターНаучный центрとか研究センターИсследовательский центрと呼ばれるこの種の再編方法を指している。ソコロフ氏が所長を務めている《情報科学及び制御》連邦研究センターも最近つくられたこの種の研究センターである（イリーナ・フェドートワ [Ирина Федотова](http://expert.ru/2016/12/20/idet-volna/) «Expert Online»2016.12.20。「合併・吸収の波がアカデミーを襲った РАН захлестнула волна M&A」 (<http://expert.ru/2016/12/20/idet-volna/> 2017.02.16.閲覧))。

¹² 同様の意見はチェルノゴロフカの固体物理学研究所でのインタビュー（同年3月9日）でも語られた。

<2017年3月9日(木)>

⑤ 学術都市チェルノゴロフカにある固体物理学研究所

Институт физики твердого тела Российской академии наук (訪問時間：10:30~13:30)

1. 対応者：所長・ヴィターリイ・クヴェーデル氏 Кведер Виталий Владимирович
前副所長・ニコライ・クラッセン氏 Классен Николай Владимирович
2. 住所：г. Черноголовка, Московская обл., ул.Академика Осипьяна д.2, 142432, Россия
3. 連絡先：Факс: +7(496) 522 8160, 8 (496) 522 8160,
тел.: 8(496)52 219-82, +7 906 095 4402, e-mail: adm@issp.ac.ru
4. 入手資料：クラッセン氏プレゼンテーション資料2点
Подготовка научных кадров в ИФТТ РАН по непрерывной цепочке школа-бакалавриат-магистратура-аспирантура. (パワーポイント)
Подготовка научных кадров в ИФТТ РАН по непрерывной цепочке школа-бакалавриат-магистратура-аспирантура. (説明用原稿)



<学術都市チェルノゴロフカ Черноголовка について>

モスクワの北西59キロメートルに位置する学術都市。チェルノゴロフカという地名は18世紀初めにすでに記録にみえるが、学術都市としての歴史は1956年に始まる。同年、チェルノゴロフカ村に化学物理学研究所の分室と所員のための居住区の建設が開始された。1970年代にはチェルノゴロフカはソ連邦科学アカデミーの学術センターになっていた。1975年、チェルノゴロフカは都市タイプの居住地に改造され、2001年には市に昇格した。2008年にチェルノゴロフカは学術都市¹³の地位を授けられた。

<固体物理学研究所 Институт физики твердого тела Российской академии наук>

連邦国家予算学術機関ロシア科学アカデミー固体物理学研究所 (ИФТТ РАН) は、1963

¹³ 学術都市 наукоград という制度は、1999年4月7日付の法律で制定され、2004年に一部改正されたものである。学術都市として指定される条件のうち最重要なものは当該地域の全労働者中学術・生産企業体で働く者の割合が15%以上であることとされている。現在、ロシア全土で学術都市に指定されている都市は14都市に上る

(<https://ru.wikipedia.org/wiki/%D0%9D%D0%B0%D1%83%D0%BA%D0%BE%D0%B3%D1%80%D0%B0%D0%B4> ロシア語版ウィキペディア Наукоград の項、2017.03.21.参照)。

年2月15日に組織された。ソ連邦科学アカデミーは、高凝縮物理分野と物理材料学における基礎研究の最適な結びつきと相互交流を目指してこの研究所をつくった。本研究所の課題及び組織原則の構築に当たって決定的な役割を果たしたのは傑出した材料学研究者であり、アカデミー会員であったゲオルギー・クルジュモフ Георгий Вячеславович Курдюмов とアカデミー会員ユーリー・オシピヤン Юрий Андреевич Осипьян、準会員チェスラフ・コペツキーЧеслав Васильевич Копецкийであった¹⁴。

広い市域にはいくつもの研究所と研究者や関連企業の労働者の住宅や学校、病院などが立ち並んでいる。

チェルノゴロフカには、本研究所の他にランダウ物理学研究所などの有名研究所等多数の研究所があり、研究センター化の動きの中でどのように再編するか検討を迫られているということである。

<クヴェーデル所長の話—研究所の概要等>

本研究所はおよそ50年前に創立。アカデミーの中では評価のよい研究所である。

研究員はおよそ200名でほとんどが博士ないしは博士候補の学位をもっている。研究員を含め職員は全体で500名である。

研究テーマは、固体物理学と材料学であり、基礎研究と応用研究の割合は半々である。半導体や光学材料の研究に優れており、海外との協力関係も盛んであり、対象国はフランス、日本、ドイツ、アメリカなどに及び、年間200人ほどの研究員が外国に出張しているつまり、平均すれば研究員当たり年1回は外国出張をしているということになる。私(所長)も日本に1年(東北大学)ドイツで5年、さらにスウェーデンにも滞在し研究に携わった。研究テーマは燃料やタービンの材料に関する研究を行った。

研究所では一般に研究の過程において低温状態を利用することが多く、毎月およそ500kgの液体ヘリウムを消費している。

皆さんは教育学研究者ということだから、本研究所が行っている研究者養成活動に関する話をしよう。

研究者としての「賞味期限」は40年くらいと考えられるから、本研究所の規模では毎年5人くらいの若手研究者を採用しなければならない計算になる。そのため、毎年15人の学生を本研究所に受け入れて教育している。学生たちの多くはモスクワ物理技術大学の学生である。

本研究所で教育を受けようとする学生は、バカラブル課程の3年生の後半に本研究所の実験室を選択する。4年生の最後に卒業研究を仕上げて提出するわけだが、それまで研究所の実験室を自由に選択して卒業研究につなげてゆく。つまり、2年半は大学で教育を受けるが、残りの1年半は研究所で研究スタッフの一員として研究を行うことを通して育てゆくのである。

このほか、教育科学省の認可を受けて本研究所のマグストゥル課程を開設することになっている¹⁵。この課程ではモスクワ物理技術大学の学生から5人、高等経済大学に新たに新設される物理学部の学生から5人を受け入れる予定。ちなみに、高等経済大学では5つの研究所と結んで物理学部を新設するという。

なお、固体物理学研究所ホームページの「教育」サイトには次のような説明が乗っている¹⁶。

およそ30年以上本研究所ではモスクワ物理・技術大学 МФТИ(Московский Физико-

¹⁴ 同研究所ホームページより (<http://www.issp.ac.ru/main/home.html> 2017.03.21.閲覧)

¹⁵ 連邦法「学術及び科学技術国家政策について」の改正2013年7月2日付№185で「学術組織は、マグストゥラ課程及びアスピラントゥーラ(アドユンクトゥーラ)での研究・教育人材養成課程、オルディナトゥーラ課程、補充職業教育課程、職業教育課程で教育活動を行う権利を有する(第5条学術組織1.1項)」となった。

¹⁶ <http://www.issp.ac.ru/main/education.html> 2017.03.23.閲覧

технический Институт)とモスクワ鉄鋼・合金大学 МИСиС (Московский Институт Стали и Сплавов)の学生が学んできた。1996年モスクワ大学が新しい分校(モスクワ郊外分校)をつくり、チェルノゴロフカがその基盤になった。固体物理学研究所で学んでいる物理技術大学と鉄鋼・合金大学の学生にモスクワ大学の物理学部の学生が合流したのである。モスクワ郊外分校は10年間存続し、2006年、分校に代わって新設学部すなわち物理化学学部がモスクワ大学に開設され、本研究所の研究員が教育に当たってきた。

以後、本研究所のマグイストゥル課程とアスピラント課程ではアストラハン大学、トムスク総合技術大学、バウマン記念モスクワ工科大学、ノボシビルスク大学、モスクワ州立大学その他の卒業生が教育を受けている。

<クラッセン氏の話—若手育成の取組について>

① 研究者の養成について

所長の説明の中であった大学生を指導するシステムは、本研究所の創設時から作られていた。現在いる200名の研究員のうち約9割、180名ほどはこのシステムで養成されたものである。

一般に、学生は、第2学年までに専攻を決め、第3学年からは一週間のうち数日は研究所に来て学ぶ。一部には第2学年の後半に来る学生もいる。最初全ての研究室を見てもらい、学生自身に学びたい研究室を選んでもらう。別に授業があるわけではなく一人の研究者として研究室のチームの中で研究に携わるのだ。半分くらいの学生は卒業研究を仕上げたあとは一般の進路に進む。つまり、研究職の道に進むものはここで学んだ者の半分くらいだ。卒業研究を終えて第4学年を終えたものでマグイストゥル課程に進んだものはやはりここで研究を続ける。バカラブル課程からマグイストゥル課程に進むものの中には所属大学を変える者、たとえばモスクワ大学からモスクワ物理技術大学に移籍するものもいるが、彼らの研究拠点がこの研究所だということは変わらない。

大学の修学期間の途中から(現在ではバカラブル課程の第3学年から)、研究所に来て実際の研究活動に参加しつつ学ぶというシステムはもともとモスクワ物理技術大学 МФТИ のシステムである。私たちとしては現在学生を受け入れる際は、物理技術大学だけではなく、モスクワ大学、鉄鋼合金大学 МИСиС、バウマン工科大学¹⁷などの学生を受け入れる際もこのようなシステムを採用している。

学生の所属大学は、物理学についてはモスクワ物理技術大学 МФТИ のほか、鉄・金属ではモスクワ鉄鋼合金大学 МИСиС や化学ではモスクワ大学物理化学学部などからもやってくる。

本研究所で学ぶ学生はすぐ職員になる。まずはじめは(3年生の段階では)実験助手 лаборант となり、次いでマグイストゥル課程でエンジニア—инженер、アスピラント課程に入ったら下級研究員 младший исследователь になる。大学生の場合10分の1の職務給 ставку を受け取ることもある。「高価で精密な実験装置などを扱う仕事だから、正式の職員として活動してもらわなければならない。したがって、その仕事に応じた職務給を支払うのは当然だ」という理由と、学生たちの奨学金は少ないので支援の意味で幾分なりとも職務給のかたちで支給しているのだ。財源は二つある。一つは研究所の予算からで、ある学生は2分の1の職務給5000ルーブルを受け取っている。それとは別に学生たちはさまざまなプロジェクトのスタッフになり、そのプロジェクトの資金から手当てを支給されている。場合によっては先の職務給より多くなることもある。まれには、教授や研究室長より多くの賃金を受け取っている学生もいる。もう一つ形があり、イーゴリ・プーシュキン教授はアカデミーの正会員でもあるが、彼は二つの企業をもっていて、その企業では彼の研究室のスタッフが開発した製品を製造しているのだが、学生たちのその企業のメンバーにもなって、その企業からも金をもらっている。なお、この企業では約40人の若手研究者が働いて

¹⁷ Московский государственный технический университет им. Н. Э. Баумана、1830年創立のロシアで著名な技術系大学。

いる。給料は結構良いようだ。

プーシュキン教授は今秋には本研究所の所長になるよう内部的な選抜を終えているところだが、本研究所で学んだ学生たちができるだけ多く学んだ専門性を生かして働けるように（現在卒業後の進路を研究者以外に求めるものは約半数いるわけだが）、10～15 くらいの企業を立ち上げることを構想している。このようにして、学生たちが自分の専門性を生かせる道を広げようというのが彼の考え方だ。実際には、ここで挙げた学部の卒業生は銀行を含めて一般の企業に就職した場合優秀な社員になるが...

これら若手研究者たち（35 歳未満）の写真を壁に掲示して全職員が彼らの顔を知るようにしている。これはわたしたちのユニークなところだ。そして、かつての若手研究者の中から Андрей Гейм¹⁸のような 2010 年度のノーベル賞受賞者のような優れた研究者が育ったことを我々は誇りとしている。

また、周辺の学校の生徒たちだいたい 8 から 11 学年の生徒たちを対象に、研究員と交流する場として、生徒向けのカンファレンスを毎年 3 月から 4 月にかけて実施している。

このような若手の中から優れた研究者が育っている。

しかし、近年は学生の質の低下が問題になっている。

いくつかの理由があるが、一つは、優秀な学生が今では、経済学や経営学、法学に流れてしまい、物理学研究の魅力が薄くなってしまったというのも一因だ。銀行や企業の給料が高くなり、今では、ノーベル賞の賞金がロスネフチの給料 2 か月分と同額だ。

人口学的な理由もある。1990 年代は出生率がひどく低下した時期であった。その時生まれた者たちが今の学生の世代なのだ。この問題は政府を意識しており、メドヴェーデフ首相は一つは政府として、もう一つは与党の組織で取り上げている。若い世代の自然科学に対するモチベーションをどう高めるかという問題はわが国だけの問題ではなく、広く諸外国でも同じような問題となっている。私はこの問題について政府の組織で委員をやっているのでこの二つの組織に招かれて意見を述べたり報告をしたことがある。この結果、現在、子どもたちを自然科学に近づけるための国家プロジェクトが策定中である。

40 年前の子どもたちのサークル活動の状況では、半分が科学関係で半分が芸術関係であったが、しかし、モスクワ市内の学校の現状では、科学技術系のサークルに入って活動する子どもたちは全体の 4% で、残りは歌ったり、踊ったりしているのだ。

昔は何もしなくても子どもたちがこの研究所に集まってきていたものだが、今は黙って来ないので、こちらから出かけて行って宣伝しなければならない。私はチェルノゴロフカから半径 50 キロ圏内の学校を回っている。こうした指導は学校の教員では能力が不十分なので、研究所の研究者が自ら担当して指導に当たる必要がある。しかしこうした仕事にはなかなか予算がつかないので人材集めが大変だ。奉仕の精神に訴えて手伝ってもらえない。

若い世代との交流の中から大人にないアイデアが得られることもある。また、大人の興味と子どものそれとではズレがあるので、配慮が必要な時もある。子どもたちのモチベーションを上げるには彼らがどのようなことをやりたいのかをしっかりとつかむ必要がある。

学校で子どもたち相手に自然科学に関する深い指導を実施する際に二つの考え方がある。

一つは研究活動の外面的なものを取り入れて、学校で通常行っている授業より幾分深めた指導を行うということが考えられる。新しい研究をするということではない。

もう一つの考え方は、これは私たちが推進しているものなのだが、それはいままで誰もやったことのない課題を子どもたちに与えて、その成果が実際の研究成果になるような課

¹⁸ Андрей Константинович Гейм . 2010 年のノーベル物理学賞をコンスタンチン・ノボセロフとともに、「二次元物質グラフェンに関する革新的な実験」で受賞した。ソビエト連邦で教育を受けたのちユーラシア大陸でさまざまな大学のポストにつき、2000 年には「カエルの磁気浮上」でイグノーベル賞を受賞しており、初めてのノーベル・イグノーベル両賞受賞者である（ウィキペディア日本語版 https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AC%E3%83%BB%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%A0#cite_note-Nobelprize_Geim-1 2017.04.06.閲覧）。

題を子どもたちに取り組ませることである。

どちらの考え方も共通の原則がある。それは普通の学校の施設・設備でできるものでなければならないということだ。電子顕微鏡などを使った活動などは行わない。いくつか具体例を示したい。

パーベル・プロトゴロフの例。4年前のチェルノゴロフカの学校の8年生だった生徒。彼はラジオ受信機に興味があった。彼は二つのジェネレーターをつくった。一つは、鋼鉄でできた短波の発信機^{ジェネレーター}であり、もう一つのジェネレーターはその鋼を爆破することができるジェネレーターだった。この二つは当時の科学雑誌を参考にして作ったもので、そこには何らオリジナリティはなかった。しかし、ジェネレーターが針金にどのような影響を与えたかをみると、いくつかのモードでは誰も見いだしたことの無いユニークなナノテクレベルの現象が見いだされた。それはナノテクレベルの連続したチェーンだった。細さはナノテクレベルの細さだが長さは60~70センチメートルほどのものだった。それは結局特許を取得した。そこにどのような応用的成果があったかということ、一つは放射線を電気に変えるということ、もう一つは高感度のバイオセンサーだ。長い糸なので掴めば抵抗が変わり、応用が期待できる現象が見られた。この成果は2015年の当研究所の報告書にも掲載された。この研究成果はさらに上級のジャーナルにも掲載され、その年のロシア全体の物理学分野でのトップ50の成果の一つに選ばれた。おそらく審査員たちは学校の生徒が出した成果ということには気が付かなかつたに違いない。気づいていれば、何らかのクレームがきたに違いない（といたずらっぽく笑った）。

次の具体例はセルギエフ・ボサートの生徒があげたものです。樹木に光や風が当たることによって1ボルト程度の電気が発生するのだが、したがって、一つの樹木から数キロボルト程度の電気を採取することができる。植物から電気をつくるこの技術は現在特許を申請中なのだが、これはまさに学校の生徒が作りあげた技術なのだ。

もう一つは10年生のアーニャ・クジノワ Кудьноваの研究だが、それは深海から石油を採取するポンプの開発だ。稼働するエネルギーをたいへん節約できるポンプなのだ。樹木が水を吸い上げる現象を調べ、それをヒントにして開発したものだ。薄い皮膜からできた管を海中に下して皮膜と海水の接触によって発生する電氣的な力によって石油の分子を吸い上げてゆく技術である。これは重要な研究であり、シベリアの石油は大変重い特性をもち、通常のポンプで半分程度しか吸い上げることができない。このポンプは皮膜から生まれる電氣的な力で稼働するものであり、電気エネルギーを消費するものではない。それでいて重い石油もすべて吸い上げる能力をもっている。この研究はロシアのエネルギー省のコンクールで1位を獲得した。アレクサンドル・ノヴァク大臣が1位の賞を10年生の女子生徒に渡したのだ。同じような仕組みは哺乳類の循環器でも見ることができる。実際心臓が作る気圧では血液を循環させるために必要な力の5分の1程度にしかならない。ヒトの循環器のほとんどは10ミクロンから30ミクロン程度のとても薄い皮膜できている管なのだ。この研究成果を循環器のカンファレンスで発表したわけだが、実際、血が流れている速さの何倍もの速さで電気が流れていることがわかり、……。これで人の病気の治療ができることが分かった。小さな管に電場を与えることによって、血液がよく流れるようにすることができる。

以上多くの例のほんの一部を紹介した。こういったプロジェクトは大きなカンファレンスでの成果がほとんどだ。

最近のロシア基礎研究ファンドの会議では子どもたちの研究にも補助金を交付する制度を創設することが決まった。

政府の資金で、子どもたちに見せるために、移動型の実験プレゼンテーション用のバスができることになった。このプログラムはいま策定途中である。

②研究所の改革その他について

2年ほど前から研究所の格づけ作業が始まっている。それぞれの研究所を以下のような三つのカテゴリーのいずれかに格づけするものである。チェルノゴロフカには科学アカデミー傘下の9つの研究所があり、それらをカテゴリー分けしているのだが、優秀とされる

第一カテゴリーには3研究所しか入っていない。

第一カテゴリー：優秀な成果を上げている研究所で、再編されるとしてもあまり大きな再編でなくともよい。チェルノゴロフカでは当研究所を含め3研究所（ランダウ理論物理学研究所、生物学関係の研究所）がこれに該当する。

第二カテゴリー：再編確実。

第三カテゴリー：完全に閉鎖。

第一カテゴリーの研究所であっても、改革するよう促されている。なにも改革しない場合には毎年10%ずつ予算が減らされることになっている。減らされた分は統合したところに回される。我々の研究所がどこかの研究所と一緒に統合再編を行えば、予算が増えることになる。いったん再編統合すれば5年間は第一カテゴリーとして保証される。

カテゴリーわけの基準は教育科学省で作成され、それに従って連邦学術機関庁 ФАНОでカテゴリー分けが実施されている。我々はいま難しい状況に置かれている。つまり、われわれが築いてきたブランドを守りつつ、改革を行い予算を獲得してゆかなければならない。学術予算全体をあまり変えないで改革を進めてゆくためにこのような仕組みが作られたのだ。10%というのはキーワードであって、例えば、連邦学術機関庁の予算も1年間で100億ルーブルくらい減らされており、これは学術機関庁の予算の10%くらいに当たる。

研究人材の問題。ソ連時代は多くの子どもたちが研究者になることにあこがれをもっていた。それは、当時のマスコミを通しての宣伝なども関係していたが、現在は研究者が活躍する姿がマスコミに登場することなどほとんどない。かつては専門の大学を卒業して当研究所に入所を希望する学生の3人に1人くらいしか採用されなかった。当時の選抜は、大学卒業時、アスピラント段階、採用選抜の3段階で学生が選抜されていたが、今では、入所を希望する学生はほとんどみな採用されるような状況だ。

また、現在は変化の激しい時代なので研究所としても将来展望をもつことが難しい。チェルノゴロフカでも研究所の統合(センター化)の話が出ており、たとえば、チェルノゴロフカにある研究所全体が単一のセンターに統合されるという案もあるのだが、そうなれば、本研究所でどのような専門の人材をどれだけ採用するかという計画ももつことができないということになる。

また、若い人が入ってきてても給与の保障がないのでやめてしまうなど人材確保の問題もある。モスクワ市の給与の2倍が12万ルーブル程度、モスクワ州の場合は平均賃金が低いのでそれより低くなるが、7~8万ルーブルくらいが必要だ。このくらいだと若い人も辞めずに研究所に残ってくれるのだが、なかなかそこまで出すのは難しい。住居は勤務する限りは無償で与えている。

人材問題と言えば、研究者の世代的なエア・ポケットの問題がある。つまり、45から55歳にわたる年齢の研究者が少ないという問題だ。ソ連崩壊後の90年代に研究者が流出し若い研究者が入ってこなかった結果である。

現在のリーダー層相当する年代の研究者の層が薄いという問題は、質の問題というより、むしろ経営の問題ととらえており、我々の研究所では、この秋には所長の交替を予定しているところだが、私自身もこれ以上研究室主任に止まることのできない年齢に達しているのでこれで降りるつもりだが、その後は、顧問やコンサルタントという形で残る予定だ。なぜなら、45から55歳の年齢層が薄いので、より若いリーダーとしての準備が十分できていない人がその職に就くことが起こる。その場合、経験ある者の助力が必要になるからだ。

(管理職者の年齢制限について、いつ頃法制化されたのか、とのしつもんについて)：所長・副所長レベルについては、2、3年前の法律が作られ制限が設けられた(就任時65歳未満)。今の所長は65歳を超えているので、先ほど話したように次の任期では新しい所長が選ばれなければならない。任期は5年。在任中に65歳を超えた時は所員の同意があれば任期いっぱい務めることはできる。

一般の管理職すなわち研究室長レベルでは70歳以上の者はなれないという決定が本研究

所の所長をやったこともあるオシピアン氏 Ю.Осипьян¹⁹がソ連邦科学アカデミーの副総裁であった時に幹部会決定で決められたと思う（つまり、ペレストロイカ期のこと）。ただし、現在アカデミーは機能していないのでこれはいわば私たちの暗黙の約束のような、伝統のようなものである。

（アカデミーと連邦学術機関庁の関係について）：アカデミーの組織(総裁、幹部会、各部門、その組織等々)は残っており、決定を下すことはできるが、連邦学術機関庁に対しては勧告的な意味しか持たず、それに従うか否かは学術機関庁しだいである。予算もアカデミーから奪われているし、所長の任命権も奪われている。

所長選出の今の制度は複雑なものであるが、説明すると、まず、研究所内の研究員会議 *ученый совет* で二人以上の候補者を決めてリストをつくる。候補は研究所の研究員集会 *научное собрание* の投票により決めるほか、アカデミー正会員 3 名以上の推薦によっても候補になる。候補者となる者は研究者であれば、所属は関係ない。

それらの候補をまとめて研究所内の研究員会議 *ученый совет* が上述のリストをつくり、そのリストを学術機関庁に提出する。機関庁にはそのリストを修正する権利がある。リストは学術機関庁を経てさらに大統領人事委員会(委員長はアカデミー総裁)に回される。人事委員会はリストを修正する権利をもっている。そこからアカデミー幹部会に回され、そこでも同じことができる。そこからリストは機関庁に戻され、機関庁から研究所に戻され、そのリストにある候補者で選挙を行う。候補者を削ったり、追加したりするのは各段階できるので、学術機関庁がこの仕組みの中心にある。選挙の告示は学術機関庁が行う。

さらに、以前は研究員だけが選挙人になれたのだが、現在は職員全員が投票できるようになっている。お掃除のおばさんも含めて一票ずつ平等に投票権を持っている...、正会員も掃除人も一票...。そこで選ばれた人が連邦学術機関庁で承認され、所長となる。もちろん承認されないこともある。学術機関庁が中心となって選挙が行われるという構図である。今回の本研究所の所長選挙でも、3月17日までに最初の候補者リストを学術機関庁に提出することになっている。リストは上述のような仕方で各機関に回され、最終的に秋に選挙が行われるのである。候補者の資格は特にない。ふつうは博士号 *доктор наук* をもっているものの中で選ばれるが、規定上は特に制限はない。高等教育歴を持っているものくらいで、あと年齢制限くらいしかない。

以上の所長選挙の制度は連邦学術機関庁の命令 *приказ* で決められている。

（大学教員の給与改善について）：そうした法律はあるが、財源の手当てがうまくなされていない。統計的には改善がなされているように見える場合でも、職務給を操作して、たとえば、給与実額は変えられないから職務給の 0.8 とか 0.6 とかにして、1.0 に換算すれば職務給は法律どおり増額された支給されているということにする、というようなことがなされている。

(報告者:遠藤忠)

¹⁹ Осипьян, Юрий Андреевич. 1988年10月20日から1991年12月19日までソ連邦科学アカデミーの副総裁を務める。

⑥高等経済大学・教育研究所 Национальный исследовательский университет
Высшая школа экономики (訪問時間：16：30～18：00)

- 対応者：Болотов Виктор Александрович
- 住所：101000, г. Москва, ул. Мясницкая, д. 20
- 連絡先：+7 495 771-32-32、HP：<https://www.hse.ru/>
- 入手資料：なし



＜ヴィクトル・ボロトフについて＞

ヴィクトル・ボロトフは1952年、ウラン・ウデに生まれた。1975年にクラスノヤルスク大学で数学のディプロマを取得。その後同大学で教鞭をとると同時に、連邦教育省の仕事にも従事した。特に、彼は「エゲの父 отец ЕГЭ」（ロシア語版ウィキペディアより）として広く知られており、1990年代以降の教育政策の旗振り役としても活躍した。ただし、後にも触れられるように、連邦教育科学省大臣が新しくなったことにより、現在は連邦教育政策から一定の距離を置いている。2005年にロシア教育アカデミー準会員、2009年には同正会員に選出されている。2009年より高等経済大学に教授として着任し、現在同大学学術評議会委員も務めている。

写真出典：高等経済大学ホームページ <https://www.hse.ru/>

＜ボロトフへのインタビューより＞

新しい教育大臣が宣言していることは、彼女が近年教育分野で仕事をしてこなかったことと関係しているのではないか。ソ連時代の学校教育の記憶に基づき、ソ連時代の教育が良かったと考えている。彼女はマスコミにも自身の考えを表明している。しかし、具体的な変化となるようなものが提案されているかという点、そうではない。人事に関しては、モスクワ国立教育大学、サンクトペテルブルグ国立教育大学の学長を交代させた。また、彼女はボローニャプロセスにも疑問を抱いているとの考えを示し、それらがきっかけで私は連邦教育科学省の協議会委員長をやめた。その後彼女は、同ポストにはサンクトペテルブルグ国立教育大学のメンバーにつくよう要請した。彼女が就任する前までの教育政策の流れは基本的に続いているが、新たな動向として教科・科目と教授法に関する教員養成が強化されている。加えて、精神的・道徳的な要素に関する議論が高まっている。

以前お会いした際のシンポジウムにおいて、日本においても教育内容の定着化とコンピテンシーベースの学習が議論になっていると同様だ。これはバランスの問題だと考える。世界的にも同様の流れであろう。教科型の教育については、TIMSSの結果も良好だ。しかし、コンピテンシーに関してはPISAの結果がロシアは思わしくない。だからこそ、私たちは教科型の教育は十分にできているとの認識のもとで、コンピテンシーを強化することを意図して活動してきた。

古いパラダイムにおいて、何か問題を解決する、特定の作品を読ませることは、あ

る意味子どもを使つてのツールだった。新たなパラダイムでは、子どもが何かの問題を解き、特定の作品を読むことにより、子どもの発達を促す。つまり、主体（大人か、子どもか）が違うのである。今後の教育では、両方が並立することだろう。これは昔からある議論である。ソ連時代、私たちは共産党より優れたものはないとの知識を持っていた。それがフォーマルな知識であった。しかし、90年代のソ連崩壊によってそれが（作られた）フォーマルな知識にすぎないと分かった。特定の問題に対して正解を教えることは、さほど難しいことではない。しかし、子どもたちがその正解に従って生きていくわけではない。日本が素晴らしい、ロシアが素晴らしいという「正解」を覚えたとしても、子どもがそれを「感じる」ことは別問題である。

宗教教育について、オリガ新教育大臣は力を入れようとしている。彼女は正教徒でもあるが、宗教教育によって、道徳心・愛国心を強化すると信じているようだ。ロシア正教の歴史を知ることは大事だし、ソ連時代にそれが無視されてきたことは決して良いことではないとも考える。しかし、多宗教国家であるロシアにおいて、宗教的訓育の推進に関しては慎重に考えないといけない。特に近年では、イスラムに代表されるように宗教間の衝突の恐れもある。もちろん、先祖の歴史を知ることでも大事だが、それは学校の教育とは切り離されるべきだ。大臣が新しくなり、このような議論がされるようになったこと自体は悪いことではない。問題は、誰が彼女のそばにいて、具体的な法案や文書にしていくのかということだ。

いずれにしても、ロシアにおいては1年後に大統領選挙を控えているので、劇的な変化はないだろうと考えられる。

< 質疑応答 >

1. 新教育大臣に伴う変化について

〔質問〕新大臣による明確な変化はないとのことだが、（ポロトフが連邦教育省の要職を辞任したことを代表するように）人事的な変化が起こっている。他に注目すべき変化はあるか？

〔回答〕私が連邦教育科学省の協議会委員長を辞めたもう一つの理由は、ЕГЭ（エゲ、統一国家試験）の他に各大学は独自の試験を課すことができるようにしたいと彼女が発言したことによる。この発言は問題だと思う。というのも、エゲ導入の目的は本来それを導入することによって、高等教育機会の地域間（都鄙）格差を是正することであった。従来、モスクワやサンクトペテルブルクにある大学を受験するためには、それらの大学が開講する受験生用講座を受講してその大学の独自入試に備えなければ合格は困難で、地方の受験生にはこのような講座を受講する機会がなく結果的に大都市の大学に進学するのはなかなかできなかった。エゲ導入によって遠隔地の受験生にも都市部の受験生と同等に大学進学機会が保障されるようになったのに、また、各大学に独自入試を許すことになれば元の黙阿弥だと思う。幸い、この提案の具体化の動きはまだない。エゲ廃止については大統領府も反対するだろうし、早急にそうなることはないだろう。エゲに関して変化があるとすれば、新大臣は2020年に歴史をエゲの必修受験科目にしたいと考えている。今はロシア語と数学が必修科目だがこれに歴史（祖国史と世界史）を加えたい意向だ。多くの国々で歴史は必修化されているので、ロシア連邦でもこれを必修化することは決して悪いことではないだろう。しかし、鍵となるのは歴史の試験の内容（試験問題）であろう。

新大臣の現在までの成果とすれば、新教科として天文学が導入されたことだ。これはロシア全土が笑っていたが、これはまだ必修化はされていないが、そもそも物理学の一部として扱われていたものが独自の教科として設定された。しかし、これは何のためか全くわからない。

2. エゲの改革動向について

〔質問〕新大臣はエゲだけでなく各大学が独自に試験を課すことも認めたい意向とのことだが、新大臣はなぜそのように考えているのか？

〔回答〕第一にエゲ導入の反対者は、エゲがソ連の教育システムを破壊してしまったという見方を持っている。ロシアには「顔がおかしいのなら鏡に文句を言うな」という諺があるが、ロシアの現在の教育に問題があるとしてもそれをエゲのせいにするのはおかしいと思う。しかし、専門家の中には、ソ連時代に比べて子どもたちの数学や物理の学力が下がったのはエゲのせいだと考えている者がかなりいる。新大臣もこの考えに与しているわけだ。もう一つの背景として、エゲの導入によって大学の学長の権限が小さくなったということがある。エゲ導入以前では、受験生の生殺与奪権は大学学長がもっていたので学長は大きな権限を享受していた。しかし、現在はそういうことはない。新大臣のこの発言は、全ロシア学長会議の時であった。学長たちは彼女の発言を歓迎したのは間違いない。しかしながら、学長の中にはエゲを支持する者も多い。というのも、彼らは、エゲが廃止されたり個別入試が認められたりすると、大学入試を巡ってまた不正が蔓延ると懸念しているからである。一番いい大学には現在でも独自試験を課す権限が与えられている。これらの大学では入学競争率が大変高いからである。しかし、その権限を与えられていてもそれを行使しない大学もある。我々の大学、高等経済大学は、その権限を付与されたエリート大学の一つだがその権限を行使してはいない。何故ならば我々の学長は、モスクワだけでなくロシア全土の遠隔地からも優秀な学生を受け入れたいと考えているからである。

〔質問〕エゲに関してもう一つ質問したい。エゲの問題には2種類があって、一つは選択肢の中から回答を選ぶ形式、いわゆる多肢選択問題、もう一つは記述式となっているが、このような問題形式は今後も継続されるのか？ わが国にも大学入試センター試験というエゲに似た全国的な試験制度があるが、その大学入試センター試験で記述式問題も課すようにする改革が始まっている。わが国の参考になればと思っの質問である。

〔回答〕これは政策というよりも別の問題、政治的な問題であろう。どういうわけか、ロシアではテストとは正解を選択肢の中から一つ選ぶものだという考えが定着している。エゲに反対する人たちは、エゲはこのようなテストに過ぎないと主張している。現在のロシア教育科学省の人たち、監督庁の人たちは、このような主張に同調してエゲから多肢選択問題をなくす方向に動きつつある。しかし、多肢選択問題はあまり出来が良くない子どもたちにとっては悪くはない形式である。というのも、少なくともいくつかの中から正解を選ぶわけだから。記述式だと全く何も書けないということもありうる。エゲの問題をすべて記述式にすると、不合格者（高校を卒業できない者）が増加する、あるいは合格最低点が引き下がるということになりかねない。しかし、高校を卒業できない者が大量に出るということは社会的に大きな問題とならざるをえないだろう。このような事態は誰も望んでいないので、結果的には合格最低点が引き下げられるということになるだろう。同じような議論はカザフスタンなどでも展開されているが、私はこの問題には正解というものはないように思う。アメリカの **Testing Service** は、現在多肢選択問題の選択肢を4から3へと変更する改革を行いつつある。これは、選択肢を少なくしても正しい評価は十分に可能だということである。

〔質問〕ロシアでは日本とは異なって私立大学はそれほど大きな力を持っていないようだが、ロシアの私立大学もエゲに参加しているのか。

〔回答〕ロシアにおいては、国家認証を受けた教育プログラムで教育をしている大学に入学するためには、国私を問わず受験生は全てエゲを受験しなければならない。もちろん、国家から認証を受けていない独自の教育プログラムで教育している私立大学の場合は、その限りではない。エゲの受験が必要でないケースとしては、中等職業

教育機関を卒業した者が同じ専門の高等教育機関に進学する場合がある。例えば小学校教員養成の中等職業教育機関（педучилище）を卒業した者が教育大学でさらに学ぶ場合などである。建築とかの他の分野でもこれは同様である。しかし、教員養成の中等教育機関の卒業者が異なる専門を大学で学ぶ場合は、例えば法律とか、エゲの受験が必要である。

3. 研究者養成に関して

〔質問〕午前中にチェルノゴロフカでアカデミー改革の話聞いた。研究者養成に関して主に回答いただき、特に学校の生徒に対する科学教育の取り組みが興味深かった。コンピテンシーベースの学習は、教育学だけでなく多様な分野が切実に求めていることを感じた。

〔回答〕ここで重要なのは、すべての子どもが科学的な世界観を持つことだ。プロジェクトメソッドが重要になってくる。研究者養成は、どちらかといえば補充教育の課題。関心の強い子供が各セクターの活動に自主的に参加し、早い段階からプロジェクト型で研究活動を始める。セミナーも、子どもたちの数学教育を普通教育と研究者教育と分けて論じている。

4. 教育アカデミーの改革について

〔質問〕科学アカデミーの改革に伴い、教育アカデミーにも変化があったと思われるが、具体的な変化は？また、教育アカデミーが科学アカデミーに編入されなかった理由は？

〔回答〕ロシアのアカデミーは、研究者クラブではなく、会員には高い俸給が支払われる。これは世界的にも稀である。科学アカデミー改革の出発点は、アカデミーの「研究」と「資産」を分離する必要があるとの考え方からであった。そのような考え方に基づく改革は私たちの教育アカデミーにも影響を及ぼし、教育アカデミーの資産は基本的に連邦管轄となった。より具体的には、科学アカデミーの不動産はファノのものとなったが、教育アカデミーは連邦教育科学省のものとなった。

教育アカデミー同様、芸術アカデミー、建築アカデミーも科学アカデミーには入らなかったが、これは「政治的な決断」である。「教育アカデミーを科学アカデミーに統合しないでくれ。統合したら、つぶされる」と教育アカデミー総裁が大統領に訴えたことによる。建築アカデミーも同様な事情により統合されなかった。芸術アカデミーに関してはそもそも研究活動をしていないし、政府もそこまで重要視しなかった。詳細については、改革に関するここ5年、7年の法律の改正の経緯を見ればわかるだろう。

5. 新教育大臣が選ばれた意味について

〔質問〕今回様々なところで話を聞いていると、新教育大臣は「何もしない」ために選ばれたように感じるが。

〔回答〕これは私見だが、彼女が選ばれたのは、議会選挙前のタイミングだった。選挙に積極的に参加するのは中高年層だが、リヴァノフ前教育大臣の発言は、中高年層に受け入れられなかった。オリガ新教育大臣は、それらの層が支持しやすい思想を持っているため、今回の人事は選挙対策としか思えない。実際、新たな大臣になってから新しい連邦法はできていない。つまり、彼女は従来の連邦法に従って仕事をする以外にないのである。大統領選挙までは、新たな動きはないであろう。問題は、選挙後だ。ただし、伝統的な価値観に振り子が動くかもしれないが、グローバル世界に一員であるロシアに革命的な変化はないだろうと思われる。

（文責：黒木貴人、松永裕二）

ヤクーツク調査報告書

(2017年3月26日～30日)

大谷 実 (金沢大学)

2017年(平成29年)3月 ヤクーツク調査関係の活動日誌

日時	時刻	活動
3月25日(土)	13:10~17:35 18:00~	SU263にて成田発—モスクワ着 シェレメチェボからイワンの自家用車でホテルへ移動 Мини-отель Булгаков (Ул. Арбат 49 под.2, Арбат, Москва)
3月26日(日)	日中 22:05	モスクワ市内散策・イワン・ヴィソツキー宅訪問 SU1750にてモスクワ発
3月27日(月)	11:05 13:00~17:00	ヤクーツク空港着、ホテルへ移動 Стерх (пр. Ленина, 8, Якутск) 第5番普通教育学校でサハ共和国数学科教員資格向上研修に参加 Средняя общеобразовательная школа №5. Республиканские курсы повышения квалификации учителей математики: Министерство образования и Саха (Якутия) АОУ РС(Я) ДПО «Институт развития образования и повышения квалификации»
3月28日(火)	10:00~11:30 13:00~13:30 14:00~16:30 16:30~18:00	北東連邦教育大学数学・情報学講座及び大学附属リセ Северно-Восточный Федеральный Университет имени М. К. Аммосова, Инстинкт математики и информатики Специализированный учебно-научный центр (Университетский лицей) 第5番学校に戻り学校で食事をとる。 氷結したレナ川を自動車で渡り、対岸の学校へ向かう。 途中でシャーマニズム博物館に立ち寄る。 ニジネ-ベストヤフスカヤ第2番普通教育学校を訪問 Нижне-Бестяхская средняя общеобразовательная школа №2 с углубленным изучением отдельными предметами 数学科教員に対する講演「生活のための数学」 Лекции: Математика для жизнь
3月29日(水)	10:30-11:30 11:30-11:40 11:45-12:30 14:00-16:00 16:00-16:30 17:00-18:30	サハ共和自治補充教育施設・サハ・ジュニア・アカデミー Государственное автономное учреждение дополнительного образования, Малая академия наук Республики Саха (Якутия) 大統領の生家 Акчорьомスキーリсе Октемский Лицей ヤクーツク市立リセ Муниципальное общеобразовательное бюджетное учреждение «Якутский городской лицей» 教員志望の学生との面談 ロシア科学アカデミーシベリア支部・永久凍土研究所 Федеральное государственное бюджетное учреждение науки Институт мерзлотоведения им. П.И. Мельникова Сибирского отделения Российской академии наук
3月30日(木)	10:00~11:00	サハ共和国教育省・教育発展-資格向上研究所

	12:25~13:15 19:10	Министерство образования и Саха (Якутия) АОУ РС(Я) ДПО «Институт развития образования и повышения квалификации» SU1751にて Yakutsk 発—Moscow 着 SU260にて Moscow 発
3月31日(金)	11:30	成田着

< 3月27日(月) >

Yakutsk 市立 Энэ・Оо・Крибощапкина 名称第 5 番中等普通教育学校 (特定教科を深く学ぶ) Муниципальное общеобразовательное бюджетное учреждение «Средняя общеобразовательная школа №5 имени Н. О. Кривошапкина» (с углубленным изучением отдельными предметами)
訪問時間: 13:00-17:00

対応者: Кычкина Антонина Анатольевна 校長
他 70 名の数学科教員.
住 所: ул. Орджоникидзе, 8-2
連絡方法: тел. +7 (4112) 341901

本校はレーニン広場に近く、立地がよいため研修会場として選ばれたとのことであった。学校の表札は、写真の通り、サハ語(左)とロシア語(右)のように二言語で表記されている。統一国家試験の掲示から、各学年3クラス規模のようである。



校舎は、永久凍土に杭を打ち込み、高床式で建設する永久凍土独特の工法によるもので、比較的新しいものであった。玄関には、「私のロシアはここで始まる！(МОЯ РОССИЯ НАЧИНАЕТСЯ ЗДЕСЬ!)」というスローガンが掲げられていた。

サハ共和国全域から数学科の教師が集まり、本日から3日間に亘り資格向上の研修を行った。参加者は70名ほどで、全員女性であった。

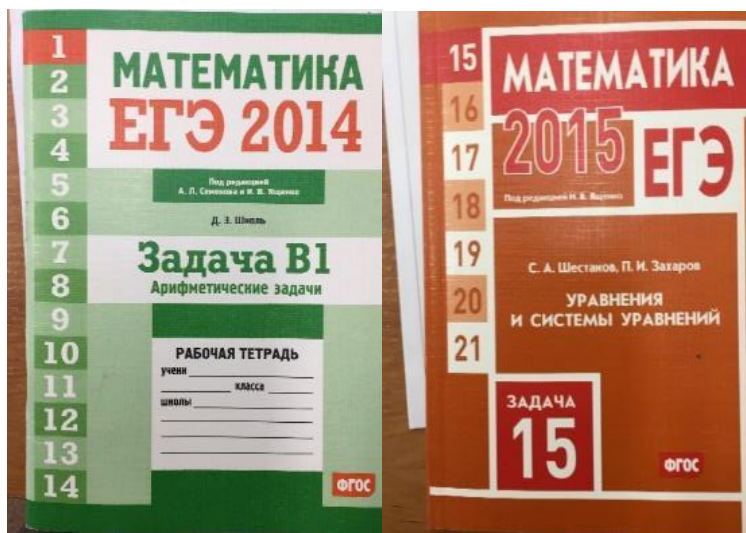
た。ある教師は、凍結したレナ川をバスで2日間かけて北極海の沿岸の村から参加しているとのことであった。研修会のテーマは、「ロシア連邦国家スタンダードのもとでの学校における数学教育」というもので、ソ連邦国家功労教師エム・アー・アレクセイエワの100周年を記念するプロジェクトに位置付けられるものであった。本研修は公費負担で無償とのことであった。

まず、講堂で開会式があり、マリーナ・イワノヴナ氏が我々を紹介し、その後3日間のスケジュールを説明した。その後、3部屋に分かれ、ヴィソツキー氏、シュクリャールニク氏、そしてマリーナ氏の講座が並行して行われた。私は、ヴィソツキー氏の「学校における確率」（資料）の講座に出席した。参加者は23名であった。講座の内容は確率論に関する数学的な専門知識（大学で必修科目として学ぶようなレベル）の講義と問題演習からなっていた。翌日以降は、EGЭとOGЭについての講習を行うとのことで、こちらの方が本研修の中心関心事のようであった。シュクリャールニク氏は農村学校（小規模学校での複式学級における数学科の指導法）、マリーナ氏のテーマは確認できなかった。最後の頁の上の写真は、初日の講座終了後のもので、残っていた50名の教員とともに写したものである。

ヴィソツキー氏の講習は数学教室で行われた。ヤクーツクの学校の教室もモスクワの学校の教室も見栄えは同じであり、数学者の写真が壁に掲示され、全面には小さ目の黒板と電子ボードがある。

側面には国家試験模範問題や統計データの掲示物、後面の書架には多面体の模型、教科書・参考書・EGЭ問題集（タイプは2種類で Базовый уровень（B1-B14で多肢選択と短答式）で「ビタミン」と呼ばれているようである。15-21は Профильный уровень の問題で記述式のものである。元モスクワ教育大学学長のセミョーノフ氏が監修しているものも多数ある。）、国家試験のファイル、生徒のワークブック等が収納されている。

休憩に廊下の掲示物を見ると本校の105周年を記念する展示物等のコーナーが設けられている一方で、統一国家試験の準備・対策に関する詳しい説明のコーナーもかなりの場所を占めている。次の写真は、試験の相談・面談の計画（教科、曜日、時間、場所）の掲示である。廊下には、こうした書類が20枚程度まとめて掲示されており、統一国家試験が学校にとっていかに重要であるかがわかる。



初日は、ヴィソツキー氏の講習を聞き、数学教室の掲示物・教科書・参考書・問題集、統一国家試験のデータ、生徒のワークブックと教師による評価などかなりの写真撮影を行った。このような長時間、数学教室を見学したことは初めての経験であっ

Утверждаю:
Директор школы: *Кычкина А.А.* Кычкина А.А.

График Консультаций 2016г.- 2017г.

Класс	Предмет	День недели	Время	кабинет
11а	Русский язык	пятница	13.10	214
	математика	Четверг	13.10	309
	история	Среда	13.10	309
	Обществознание	Суббота	13.10	309
	Английский язык	Вторник	13.10	309
	Физика	Понедельник	13.10	309
11а,б,в	биология	вторник	13.10	216
11а,б,в	химия	пятница	14.00	206
11б	Русский язык	суббота	11.40	304
	математика	суббота	11.40	202
	история	среда	13.10	306
	Обществознание	суббота	13.10	102
	Физика	пятница	14.00	215
	литература	вторник	13.40	307
	география	четверг	14.30	217
	информатика	четверг	13.40	206
	Русский язык	четверг	15.10	302
	математика	суббота	8.10	202
история	среда	13.10	309	
Обществознание	суббота	13.10	102	
Английский язык	вторник	10.00	309/303	
Физика	понедельник	13.10	309	
литература	пятница	15.20	216	

た。

< 3月28日(月) >

北東連邦大学数学・情報学部及び特別学習-研究センター (大学リセ)

Северно-Восточный Федеральный Университет имени М. К. Аммосова, Инстинкт математики и информатики, Специализированный учебно-научный центр СВФУ (Университетский лицей)

訪問時間：10:00-11:30

対応者：Афанасьева Вера Ильинична 学部長
Федотова Милана Егоровна 大学リセ・センター長
住 所：ул. Кулаковского, 48
連絡方法：тел. +7 (4112) 49-68-33

午前には、教員の資格向上研修とは別プログラムで、マリーナ氏の案内で、北東連邦大学の数学・情報学講座を訪問し講座長 Афанасьева Вера Ильинична 学部長（写真左の方はリセ・センター長）と面会した。解析学のご専門で、解析学講座の研究室にも案内くださり、3名のフタツとも面会した。ちょうど、サハ共和国レベルの数学オリンピックの採点をしているところで、黒板には受験生と得点の情報が表に整理されていた。

大学附属リセは、2016年8月に大学総長の命令で大学の施設内に英才向けの特別学級として開設された。生徒を大学生活に迎え入れ、大学のシステムに類似の学習過程を組織し、北東連邦大学の教官が広範囲の学問分野についてプロジェクト・探究型の



アプローチを行う。クラスは大学の自然科学棟に設ける。2016-17 学年度は 10 学年 22 名を受け入れ、基礎及び補充教育を行い、「物理-テクノロジー」プロフィールを設ける。生徒は、サハ共和国全体から集まり、寄宿舎もある。2017-18 学年度は新たに 10 学年を募集し、「物理-テクノロジー」と「数学-IT」のプロフィールを設ける予定である。選抜は、三段階でなされ、第一段階は 2017 年 4 月 10 日から 16 日、第二段階は 6 月 26 日から 6 月 30 日、第三段階は 8 月 22 日から 26 日にかけて行い、「物理-テクノロジー」は数学と物理の試験を、「数学-IT」は数学と情報学と ICT の試験を行う。さらに、連邦大学は 8-9 学年の通信制の生徒も募集し、インターネットを通じて 2 つのプロフィールの授業を受講できるようである。ただ、全日制も通信制も学費等を確認することができなかった。

新しいリセの説明を受けた後、私から生徒に数学の高校レベルの講義をするよう依頼され微分の利用の問題を話した。その後には生徒との対談になった。将来は、多くの人がプログラマー、銀行員、法律家等になりたいとのことであった。数学や情報学の研究者になりたいという生徒はいなかった（彼らは、「物理-テクノロジー」プロフィールの生徒であるからなのかも知れない）。生徒の中の 2 名（女子と男子）が口琴の演奏を披露してくれた。



ニジネ-ベストヤフスカヤ第 2 番普通教育学校

Нижне-Бестяхская средняя общеобразовательная школа №2 с углубленным изучением отделенным предметов
訪問時間：14:00-16:30

対応者： **Колмакова Ольга Васильевна** 校長

住 所： Нижний Бестях, Астахина ул, 5, д. 5

連絡方法： тел. +8 (4114) 34-74-27

昼食を取りに一端、第5番学校に戻り、教員研修生とともに学校の定番の昼食を頂く。その後、車（箱型のジープのような車で、ロシア産として国際的な賞をもらったこともあるというもの）に乗車し、レナ川の対岸へと向かう。大きなタンクローリー車が行き交う道路である。これが川かと思うと不思議である。



レナ川を渡りしばらく走ったところで町が現れ、現地のシャーマニズム博物館に30分程度立ち寄る。たき火をして手をかざす儀式を行い、館内を案内してもらう。地元の女性たちが、民族衣装の刺繍をしており、それも見学する。また、馬の尻尾だと思われる血が滴っている肉片が切り落とされて、無造作に置いてあり、それを使って魔除けを作るのかも知れない。ロシア語の説明が難解で、あまり意味をくみ取れなかった。

その後、ニジネ-ベストヤフスカヤ第2番普通教育学校を訪問した。そこでは、休暇中に第5-6、9、10-11学年の「幾何のオリンピック」（Авторская олимпиада по геометрии）を実施しており、問題ヴィソツキー氏らは、問題作成者たちにコンサルテーションを行い、私はオリンピックを受け終えて自主的に残った生徒たちと対談をすることになった。学校に着くと、民族衣装に身をまとった生徒からの歓迎を受け、油で揚げたパンをいただいた。その後、学校の食堂で、昼食が容易されており、2度の



昼食をいただくことになった。生の魚、馬の肉などの郷土料理のような前菜がおいしかった。話題は、教師が作成した幾何の問題に不備がある（解が一意に定まらないのではないかという数学の話題が中心となり、この学校の情報を聞くことはできなかったが、学校の冊子をいただいたので、そこから後ほど情報を補いたい）。最後の頁の



写真集は、この学校で作成して帰り際に下さったものである。

約1時間ほど学校に滞在し、すぐに対岸の第5番学校を訪問し、「生活のための数学」の講演を行い、参加者からの質問に答えた。日本には、「統一国家試験はありません」というと、会場から拍手が起きた。また、日本の教員養成制度を説明すると、「日本の教師は、異動前の教師が指導していた子供の指導を一体どうするのか?」という質問が多くでて、意外だった。右の写真の右端の女性が、教員資格向上センターの所長である。

< 3月29日(木) >

サハ共和自治補充教育施設・サハ・ジュニア・アカデミー

Государственное автономное учреждение дополнительного образования, Малая академия наук Республики Саха (Якутия)

訪問時間：10:30-11:30

対応者：Василий Павлов 校長

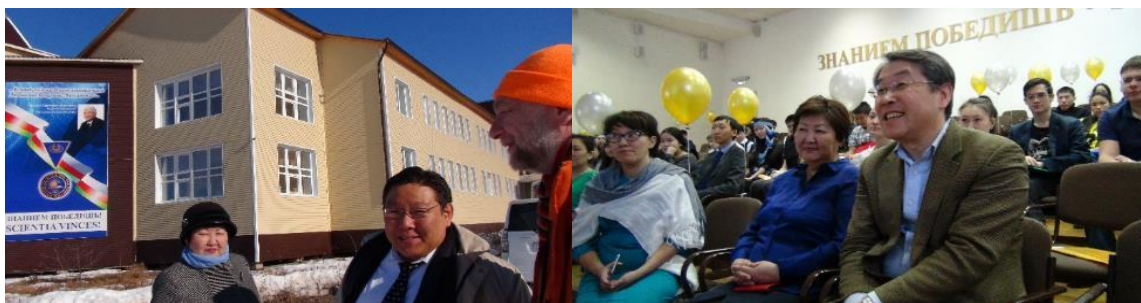
住 所：Хангалаский улус, с. Чапаево, ул. Г.Саввина, д.1

連絡方法：тел. +8 (4114) 42-45-62

午前、大統領立ヤクーツク・ジュニア・アカデミーの校長ワシリー・パブロフ（Василий Павлов）氏とともに、市内から1時間ほど移動し、大統領の生家があるハンガラスキー地区にあるジュニア・アカデミーを訪問する（途中で、有名な音楽学校があった）。大変立派な建物で、昨年完成したとのことで、当日はサハ共和国全域から選抜された英才児約100名を招待し、それまで取り組んできたプロジェクトの発表会に参加した。

ワシリー・パブロフ校長は、モスクワ大学の物理・力学学部卒業後、ケンブリッジで学位を取得したとのことである。施設はまだ半分しか施工されておらず、寄宿舎も兼ね備えている。まだ、半分しか完成していないが、本施設には自然科学の博物館や様々なセミナーを実施する小教室等があり、大変充実したものであった。永久凍土に施設を建設するには、そうでない場合よりも2-3倍の期間がかかるとのことであった。

当日は、学術会議「将来の知的リーダー2017」（Республиканский форум "Будущие интеллектуальные лидеры-2017"）が開催された。生徒たちは、アカデミー会員や、準会員などの称号をもち、自主的に会を運営していた。当日は、最初の2名のプロジェクト研究を参観した。一つは、肢体不自由者の脳に電極を埋め込み、能の電気信号により、人工四肢を動かすもので、もう一つは日本の筑波大学で開発されているロボットスーツを廉価に生産する技術に関するものであった。ヤクーツク・ジュニア・アカデミーは、年間を通して、こうした活動を展開しており、日本との共同会議を開催したいと意欲的であった。



アクチョームスキー・リセ Октемский Лицей

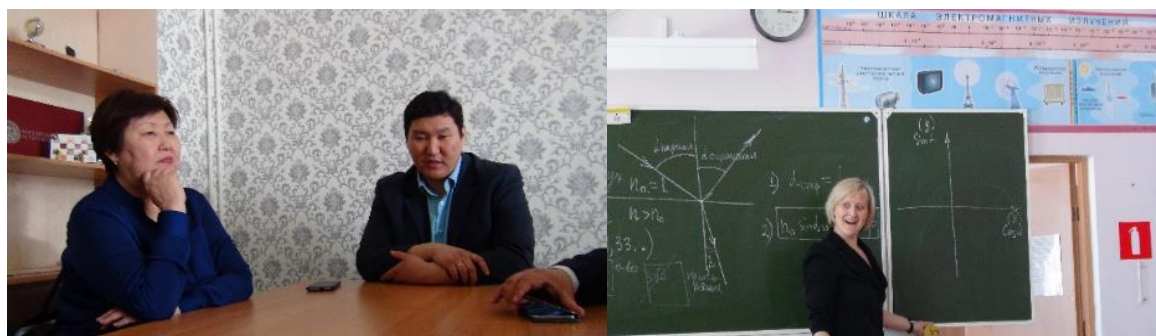
訪問時間：11:45-12:30

対応者：Ю. Семенов 校長

住 所：Хангаласский улус, с. Чапаево, ул. Николаева, д. 1

連絡方法：тел. +8 (4114) 42-24-87

ジュニア・アカデミーの隣に隣接して、大統領の生家があり資料館になっていた。さらにその隣には、アクチョームスキー・リセができたばかりで、そこを訪問した。校長のセミョーノフ（Ю. Семенов）氏はジュニア・アカデミー校長の教え子で、本年着任したばかりであった。そこで、物理の授業を参観した。物理教師は、モスクワからヤクールクに来



て教えているとのことで、給与面等の条件やよいためにはないかと思われた。また、授業意外に、ヤクーツク市内から休業中に補充授業を受講しにきている生徒たちもいた。この学校には、科学の設備が潤沢で、日本のサイアモンド会社から多額の寄付あったとのことであった。

リセから市内に戻る途中に、立派な一戸建ての教員用の家が多く点在していた。このような農村地域で5年間以上教師をすると、市から住宅を建てる資金が提供されるとのことであった。

ヤクーツク市立リセ

Муниципальное общеобразовательное бюджетное учреждение «Якутский городской лицей»

訪問時間：14:00-16:00

対応者：Сидоров Иван Александрович 校長

数学科教員 4名

住 所：улица Ярославского, 14

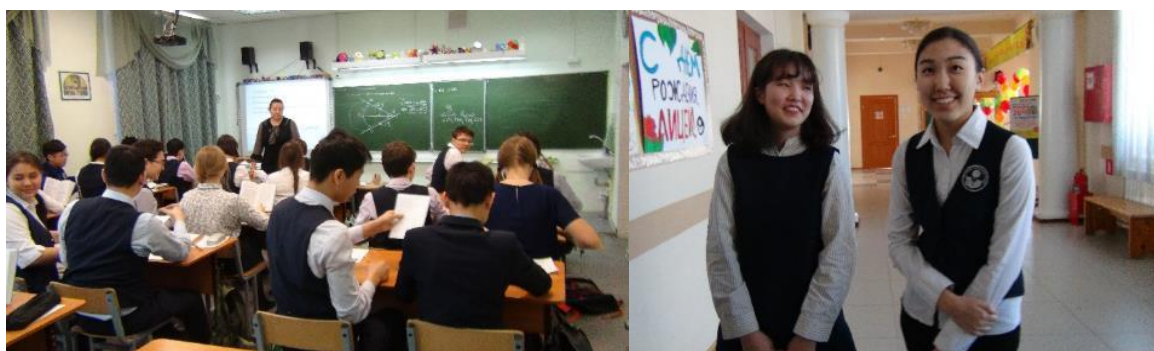
連絡方法：тел. +7 (4112) 42-24-20

レーニン広場の近くにあり、比較的早く小さ目の建物で、生徒数が多いため二部制を取っているとのことであった。数学科の教員室は、教室を通らねば入ることができ

ず何度も授業中に教室を出入りすることになった。この学校では、平常の授業が行われており、幾何の授業を参観することができた。熟練のロシア人の女性教師であり、生徒の動機付けを大切に、また生徒の考えを大切にしながら、教室全体の学習にも広げていく、私にとっては素晴らしい授業であった。

こうした熟練教師が多数いるとすれば、ロシアの数学教育のレベルはわが国よりも高いのではないかと感じた。その後、校長の Сидров Иван Александрович 氏を表敬し、10分程面談をし、種々のお土産（チョコレート、学校の手帳、馬尻尾の毛の魔除け）をいただいた。私は、すでにお土産が尽きており、大変申し訳なく学校を後にした。

このリセでは、英語を流暢に話す生徒が学校を案内してくれた。左の女子生徒は、日本語も独学で学び、かなり上手であった。彼女たちが、私を第5番学校まで道案内を案内をしてから、自宅に戻った。大変、親切でしっかりした生徒たちであった。



北東連邦大学の数学科教育法講座の数学科教員志望者との面談

Северно-Восточный Федеральный Университет имени М. К. Аммосова, Институт математики и информатики - Кафедра "Методика преподавания математики"

対応者： Валентин Павлович Ефремов 講座長

Эверстова Валентина Николаевна 助教授

4名の学生

住 所： ул. Кулаковского, 48

連絡方法： тел. +7 (4112) 11-23-63

連邦大学で数学科教育を専攻し、将来数学の教員をめざす学生たちとインタビューする機会を設けてくれた。彼らは、みな上級学年の数学の教員を希望しており、大学で数学のディプロマを取得した後に、みな大学院（マギストル）に進学し、数学科教育を学びたいとのことであった。数学科を卒業しても、数学教員になるためのコースを履修しなければ教員にはなれないとのこと、通常は1年半位の学修をするが、中には物理と二科目の教員資格を取るために2から3年間学修をする者もいるとのことであった。右の男性は、大学卒業後にはモスクワ高等経済大学に新しく開設した数学教員課程に入学するとのことであった。

日本と教員採用の方法が異なるため、どのようにしているのかを尋ねると、自分のエントリーシートをたくさん書いて、学校長に提出し、たくさんの学校の面接を受け、採用の知らせの電話を待つのだという。これは、日本の会社の就職活動とほぼ同じで、就職活動は運もあり、精神的に大変不安だということであった。そのためモスクワ高等経済大学のような課程で学ぶと、就職に有利だと考えられ、男性はそこに進

学をするとのことであった。

ロシア科学アカデミーシベリア支部・永久凍土研究所

Федеральное государственное бюджетное учреждение науки Институт мерзлотоведения им. П.И. Мельникова Сибирского отделения Российской академии наук

市内中心部から少し離れた場所に位置している特別な研究機関であり、マンモス像の銅像が正面の庭に建造されている。



夕刻の5時過ぎにもかかわらず、研究所所員が大変ご丁寧に入らせてくれた。-8℃の地下室で、1時間以上に亘り、帽子も手袋もせず一方的に説明をしてくれたが、身動きせず立っていると気が遠くなり、寒さだけしか記憶していない。早くここから出たいという一心で我慢した。ここで体調を崩し、日本に戻りインフルエンザになってしまった。

< 3月30日 (金) >

サハ共和国教育省・教育発展-資格向上研究所

Министерство образования и Саха (Якутия) АОУ РС(Я) ДПО «Институт развития образования и повышения квалификации»

訪問時間 9:30-10:10

対応者：Алексеева Галина Ивановна 所長
Баишева Марина Ивановна 研究員
住 所：проспект Ленина, 3
連絡方法：тел. +7 (4112) 42-20-69

教員研修センター長室にて、今回の訪問の印象と、ヤクーツクの数学教育について、ラジオのインタビューを受ける。

謝辞

今回の調査にあたり、モスクワ継続数学教育センター確率・統計研究室長（Лаборатория теории вероятностей и статистики МЦНМО）でロシア連邦の数学科統一試験（ЕГЭ, ОГЭ）開発グループの副主任をしているヴィソツキー・イワン・ラスチスラボーヴィチ（Высоцкий Иван Ростиславович）および北東連邦大学（Северно-Восточный Федеральный Университет）のバイシェヴァ・マリーナ・イワノヴナ（Баишева Марина Ивановна）氏に様々なプログラムをアレンジいただいた、ここに深甚の謝意を表す。

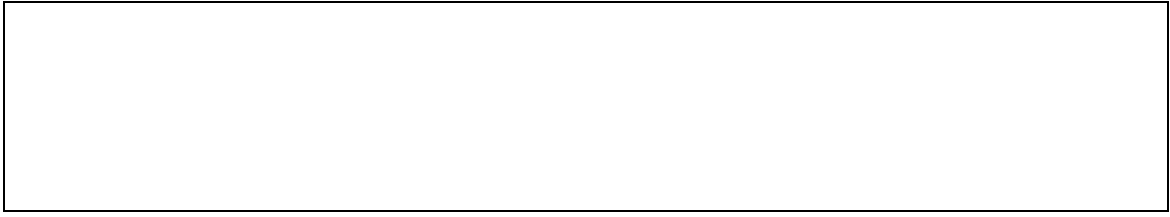
III. 公開研究会

「ロシアにおける教育改革の25年」

2017年2月11日（土）10：00～16：00

於： 筑波大学東京キャンパス

発表資料



Последние тенденции в педагогическом образовании в России

Реморенко Игорь Михайлович
ректор Московского городского педагогического университета

Российское образование с 2012 года в соответствии с Федеральным законом «Об образовании в Российской Федерации» строится по системе поэтапного прохождения обучающимся каждого уровня образования. Общее образование включает уровни: дошкольное образование (ясли и детский сад), начальное общее образование (1-4 классы), основное общее образование (5-9 классы), среднее общее образование (10-11 классы). По результатам прохождения основного общего образования появляется несколько вариантов продолжения образования: первый вариант – продолжение обучения в школе, получая среднее общее образование, второй вариант – получение профессионального образования (профессиональное обучение по профессии либо среднее профессиональное образование). Получая среднее профессиональное образование, обучающийся получает параллельно и среднее общее образование (10-11 классы). По результатам прохождения уровня среднего профессионального образования у обучающегося есть возможность поступить в бакалавриат для получения высшего образования (срок обучения - 3 года вместо 4). Следующий уровень – среднее общее образование (10-11 классы), по результатам прохождения которого государством обеспечивается возможность получения профессионального образования. Здесь также имеется два варианта возможностей: первый – среднее профессиональное образование (средний срок обучения – 2 года 10 мес), второй – высшее образование (бакалавриат).

В мае 2014 года в соответствии с поручением Президента РФ разработана и утверждена «Комплексная программа повышения профессионального уровня педагогических работников общеобразовательных организаций». В рамках основной программы был дан старт нескольким подпрограммам проекта, одна из которых – модернизация педагогического образования. Московский городской педагогический университет стал одним из 12 вузов-участников подпрограммы модернизации педагогического образования, целью которой является изменение содержания и технологий педагогической подготовки для обеспечения требований профессиональных стандартов и образовательных стандартов общего образования. Всего в проекте модернизации педагогического образования (первый и второй этапы проекта) принимают участие 66 вузов из разных регионов Российской Федерации. Участие в проекте модернизации педагогического образования прежде всего позволило сориентировать научно-педагогическое сообщество Университета на новую модель проектирования образовательных программ от образовательных результатов. При традиционной модели проектирования образовательной программы, основой проектирования содержания подготовки педагогов выступало то научное

знание, которое было освоено профессорско-преподавательским составом кафедр. Данное научное знание и определяло содержание подготовки (перечень дисциплин), составляющих единую образовательную программу подготовки педагогов.

На сегодняшний день в Университете изменена траектория проектирования образовательных программ, отправной точкой проектирования стали именно те требования к будущему педагогу, которые предъявляет его профессиональная деятельность (в виде трудовых функций и конкретных профессиональных навыков, необходимых в работе учителя). Далее, в целях формирования у студентов данных профессиональных навыков, разрабатываются учебные модули, для реализации которых отбирается профессорско-преподавательский состав, имеющий необходимую научно-практическую квалификацию. Еще одним изменением в Университете является переход от предметно-дисциплинарной организации учебного процесса к модульному построению содержания образовательной программы. Особенность предметно-дисциплинарной организации учебного процесса заключается в том, что в рамках данной модели все дисциплины, входящие в состав образовательной программы, реализуются линейно и последовательно, при этом аттестация осуществляется только по итогам учебного семестра по каждой дисциплине в отдельности. Основной проблемой такой модели является то, что, изучая отдельные дисциплины, нет возможности интегрировать и измерить сформированность у студента навыков решения той или иной целостной профессиональной задачи. Решить данную проблему позволила модульная организация учебного процесса, где модуль является целостной единицей в рамках образовательной программы, определяющей модель подготовки студентов к выполнению определенной профессиональной задачи, которая, в свою очередь, определяет содержание и объединяет в рамках модуля разные виды учебной деятельности студента: учебные дисциплины, практику, научно-исследовательскую работу, аудиторные и внеаудиторные образовательные мероприятия. По итогам прохождения профессионально-ориентированных модулей предусмотрен интегративный экзамен, направленный на измерение степени сформированности навыков выполнения профессиональных задач. Такая модульная система позволила сократить объемы проектирования, укрупнив содержание подготовки до конкретных профессионально-ориентированных задач, реализуемых содержанием модуля (так, прежде образовательная программа бакалавриата предусматривала от 50 до 80 дисциплин, при модульной организации образовательного процесса программы содержат в среднем от 8 до 12 модулей).

С целью формирования навыков профессиональной деятельности у обучающихся используются профессиональные мастерские. Это часть модуля, которая разрабатывается и реализуется ведущими представителями педагогической профессии. Нередко реализация таких мастерских осуществляется в реальных условиях будущей профессиональной деятельности студентов. При таком формате реализации и проектирования образовательной программы особый статус приобретает и практическая подготовка студентов, выстроенная как поэтапная линия достижения обучающимися образовательных результатов путем погружения в деятельность как в рамках теоретической, так и в процессе практической подготовки, где деятельность является способом формирования образовательных результатов и способом их оценки. Вместе с тем

практическая подготовка обучающихся используется в качестве интегрирующего элемента содержания образовательной программы, направленного на объединение всех видов деятельности обучающегося в целях достижения образовательного результата. При традиционной модели встраивания практики в учебный процесс она занимает довольно обособленное место в структуре образовательной программы и существует в отрыве от теоретического обучения. Новая модель практики встраивается в структуру каждого модуля и позволяет интегрировать ее с учебными дисциплинами и научно-исследовательской работой в рамках каждого образовательного модуля.

Также в Университете разработана модель видеопрактик для планомерного и систематического наблюдения за процессом прохождения практики студентами, что позволяет зафиксировать степень сформированности профессиональных умений и навыков обучающихся, сформировать рефлексивное отношение к ним. При этом выделяются следующие этапы реализации видеопрактики: 1-й этап – подготовка к практике, 2-й этап – фиксация профессиональной деятельности студента с помощью видеоконтента, 3-й этап – анализ профессиональной деятельности студента и оценка степени сформированности профессиональных умений; 4-й этап видеопрактики – уточнение индивидуальной образовательной траектории с учетом выявленных профессиональных дефицитов. Видеозаписи практической деятельности студентов используются также в учебном процессе при проведении практических и лекционных занятий организации дистанционной ознакомительной практики студентов заочной формы обучения, для формирования кейсов и фондов оценочных средств. Наряду с этим, материалы видеофиксации практики используются студентами для презентации работодателям своего опыта профессиональной деятельности.

Основными векторами, реализуемыми в рамках проекта модернизации педагогического образования, являются:

- проектирование образовательных программ от образовательных результатов, сопряженных с требованиями профессиональных стандартов;
- актуализация роли практической подготовки будущих учителей через внедрение активных профессионально-ориентированных образовательных технологий.

В Университете изменились подходы к процедуре оценки учебных достижений студентов и самому оценочному инструментарию. В рамках традиционной системы оценки фонд оценочных средств определялся содержанием дисциплины и формировался от содержания дисциплины. В отличие от данной модели при реализации модульной структуры учебного процесса содержание фонда оценочных средств формируется от тех образовательных результатов, достижение которых определяет степень готовности студентов к выполнению тех или иных профессиональных задач. При этом структура фонда оценочных средств представлена следующим образом: набор профессионально-ориентированных тестов, направленных на проверку знаниевой составляющей готовности студентов к выполнению профессиональных задач; кейсы, направленные на анализ ситуации и решение профессиональных задач и «анализ

проблемных ситуаций», как один из видов комплексной оценки, ориентированный на оценку профессиональных качеств специалиста посредством наблюдения их реального поведения в специально смоделированных условиях.

В структуру Университета входит Институт среднего профессионального образования (СПО) им. К.Д. Ушинского. В Институте реализуется подготовка по 10 специальностям среднего профессионального образования ведется подготовка педагогов для дошкольных учреждений и начальной школы, специалистов для сферы культуры, а также юристов и экономистов. В 2016–2017 учебном году по программам среднего профессионального образования в Институте обучается 3 500 студентов. С 2016 года 1 866 обучающихся на базе Института осваивают востребованные профессии по программам профессионального обучения – «Вожатый», «Няня», «Секретарь», «Оператор ЭВМ», «Фотограф», «Буафор».

С 2012 года Россия вступила в движение WorldSkills, а начиная с 2013 года проводит национальные чемпионаты. Среди профессий, по которым проводятся соревнования, есть и профессии, по которым готовит специалистов Института, – «Дошкольное воспитание» и «Начальное образование». Эти специальности включены в перечень чемпионатов с 2014 года, и уже в 2015 году студенты Института участвуют в чемпионатах по данным профессиям. В 2015 году студенты МГПУ завоевали 3 первых места и одно 2 место в региональных чемпионах, 1 место в полуфинале и достойно выступили на Национальном чемпионате. В 2016 году участники от Института завоевали 1 и 2 места на региональных чемпионатах. Участие в движении WorldSkills позволяет учесть наиболее передовые технологии в подготовке специалистов и внести необходимые изменения в образовательные программы. На сегодняшний день перед нами стоят такие задачи, как:

- совершенствование программно-методического обеспечения образовательного процесса через внедрение стандартов WorldSkills:
- разработка программ профессиональной подготовки специалистов среднего звена с учётом стандартов WorldSkills по специальностям СПО;
- включение в практические занятия интерактивных технологий, таких как робототехника, тренинги, ситуационно-ролевые игры, кейс-технологии, творческие задания, мини-проекты и др.
- разработка фонда оценочных средств, направленного на определение уровня форсированности компетенций с помощью четко прописанных критериев и показателей (в том числе к промежуточной аттестации);
- разработка учебно-методического комплекса для государственной итоговой аттестации в соответствии со стандартами WorldSkills.

С 2016 года стандарты WorldSkills становятся определяющими при сдаче итоговых испытаний всеми выпускниками Института. Так, в мае 2017 года все выпускники Института будут сдавать демонстрационный экзамен по стандартам WorldSkills.

Помимо этого, студенты Института среднего профессионального образования им. К.Д.

Ушинского под руководством лучших преподавателей организуют и ведут курсы для пожилых людей. Учат их компьютерной грамотности, обращаться с гаджетами. Для пожилых людей проводятся лекции по педагогике, для того чтобы «серебряному» поколению было легче находить общий язык со своими внуками. На базе Института действует клуб «Супербабушка».

Московский городской педагогический университет уделяет немалое внимание подготовке педагогов в области физической культуры и спорта. В Университете обучаются студенты – спортсмены высокой квалификации, добивающиеся высоких достижений на международных соревнованиях, в том числе Олимпийских играх, Всемирных Универсиадах, чемпионатах мира и Европы. Среди выпускников МГПУ – 14 человек участников Олимпийских игр. Наиболее титулованные из них – гимнастка Мария Пасека, четырежды поднимавшаяся на олимпийский пьедестал, и фехтовальщица Карина Азнавурян, двукратная олимпийская чемпионка и бронзовая медалистка.

Не меньшее значение имеет развитие в Университете массового студенческого спорта. Во внеучебное время в Университете работают спортивные секции: волейбол, баскетбол, мини-футбол, регби, плавание и биатлон. Также в Университете ежегодно проводится традиционная Спартакиада, в рамках которой студенты проходят через систему соревнований по 12 видам спорта.

Сборная команда Университета участвует в ежегодных студенческих спортивных играх среди вузов Москвы, играх Национальной студенческой футбольной лиги, а также в ежегодных межвузовских соревнованиях на первенство Москвы.

Около половины выпускников Университета работают в организациях системы образования и науки, из них большая часть – в системе образования города Москвы. Наряду с этим, выпускники Университета востребованы в сфере социального обслуживания населения, учреждениях здравоохранения, культуры и искусства, органах управления и государственной власти, в сфере бизнеса и IT-индустрии, в таких компаниях, как «Аэрофлот», Сбербанк, Издательство «Просвещение», телекоммуникационная компания Orange, Lenovo и т.д. Работодателями выпускников кафедры дальневосточных языков Института иностранных языков являются такие японские компании, как Mitsubishi, Sumitomo Corporation Central Eurasia LLC, Mitsui & Co. Moscow LLC, ООО JTC Moscow, Japan National Tourism Organization. Московское представительство японского туроператора H.I.S. и т. д.

В 2007 году кафедра дальневосточных языков Института иностранных языков Московского городского педагогического университета провела первый набор студентов для обучения японскому языку.

Студенты, обучающиеся в институте, активно участвуют как переводчики в культурных мероприятиях Москвы (перевод фильмов на ежегодных ретроспективах японских фильмов в Москве), занимаются волонтерской деятельностью, создали социальную платформу Konnichiwa club.

МГПУ активно сотрудничает с Университетом Цукуба и Международным Университетом Акита: направляет и принимает на стажировки студентов; участвует в долгосрочных проектах Университета Цукуба. Договор между МГПУ и университетом Цукуба

впервые подписан в 2009-м и продлен в 2014 году на пять лет. В 2016/2017 учебном году в ИИЯ МГПУ обучаются 3 японских стажера из университета Цукуба на долгосрочной стажировке и 1 стажер на краткосрочной стажировке. В этом учебном году в Университете Цукуба обучаются 5 студентов МГПУ на стажировках различной длительности. В сентябре 2016 года кафедра японского языка ИИЯ МГПУ 8-й раз принимала группа студентов из университета Цукуба. В течение недели российские и японские студенты проводили круглые столы, осматривали достопримечательности Москвы и ее пригородов.

В конце февраля – начале марта 2017 года мы ждем в МГПУ группу студентов из университета Цукуба. 2 марта в рамках программы «Воспитание многоязыковой личности (на территории Японии, стран Балтии и СНГ)» (Global Education Program for Developing Multilingual Human Resources in Japan, NIS and Baltic Countries) на кафедре японского языка состоится студенческий форум с участием российских и японских студентов, стажирующихся не только в вузах столицы.

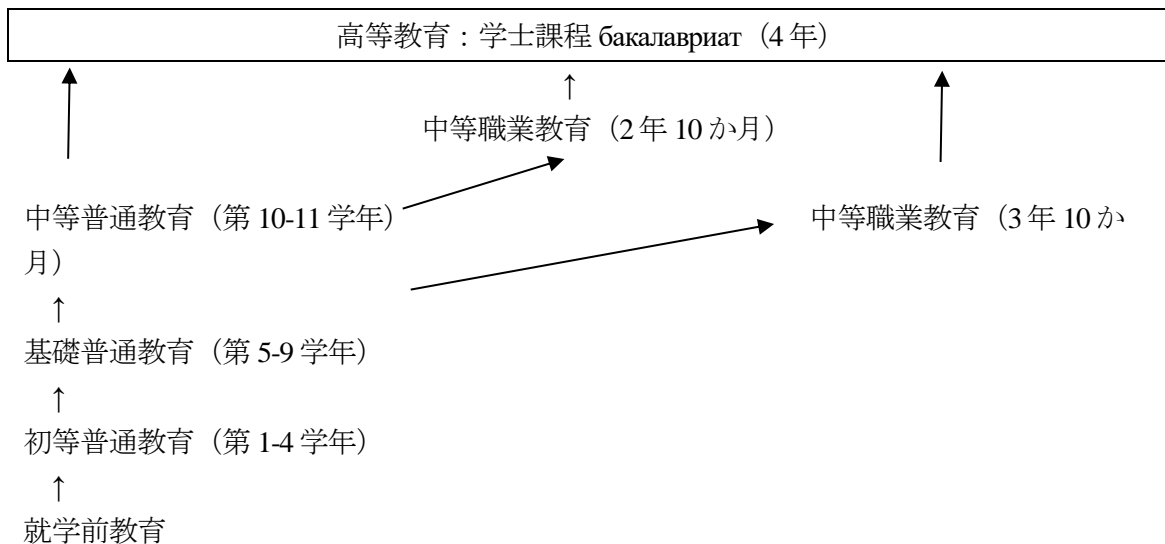
МГПУ готовит бакалавров по направлениям «Востоковедение и африканистика» («Языки и литературы стран Азии и Африки») и «Лингвистика» («Перевод и переводоведение»). При подготовке бакалавров учитывается педагогическая направленность Университета: изучаются дисциплины по методике преподавания. Бакалавры могут продолжить обучение в магистратуре по направлениям «Восточные языки в пространстве межкультурной коммуникации» и «Переводоведение», а затем в аспирантуре.

МГПУ регулярно принимает участие в российских и международных конференциях, в исследованиях, на которые выделяют гранты российская (Департамент образования Москвы, Российский гуманитарный научный фонд) или японская стороны (Японский фонд, университеты-партнеры); проходят курсы повышения квалификации в России, Японии и других странах.

講演の要約
「ロシアにおける教員養成制度の現状と課題」

イーゴリ・レモレンコ モスクワ市立教育大学長

○ロシアの教育制度（2012年連邦法「ロシア連邦の教育について」に基づく）



○教師教育の現代化プロジェクト：

2014年5月に承認された「普通教育機関の教育職員の職業的水準の向上を図る総合計画 Комплексная программа повышения профессионального уровня педагогических работников общеобразовательных организаций」の一環として、ロシア教師教育の現代化プログラムがスタートし、モスクワ市立教育大学 Московский городской педагогический университет はプロジェクト参加大学の一つとなった。これを受けて、モスクワ市立教育大学の教育プログラムの設計方法が、大学の教員の研究知識に基づく従来のモデルから、学生の教育成果に基づくモジュール型に代わった。学習過程も、各ディシプリンを個別に教える教科・ディシプリン型 (предметно-дисциплинарная) から、様々な教育活動を同時並行に行うモジュール型 (модульная) に代わった。

教師教育の現代化プロジェクトの主な方向性：

- ① 職業スタンダードの要求に対応した教育成果に基づく教育プロジェクトの設計
 - ② 職業志向の教育テクノロジーの積極的導入を通じた、教員養成過程の実践的側面の強化
- 学生の評価システムは、教科・ディシプリンの内容をベースにしたものから、教育成果に基づくものに代わり、新しい評価ツールのパッケージ (фонд оценочных средств) は、職業的課題を遂行するための知識の水準を測る「職業志向的なテスト профессионально-ориентированные тесты」、状況分析と職業課題の解決に向けた「ケース кейсы」と、モデル化された状況における学生の行動の観察から彼/彼女らの職業的能力の評価を行う「問題場面の分析 анализ проблемных ситуаций」の3点から構成されている。

○ワークショップ（мастерские）

○教育実習を学習過程に入れ込む

○ウシンスキー名称職業教育インスティトゥート

モスクワ市立教育大学の下部組織として、ウシンスキー名称職業教育インスティトゥート Институт среднего профессионального образования им. К.Д.Ушинского があり、就学前教育、初等教育、文化分野、並びに法学と経済学の専門家養成を行っている。2016年度には同インスティトゥートの中等職業教育プログラムでは約 3500 人の学生が在籍している。

2015 年から国際技能競技大会（WorldSkills Competition）に参加している（「就学前教育」、「初等教育」分野）

○卒業生の活躍

モスクワ市立教育大学の卒業生は、教育・研究分野をはじめ、行政機関や民間企業などの様々な舞台で活躍し、スポーツに関していえば 14 名の卒業生がオリンピックに参加している。

○日本語学科

2007 年から日本語学科があり、2009 年に筑波大学と交流協定を結んでいる（2014 年に更新）。現在、学士課程では「東洋学・アフリカ学」（アジア・アフリカ諸国の言語と文学）と「言語学」（翻訳・翻訳論）のコースで専門家養成を行っている。教育大学としての特徴を生かすため、教授法の科目も教えている。

Тенденции и проблемы образования в области математики, естественных наук и ИКТ в России

Семенов Алексей Львович
профессор МГУ, академик РАН

Памяти Симора Панерта, Seymour Papert (1928 – 2016)

Прежде всего, я благодарю организаторов, особенно профессора Минору Отани, за возможность принять участие в данном событии и Григория Мисочко за помощь и поддержку.

Предложенная мне организаторами тема очень широка, а время – ограничено. Поэтому, я сосредоточусь, в основном на общем (дошкольном, начальном и среднем) образовании в математике, а также затрону несколько смежных тем: подготовка учителей, дополнительное образование,

Указ, подписанный президентом Путиным в день своей инаугурации (2012 г.) запустил работу над Концепцией развития математического образования в Российской Федерации. Концепция была утверждена российским правительством в декабре 2013 года [Ко]. Официальный русский текст и английский перевод этого документа доступны на нашей конференции. В своем выступлении я скажу о некоторых положениях концепции, их реализации, дальнейшем развитии в практике нашего образования.

Сейчас мы работаем над Концепцией технологического образования в школах Российской Федерации. Если останется время, я готов рассказать и о ней тоже.

Сейчас, во многих странах учителя, родители и общество обеспокоены математическим образованием и его ухудшением. Во многих случаях люди сравнивают его с тем, как их когда-то учили, или, со странами выше в таблицах TIMSS и др. Итак, нас волнует вопрос: “Как мы хотим, чтобы наши дети учились математике в школе?” Вы замечаете, конечно, что я замещаю здесь обычно используемое слово обучение (в смысле деятельности, рассматриваемой с позиции учителя, teaching) на учение (в смысле деятельности ученика, обучающегося, learning) и я прошу вас подумать над причинами такой замены в ходе моего выступления. Я надеюсь вернуться к этому позже. Ключевыми аспектами при ответе на этот вопрос являются:

- Польза в будущем
- Мотивация в процессе обучения
- Развитие общих способностей
- Приобщение к культурной грамотности и ценностям

То же самое можно спросить о других предметах, упомянутых в нашем названии и рассмотреть те же аспекты ответа.

Полезьа школьной математики

Давайте начнем с полезности, как это обычно говорят, «математических знаний», более точно, результатов, достигаемых в ходе освоения математики в школе, относящихся именно к математической компетентности. Безусловно, важность математики в человеческой деятельности значительно выросла за последние полвека и еще существеннее – за последнее десятилетие. Математическое производство растет быстрыми темпами (см. [Lo]).

Математика используется в работе профессиональных математиков, производящих новую математику, их численность в мире можно оценить сверху в 10^5 . Это – ничтожная часть населения, даже в «великих математических державах». При этом задача поиска будущих профессионалов этой категории, построения и реализации системы их образования и профессиональной подготовки представляется всем нам важной и мы надеемся на понимание общества. Но школы для этих обучающихся могут, и, вероятно, должны быть устроены иначе, чем массовые школы и даже школы с углубленным изучением математики в рамках массового образования.

Математика используется в работе профессионалов, создающих новые математические модели для классов реальных вещей и процессов (чтобы использовать эти реализации этих моделей в компьютерном моделировании) чтобы помочь специалистам в той или иной предметной области. Профессионалы используют математические объекты и рассуждения для создания нового программного обеспечения и устройств (электронных, оптических и т. д.) работающих в математических машинах. Новое племя, соседнее с этим, формируется сейчас вокруг обработки больших данных и машинного обучения (machine learning). (Мы понимаем, что есть особенности в характере интеллектуальной деятельности для этой огромной когорты и мы можем отличить ее от других специалистов- математиков, но в нашем обсуждении это выглядит контрпродуктивным на уровне общего образования.) Число этих специалистов можно оценить, как $10^6 - 10^7$. И это количество невелико (менее 1% населения Земли), тем не менее вопрос системы их образования – уже вопрос системы массового образования и должен ею решаться в тех странах, которые собираются быть полноправными участниками научно-технологического прогресса в мире.

Наконец, есть “широкая общественность”, который использует все современные технологии и, через них, – «всю эту математику».

Какое математическое образование нам нужны для этих групп населения? Отвечая на этот вопрос, мы должны отдавать себе отчет в том, что в ходе образования и взросления ребенка и молодого человека будет идти уточнение образовательной и карьерной траектории, мы не должны заведомо закрывать дорогу тем, кто потенциально может стать, например, программистом, хотя фактически им и не станет. Одновременно, мы не должны проектировать «математическое доминирование» - форсированное обучение математике детей, которое математиками не станут, в ущерб их общему развитию и другим областям их образования.

Давайте начнем с самой многочисленной группы – последний. Мы начинаем с фундаментального заявления, включенные в нашу Концепцию: “нет детей, неспособных к математике”. Честно говоря, это положение Концепции встретило больше сопротивления и

возражений от русских учителей, чем любое другое. Но позвольте мне напомнить, что рекомендацию ЮНЕСКО – МБО [Rec]: “...практически каждый человек способен к некоторому уровню математической деятельности...”? Уточняя это положение можно сказать, что мы отрицаем возможность какой-то специальной «математической неспособности» у ребенка, который может мыслить, говорить и т. д.

Заметим, что во всех этих видах деятельности человека сегодня присутствует компьютер. В наименьшей степени это верно для профессиональной деятельности профессиональных математиков, но в целом естественно ожидать, что присутствие компьютера в учебной математической деятельности будущего профессионала или просто гражданина должно быть таким же, как в его будущей жизни [Lo].

Можно было бы сказать, что сама математика не нужна для использования ее результатов. С этой точки зрения и химия, физика, география и т. д. не нужны, потому что «интернет знает все», а профессионалы уже. «обо всем позаботились», создали нужные технологии и соответствующие устройства и машины. Это неправда: вы должны знать, как задавать вопросы и понимать ответы, и это полезно, чтобы понять "как это работает".

Итак, мы хотим, чтобы наши дети понимали, как строятся математические модели мира, как работает hard- и software (аппаратное и программное обеспечение), как происходит анализ данных и машинное обучение, как устроены математические доказательства.

Один из основных принципов современной педагогики, известный всегда, был сформулирован Яном Амосом Коменским как *fabricando fabricamur* – «создавая, создаем себя» (см. [Pi]). Это означает, что для формирования понимания того, как что-то делается, надо это делать. Надо, чтобы обучающиеся сами строили модели, программы, устройства, анализировали данные, доказывали теоремы. Различие в объемах этой деятельности и ее результатах для разных категорий обучающихся может быть «чисто количественным» - в сложности и количестве решаемых задач.

При этом в каждом виде деятельности должен постоянно присутствовать элемент новизны (в зоне ближайшего развития по Выготскому): мы определяем новые математические сущности, доказываем теоремы, строим модели для новых видов объектов и процессов, программы и устройства, реализующие новые алгоритмы.

Заметим наконец, что все описанные виды деятельности не имеют почти ничего общего с решением тригонометрических уравнений, или логарифмических неравенств, как и с делением десятичных чисел в столбик.

Мотивация

Рассмотрим теперь проблему мотивации. Мотивация может появиться из-за того, что обучающийся:

- Делает что-то интересное и привлекательное в реальном мире, за пределами математики, используя математику
- Делает что-то вместе с другими

- Ощущает связь с будущей карьерой и вознаграждением
- Делает что-то действительно для него новое
- Делать что-то в соответствии с требованиями учебной дисциплины, ожиданиями кого-то авторитетного.

В большинстве случаев в нашей стране, как и в других странах с традиционным математическим образованием, первые четыре мотива почти не поддерживаются школой. Последний мотив силен в странах с сильной авторитарной системой, поддерживающей авторитеты: государство – общество – семья – школа. Но если государство, общество и семья больше не авторитетны, авторитет школы трудно создать и поддерживать. Но есть и другие серьезные причины для школ отойти от авторитарной модели. Они связаны с тем, что приоритетными становятся т. н. «навыки XXI века», для формирования которых авторитарная школа плохо приспособлена. Мы сталкиваемся с тем что страны, сохранившие авторитарные структуры в некоторых областях своей жизни сталкиваются с проблемой, пытаясь перестроить свое школьное образование так, чтобы оно готовило творческих людей, с высокой степенью адаптивности, готовых принимать решения в совершенно новых ситуациях и учиться всю жизнь.

Проблема мотивации является центральной для практической педагогики сегодня. Она была центральной и для Симора Паперта, для его философии конструкционизма, созданного им микромира Лого. Перечисленные выше источники мотивации соответствуют его взглядам [Ра]. Это – его подход к появлению перечисленных выше источников мотивации.

Позже мы еще вернемся к этому. Сейчас заметим лишь, что и с точки зрения мотивации обычный школьный способ изучения математики, упомянутое выше решение тригонометрических уравнений, выглядит неперспективным и с точки зрения мотивации.

Формирование общих способностей. Революции в ИКТ и когнитивные революции

Под ‘общими способностями’ метапредметными результатами обучения, можно понимать те, что напрямую не связаны с математикой, но могут быть сформированы в математическом контексте, в ходе манипулирования с математическими объектами (умственными, или их вещественными, экранными, и т. д. представлениями).

В 1931 году великий русский психолог и исследователь в области образования Лев Выготский прочитал лекцию в Коммунистической Академии [Вы]. В этой лекции он очертил важнейшее видение того, как революции в области информационных и коммуникационных технологий ведут к революционным изменениям в том, как человек мыслит, общается и действует. Я собираюсь привести несколько цитат из конспекта лекции Выготского. При этом замечу, что смысл того, что он называет «психологическим орудием, инструментом» наиболее точно передается сегодня понятием «информационно-коммуникационная технология». Вот, что говорит Выготский:

“Примерами психологических орудий и их сложных систем могут служить язык,

различные формы нумерации и счисления, мнемотехнические приспособления, алгебраическая символика, произведения искусства, письмо, схемы, диаграммы, карты, чертежи, всевозможные условные знаки и т.д.”

Этот список естественно продолжается:

- Устная речь
- Чертеж
- Письмо
- Печатный станок с наборным шрифтом
- Запись звука и изображения
- Электронной передачи текстов, звуков, изображений
- Радио- и теле- вещание
- Интернет

Выготский говорит:

“Будучи включено в процесс поведения, психологическое орудие так же видоизменяет все протекание и всю структуру психических функций, определяя своими свойствами строение нового инструментального акта, как техническое орудие видоизменяет процесс естественного приспособления, определяя форму трудовых операций...”

Включение орудия в процесс поведения, во-первых, вызывает к деятельности целый ряд новых функций, связанных с использованием данного орудия и с управлением им; во-вторых, отменяет и делает ненужным целый ряд естественных процессов, работу которых выполняет орудие; в-третьих, видоизменяет протекание и отдельные моменты (интенсивность, длительность, последовательность и т.п.) всех входящих в состав инструментального акта психических процессов, замещает одни функции другими, т. е, пересоздает, перестраивает всю структуру поведения совершенно так же, как техническое орудие пересоздает весь строй трудовых операций...”

Мы сегодня говорим о революции Гутенберга или интернет-революция ссылаясь на революционные технологии. В идущей сегодня революции быстрые изменения в нашем мышлении и общении продолжаются. Исчезает прагматический смысл в запоминании фактов и процедур. Конечно, в профессиональной или повседневной жизни человек решает больше проблем и несет больше ответственности, использует и обрабатывает больше информации, чем раньше. Но теперь это не человек с голыми руками и разумом – это человек, который мыслит общается и действует, опираясь на всю вычислительную и информационную мощь человечества. Проблема в том, как использовать эту силу и как научиться этому использованию.

В математике революционные перемены в мышлении и коммуникации были вызваны

позиционной системой счисления, алгеброй, математическими машинами и т. д. Сегодня, с одной стороны, радикально меняется область того, что мы называем математической деятельностью, об этом мы уже говорили. С другой стороны, даже деятельность в области того, что можно назвать традиционной математикой, такая, как решение уравнений, также становится иной. Даже в школе и на уроках физики и на уроках математики естественно производить символичные вычисления используя соответствующие инструменты, доступные через мобильный телефон. Существуют инструменты, делающие это в точности по школьным правилам.

Сегодня человечество начинает мыслить, общаться, действовать и учиться во многих отраслях математики иначе. Но оно делает это и вне математики, опираясь на те самые общие способности, формируемые в математике, о которых мы говорим.

Мы считаем, что 250 лет назад М. В. Ломоносов сказал, что математику потому изучать стоит, что она ум в порядок приводит. 35 лет назад на конгрессе в Лозанне Андрей Ершов провозгласил: «Программирование – вторая грамотность» [Er]. Сегодня Стивен Вольфрам говорит об алгоритмическом мышлении, «computational thinking» [Wo]. Это происходит не только в математике, но во многих областях, как Стив Вольфрам говорит, «от археологии до зоологии».

Таким образом, сегодня, с одной стороны, очередная ИКТ-революция меняет мышление и поведение человека, с другой стороны, меняет характер математической деятельности, с третьей – те общие способности, которые вырабатывает математика.

Итак, мы видим, что сегодня формами математической деятельности ученика, оснащенного ИТ, в школе (прежде всего, в предметах STEM) является:

- Сбор и анализ данных
- Визуализация
- Построение моделей
- Символические и числовые вычисления
- машинное обучение
- выявление и описание информационных процессов в окружающем мире
- создания собственных информационных процессов

Наиболее разумная цель математического образования состоит в подготовке учащихся решать задачи (в том числе в реальной жизни, или те, которые появятся в дальнейшем изучении) используя компьютер там, где это необходимо. Ключевыми словами и для освоения математики и для развития общих способностей в математике становятся: Язык и Наглядность, особенно для младших классов.

Доказательство и культура

Среди "общих", или мета-когнитивных способностей важное место занимает способность к логическому рассуждению. Она формируется прежде всего, с использованием:

- Геометрических объектов
- Дискретных (комбинаторных) объектов, в том числе - языковых
- построения алгоритма и программы

• ...

Студент узнает, что в важных ситуациях вам нужны доказательства, потому что Вы не можете ждать слишком долго или до бесконечности, или перебирать очень большое, или даже бесконечное число ситуации в некотором классе. Итак, человеческий разум, используя язык может свести бесконечность или что-то очень большое к конечному и обозримому. ИКТ может помочь и здесь. Они дают среды для экспериментов, подтверждающих или опровергающие ваши гипотезы и помогают в построении доказательств.

Итак, мы надеемся, что способность рассуждать логически развитых в математической ситуации с математическими объектами, прежде всего, наглядными и может быть использована за пределами математики.

Доказательство является также важным элементом установления связи с культурным наследием человеческой цивилизации, начиная с Евклида в древности и Алкуина в Средние века, представляющие рассуждения о геометрических, языковых и комбинаторных объектах.

Программирование

Важным направлением математической деятельности мы уже упоминали – это программирование, которое все чаще на разных языках называется ‘кодирование’: придумывание алгоритма и написание его в соответствии с заданными правилами. Сама программа – код может создаваться с использованием структурного текстового редактора или даже "писаться" в пиктографическом языке, не использующем алфавита (например в дописьменных период развития ребенка). Более важным является то, что

- алгоритмы создаются для решения содержательных и интересных задач
- выполнение программы может быть визуализировано
- программы, разработанные разными учениками, вместе или по отдельности, могут быть объединены

Легко увидеть, как программирование может соответствовать группам мотивов, которые мы обсуждали ранее.

Алгоритмическое (вычислительное) мышление может быть развито в очень раннем возрасте, наряду с пространственным мышлением, логикой и языком. Эти способности являются основой для общих способностей человека, которые мы обсуждаем.

Объекты, с которыми развивается алгоритмическое мышление, потом становятся основными объектам конечной математики и геометрии, а дальше и математики континуума.

Знаменитым примером реализации этого замысла в мировом масштабе является изобретение Сеймуром Папертом Черепашки и ее интеграция в язык Лого и использование его в качестве основы для реализации образовательной философии Конструкционизма. этого замысла изобретения Сегодня вместе с языками визуального пиктографического программирования, как изобретенный в России ПервоЛого и языком Scratch (разработанным учеником Паперта Митчелом Резником), Лого дает возможность решения множества описанных задач.

Сегодня этот подход обогащается алгоритмическим мышлением, и его реализацией, предлагаемой Стивом Вольфрамом, автором Mathematica. Он использует Wolfram Language.

Наше видение также тесно связано с математикой – наукой, искусством, технологией и навыками учения. Понятие и слово Математика было создано великим Коменским и опубликовано в 1680 году. Эта публикация была незамеченной в течение столетий, пока Сеймур Паперта подчеркнули его важность в своей знаменитой книге *Mindstorms*, где он считал математическим принцип, исходя из которого он изобрел Черепашку: “наполните смыслом то, что изучаете”.

Реализация

Итак, что было сделано в России для реализации этого видения? Мы начнем с некоторых исторических событий, повлиявших на ситуацию.

Математические школы

В середине 60-х годов движение специализированных математических школ для высокомотивированных студентов получило официальную поддержку в решениях федерального правительства. По инициативе и при личном участии таких ведущих математиков как А. Колмогоров из Московского государственного университета и других крупных математиков в Ленинграде, Новосибирске, Киеве были созданы интернаты, связанные с ведущими университетами. Также в больших городах создавались специализированные математические (иногда – физико-математические) школы, разного уровня. В тех из них, которые давали действительно высокий уровень математической подготовки часто работали преподаватели и студенты университетов.

Все это было продолжением и расширением внешкольных неформальных структур (так называемых кружков), где со школьниками также занимались люди из университетов, начиная с начала 1950 гг.

В то же время, в середине 1960-ых при поддержке другого крупнейшего математика XX в. Израиля Гельфанда начала успешно работать заочная математическая школа (по переписке), которая в течение последующих десятилетий подготовиться к поступлению в МГУ и другие университеты тысячам школьников.

Эта практика продолжается и сейчас, с применением современных ИКТ.

В прошлом месяце мы отмечали 85-летие Николая Константинова, который до сих пор работает в школе и многие тысячи его учеников и учеников его учеников реализуют систему изучения математики, которая объединяет многие принципы, упомянутые ранее. При этом, конечно, то, что относится к компьютерам и было реализовано 50 лет назад, выглядело совсем иначе. Но этот эксперимент тем более важен, поскольку показывает, что технология не является серьезным препятствием или проблемой. В школах Константинова:

- Математика представлена как система задач для решения

- Ученик в списке задач находит задачи в своей зоне ближайшего развития и решает их, новизна задачи является важным мотивационным фактором
- 3-6 учителей в классе – это студенты университета, которые индивидуально читают и слушают доказательства учеников и обсуждают их с учениками
- Программирование – это важный компонент математической деятельности и возможная основа будущей карьеры. Так было даже в эпоху ‘ЭВМ’ с их перфокартами, когда для визуализации программно заданной анимации движения кошки использовалось фотографирование последовательных бумажных распечаток
- выпускники школы, став студентами возвращаются обратно в ту же (или другую из той же системы) школу помогать там учиться новому поколению.

Журнал популярной математики и физики ‘Квант’ был создан математиком Андреем Колмогоровым и физиком Исаак Кикоиным в 1970 году. Идея журнала пришла от нобелевского лауреата Петра Капицы. (Я – главный редактор этого журнала сейчас. Было бы очень интересно обсудить его перевод на японский.) Большинство его статей предлагают читателю исследовательскую деятельность (решение нестандартных задач, эксперимент и т. д.), обеспечивает связь с повседневным опытом, обсуждает достижения в области науки и техники и т. д.

Проект “Школа” и его продолжение

В конце 1980-х годов амбициозный проект “Школа” реформирования советского общего образования был начат учеными (Академии наук, университетов, структур военно-промышленного комплекса) под руководством профессора Евгения Велихова, хорошо известного в Японии советника Горбачева. В основе предлагаемой школы для пост-авторитарного общества лежала модель научного исследования (представленная, в частности, системой Н. Н. Константинова) и влияние ИКТ-революции на деятельность человека. Некоторые из разработок проекта велись в сотрудничестве с болгарской Проблемной группой по образованию (академик Благовест Сендов, который не так давно был послом Болгарии в Японии, и др.) где, в частности, была реализована интеграция изучения математики и языка, а также с Группой эпистемологии и теории учения в MIT (С. Паперт).

В 1985-6 гг. курс «Основы информатики и вычислительной техники» (основы компьютерной науки и технологии) был введен во всех советских школах. (Я был организатором написания учебника по этому курсу, изданному тиражом в миллионы экземпляров.) Так, российское математическое образование было расширено в область “информатики”, в том числе в область фундаментальных основ информатики, относящиеся к математике: математической логики и теории алгоритмов. Его идеологом и инициатором был Андрей Ершов, чья лекция на конгрессе ИФИП в 1981 году называлась “Программирование – вторая грамотность”. Реализация этого курса в нашей стране всегда учитывала приоритет развития алгоритмического мышления (computational thinking) как важнейшей цели общего развития учеников.

В процессе развития российского математического образования за последние 25 лет учебные материалы, учебники, манипулятивы, графические (на бумаге) и компьютерные микромиры были разработаны и широко используются в начальной школе. Это дает возможность для освоения математики в визуальной (и осязаемой) среде, где достигается баланс нечисловой и числовой математики. В реализуемом при моем участии направлении математического образования поддерживается приоритет развития языка, реальной жизни, открытия и изобретения, доказательства. В этом направлении широко используются задачи и игры, традиционно относящиеся специалистами по школьному образованию к «рекреационной математике». Такой подход дает возможность для развития логических и коммуникативных способностей ребенка в математической среде и ситуациях. Важная особенность этого подхода состоит в изобретении самими детьми математических процедур и открытии фактов и законов. Это замедляет «прохождение» обычного школьного содержания, но дает более глубокое понимание того «как все работает». Легко организовать построение детьми своей таблицы умножения. Более сложным является процесс изобретения ими десятичной системы, исходя из имен и знаков только для количеств до девяти и ноля. Конечно, здесь необходима совместная деятельность с учителем. Еще одним примером является способ умножения многозначных чисел, исходно возникший в Индии, а в Европу попавший благодаря Фибоначчи. Это более простой, прозрачный и логичный способ чем обычно используемый нашей школой, и он тоже может быть «пере-изобретен» детьми.

Подход конструкционизма в течение последних десятилетий использовался и распространялся Институтом новых технологий (ИНТ). Широкое распространение получили в частности, инструменты ИКТ для математической деятельности (например, динамическая геометрия), а также микромиры (ЛогоМиры – MicroWorlds of LCSI, Робот-в-лабиринте Кумира) используются для развития алгоритмического мышления, начиная с дошкольного возраста (ПиктоМир PictoMir А. Кушниренко). Цифровые измерения, сбор данных, и анализ и визуализация используются в изучении естественных наук и помогает их связи с математикой.

Работа обучающихся и их взаимодействие с учителем может идти в цифровой информационной среде, это позволяет достичь высокой степени эффективной индивидуализации.

Стандарты

Федеральный государственный образовательный стандарт для начальной школы был утвержден в 2009 году. Он подчеркивает мета-когнитивные (метапредметные) результаты, использование инструментов ИКТ обучающимися, погружение образовательного процесса в информационную среду.

Концепция универсальных учебных действий, формирование которых, следуя стандарту, является важнейшим метапредметным результатом основана на подходе русской школы педагогической психологии развивающей идеи Л. С. Выготского. Это – сегодняшняя реализация математики.

Профессиональный стандарт педагога утвержден в 2014 году. Он также лежит в рамках описываемого нами тренда и постепенно станет основой для аттестации учителей.

В то же время Министерство образования и науки утверждает новые примерные программы по отдельным предметам, которые очень традиционны. Это естественно, и вопрос в том, в каком направлении будущие события будут развиваться.

Важнейшим инструментом влияния на содержание образования является Государственная итоговая аттестация. В нашей стране она происходит после 9-го и 11-го (ЕГЭ) классов. Как и в других странах наши учителя «учат тому, что будут спрашивать». Таким образом, различные системные изменения наиболее разумно осуществлять в формате планирования содержания и форматов итоговой аттестации. Например, наиболее эффективным шагом в начале введения алгоритмического мышления в математике и других предметах является использование цифровой техники в аттестации. Для обеспечения плавности перехода мы можем принять даже, на некоторое время, что решение проблемы без компьютера дает (в баллах и т. д.) преимущество, по сравнению с решением задачи с использованием компьютера, но оба решения принимаются. Это означает, что общество принимает результаты школьного образования, адекватных потребностям информационного общества.

Подготовка учителей

Общеизвестно и очевидно, что учитель является важнейшим фактором в функционировании и развитии школы. У нас есть опыт проекта внедрения стандарта, о котором я говорил, для 15 тысяч педагогов и администраторов начальной школы в городе Москве (население которой примерно, как у Токио). В подготовке этих учителей, опять же, учителя играли ключевую роль. Я имею в виду около 200 учителей, которые де-факто работали по новым стандартам в течение многих лет, и были главными учителями для учителей при внедрении нового стандарта.

Конечно, возможность подготовить нового учителя еще более важна для перспективы. Модернизация системы подготовки будущих учителей в России, о которой подробно рассказывал в свое докладе профессор Игорь Реморенко в большой степени базируется на практике. При этом:

- Практика – это реальная работа с детьми в школах является центральной частью подготовки будущего учителя. Она помогает мотивировать студентов, предлагает им реальные проблемы для решения, делает понятной важность теории и практических заданий. Студенты приходят в школы парами и записывают эпизоды образовательного процесса там на свои мобильные телефоны.

- Студенты помогают учителям в проверке домашних работ, работе с особыми категориями учащихся и т. д.

- Кроме школьной практики, важнейшая часть подготовки будущих учителей математики – это решение задач аналогичных тем, которые дети решают в школе. Эти задачи выбираются из зоны ближайшего развития студента, анализ их решений помогает рекомендовать студента для работы в той или иной школе.

- Еще одним направлением учебной деятельности студентов является работа с другими студентами – младшими или студентами других образовательных программ, например,

готовящих педагога для начальной школы или учителя физики.

Очень перспективным является и вариант подготовки, в котором учителя математики и информатики параллельно работают в софтверной или иной компании, где практически нужны математические навыки.

Международное сотрудничество

Наша работа была бы невозможна без международного сотрудничества. Я уже упоминал о наших контактах с Болгарской академией наук и с Массачусетским технологическим институтом. За последние годы мы много получаем от нашего сотрудничества с немецким образованием, в частности, через Франца-Йозефа Куна – изобретателя и распространителя сред для обучения математике в детских садах и начальных школах Германии и профессора Василиоса Фтенакиса, который познакомил нас с его философией со-конструктивизма (тесно связанной с конструкционизмом Паперта и учением Л. С. Выготского), оказывающей влияние на изучение математики в немецких школах.

Профессор Александр Карп (в соавторстве со своим коллегой – профессором Вогели) выпустил замечательную книгу о российском математическом образовании. Недавно мы перевели обновленную и переработанную версию этой книги на русский язык.

Интерес в России и Японии к математическому образованию в соседней стране естествен. Для примера я упомяну об исследованиях, проводимых в рамках АТЭС, в том числе: по примерам уроков, в области математики и естественных наук урок (университет Цукуба), по подготовке учителей математики и естественных наук, в которых я участвовал.

30 лет назад Симор Паперт, которому я посвятил свое выступление предложил создать исследовательскую группу, объединяющую специалистов в области математики, компьютерных наук и образования из четырех стран: Болгарии, России, США и Японии (по алфавиту). Он писал: «Различные подходы и опыт участников из этих четырех стран обеспечит разнообразие, необходимое для открытого рассмотрения свежим взглядом на фундаментальном уровне возможных соотношений между науками об информации и образованием.» В 1980-е гг. Паперт говорил о различии между Конструкционизмом и Инструкционизмом в своем видео-докладе на конференции в Японии [PaJ].

Планы Паперта не были реализованы в свое время, но, возможно, стоило бы вернуться к ним.

Надеюсь, что многое, о чем я говорил, может вызвать вопросы или несогласие, или нуждается в пояснении я был бы рад любому обсуждению. Его можно продолжить и дистанционно

Спасибо за внимание.

Литература

- [Вы] Выготский Л.С. Инструментальный метод в психологии / Выготский Л.С. Собрание сочинений в 6 томах. М.: Педагогика, 1982. Т. 1. С. 103–109.
- [Ko] Концепция развития математического образования в Российской Федерации.
<http://government.ru/media/files/41d4b63b1dd474c16d7a.pdf>
- [Er] Ershov A.P. Programming, the Second Literacy// Computer and Education: Proc. IFIP TC-3 3rd World Conf. on Computer Education. WCCE 81. Lusanne, Amsterdam, 1981. Part 1. P. 1-17
- [Lo] Laszlo Lovasz, Trends in Mathematics: How they could Change Education? March 2008
<http://bolyai.cs.elte.hu/~lovasz/lisbon.pdf>
- [Pa] Papert S. Mindstorms: Children, Computers and Powerful Ideas. New York: Basic Books. 1980
Русск. Пер. Пейперт С. Переворот в сознании: Дети, компьютеры и плодотворные идеи: Пер. с англ./Под ред. А. В. Беляевой, В. В. Леонаса.—М.: Педагогика, 1989
- [PaJ] Papert, S: Constructionism vs. Instructionism:
[//www.papert.org/articles/const_inst/const_inst1.html](http://www.papert.org/articles/const_inst/const_inst1.html)
- [Pi] <http://www.ibe.unesco.org/sites/default/files/comeniuse.PDF>
- [Re] 19th International Conference on Public Education (convened in Geneva by UNESCO and IBE). Recommendation # 43 to the ministers of education, concerning the teaching of mathematics in secondary schools, 1956, Geneva
- [Wo] Wolfram, S., How to Teach Computational Thinking, September 7, 2016
<http://blog.wolfram.com/2016/09/07/how-to-teach-computational-thinking/>

**Современное состояние и тенденции развития системы
подготовки и повышения квалификации педагогов
дополнительного образования в Российской Федерации**

Буйлова Любовь Николаевна
Зав. кафедрой педагогики воспитания и дополнительного образования
Московского института открытого образования

СЛАЙД 1

**СОВРЕМЕННОЕ СОСТОЯНИЕ И ТЕНДЕНЦИИ РАЗВИТИЯ СИСТЕМЫ
ПОДГОТОВКИ И ПОВЫШЕНИЯ КВАЛИФИКАЦИИ ПЕДАГОГОВ
ДОПОЛНИТЕЛЬНОГО ОБРАЗОВАНИЯ В РОССИЙСКОЙ ФЕДЕРАЦИИ**

**Буйлова Любовь Николаевна,
профессор, заведующая кафедрой педагогики воспитания и дополнительного
образования ГАОУ ВО «Московский институт открытого образования», кандидат
педагогических наук**

:
*Педагог-внешкольник — это педагог, который
пришел из будущего с целью показать
воспитанникам образец их жизни,
самоопределения и самоутверждения.
Ш. А. Амонашвили*

Для того чтобы представить современные тенденции развития российской системы подготовки и повышения квалификации работников сферы дополнительного образования детей, необходимо ответить на три вопроса: что было? что есть? и что будет?

СЛАЙД 2

Наше обращение к историческим урокам — это стремление не просто вспомнить и проанализировать педагогическую практику, а скорее попытка понять, как педагогу работать сегодня, используя наиболее ценное из накопленного опыта и стремясь избежать вероятных ошибок.

В 2018 г. мы будем праздновать 100-летие системы дополнительного (внешкольного) образования детей. Справедливости ради отметим, что изначально внешкольное образование не

входило в государственную систему народного образования и объединяло такие формы, как публичные лекции, вечерние школы, народные библиотеки и театры. И только в 1918 г. оно обрело статус государственной внешкольной работы. Авторами этого уникального советского проекта, аналогов которому в мире не было, выступали известные педагоги: Евгений Николаевич Медынский, Надежда Константиновна Крупская, Анатолий Васильевич Луначарский, Антон Семенович Макаренко, Станислав Теофилович Шацкий...

Время было непростое, поэтому надо было решать задачи занятости детей, ликвидации беспризорности и безграмотности, идеологической пропаганды, помощи школе и организации досуга детей. Такую работу выполняли педагоги-внешкольники, которые, по представлениям Е.Н. Медынского, должны знать педагогику и психологию, теорию и методику внешкольной работы, иметь широкое образование и быть готовым ответить на любой вопрос, уметь проводить массовые мероприятия и учитывать индивидуальность каждого ребенка, а главное – быть энтузиастами, способными заинтересовать и увлечь детей. Согласитесь, довольно большой перечень характеристик. «Внешкольное образование должно быть обеспечено профессионально подготовленными кадрами, а не обслуживаться самоучками», - писал Е.Н. Медынский, разработавший в 1912 году курс лекций по внешкольному образованию.

Надо отметить, что на протяжении всей истории внешкольной работы вопросам подготовки и повышения квалификации кадров уделялось большое внимание, потому что к организации кружков привлекались самые разные люди - от рабочих до ученых, для которых проходили курсы, семинары, конференции, методические объединения, а в педагогических вузах создавались факультеты дополнительных педагогических профессий.

СЛАЙД 3

Достигнутый внешкольными учреждениями прогресс и накопленный потенциал позволили в 1992 году перевести их в статус учреждений дополнительного образования детей, максимально соответствующих природе детства, признающих свободный выбор ребенка образовательных программ и видов деятельности в соответствии с его интересами. Именно в это время началось становление новой специальности «педагог дополнительного образования» [4].

К работе в этой сфере привлекаются самые разные специалисты, в силу чего среди многообразия профессий современной России педагоги дополнительного образования считаются одними из самых экзотических: здесь есть тренеры по каратэ, хореографы, музыканты, руководители кукольного театра, режиссеры, концертмейстеры, художники; здесь работают бывшие спортсмены, артисты, военные, ученые... И все они, придя на эту работу, становятся педагогами дополнительного образования, страстно увлеченными своим делом. Не все имеют педагогическое образование, а в последние годы количество таких людей выросло, потому что для расширения направлений предлагаемой деятельности, для увеличения охвата детей программами дополнительного образования на государственном уровне поставлена задача «привлекать к педагогической работе граждан, не имеющих педагогического образования, но имеющих стремление и умеющих работать с детьми» [1]. Следовательно, возникает необходимость получения ими педагогического образования.

СЛАЙД 4

Подготовка педагогических работников для сферы дополнительного образования детей осуществляется в образовательных организациях профессионального и высшего образования в соответствии с Федеральными государственными стандартами среднего профессионального (направление «Педагогика дополнительного образования») [5] и высшего образования (по направлениям «Педагогическое образование» и «Психолого-педагогическое образование» готовят бакалавров по профилю «Дополнительное образование»).

Профессиональная переподготовка осуществляется с учетом имеющегося образования и предусматривает получение педагогом новых компетенций и дополнительной квалификации, направлена на достижение готовности к педагогической работе, реализуется в объеме от 250 часов и рассматривается как достойная альтернатива второму высшему образованию.

В ближайшей перспективе такие программы будут особенно востребованы, ведь в соответствии с Профессиональным стандартом «Педагог дополнительного образования детей и взрослых» [6], который вступит в силу через год, для того, чтобы соответствовать занимаемой должности педагогу, не имеющему педагогического образования, необходимо пройти обучение по программе профессиональной переподготовки.

СЛАЙД 5

Новым этапом в развитии системы дополнительного образования детей в России стал 2012 год, когда на федеральном уровне было заявлено о приоритете дополнительного образования детей в государственной политике. Остро встал вопрос развития кадров, способных воплотить в жизнь задачи модернизации дополнительного образования. В сфере дополнительного образования, помимо педагогов, работают методисты, психологи, педагоги-организаторы, социальные педагоги. И проблем, которые оперативно должны разрешаться на курсах повышения квалификации, у этой многочисленной группы специалистов очень много.

СЛАЙД 6

Во-первых, в условиях изменения современного мира все отчетливее проявляется ***тенденция утраты монополии школы на образование и социализацию***; поставлена задача осуществить переход от массового образования, ориентированного на высокий уровень знаний и предметные результаты, к личностному, персонализированному образованию, к умению учиться в течение жизни и применять полученные знания на практике. Основные ожидания в реализации этого положения связаны с дополнительным образованием, которое «принципиально расширяет возможности человека, предлагая большую свободу выбора, чтобы каждый мог определять для себя цели и стратегии индивидуального развития» [2]. Современная ситуация в образовании актуализирует роль дополнительного образования детей, требует его изучения с учётом современных тенденций развития образования России. Но, к сожалению, данный образовательный феномен рассматривается через призму школьного образования, что не способствует его развитию, не позволяет использовать уникальные возможности и снижает его

значимость.

Во-вторых, новые функции дополнительного образования детей в России предъявляет **новые требования к знаниям и умениям педагогов дополнительного образования,** которые должны знать нормативные документы и направления модернизации, понимать суть происходящих изменений, участниками которых они являются. Очевидно, ключевой задачей системы повышения квалификации становится обеспечение подготовки работников сферы дополнительного образования к работе в современных условиях. В этой связи каждая программа повышения квалификации содержит модуль, разъясняющий положения государственной политики, информирующий об инновациях в области экономики, технологий и содержания дополнительного образования.

В-третьих, сфера дополнительного образования имеет особые возможности для **постоянного обновления содержания** с учетом интересов детей, потребностей общества и государства. В этой сфере разрабатываются программы, соответствующие современному уровню развития науки, техники, культуры, экономики, технологий и социальной сферы [3], предусматривающие создание условий для позитивной социализации и личностного развития учащихся; направленные на участие детей в практической деятельности и осуществление профессиональных проб. Нужны инновационные, вариативные, гибкие, мобильные, разноуровневые программы для разных категорий детей. Решение проблемы обновления программного «поля» дополнительного образования детей является одной из самых сложных для педагогов и, надо признаться, сегодня слабо проработанной и поэтому актуальной для системы повышения квалификации.

СЛАЙД 7

В-четвертых, отмечается **тенденция расширения границ дополнительного образования,** которое до недавнего времени было сосредоточено преимущественно в самостоятельных организациях дополнительного образования детей – дворцах и центрах творчества, что зачастую затрудняло декларируемые «шаговую доступность» и «свободу выбора» занятий детьми по интересам, в соответствии с их возможностями и потребностями. Современное дополнительное образование стало частью системы общего образования, приобрело межведомственный характер и реализуется в общеобразовательных школах, дошкольных и профессиональных учреждениях, в организациях культуры и спорта. Кроме этого, «образовательные инициативы активно предлагаются музеями, библиотеками, новыми общественными культурно-выставочными площадками, общественными организациями. Получили распространение инновационные организационные формы. Растет число коммерческих и некоммерческих организаций, разрабатывающих и реализующих проекты в сфере детского досуга и отдыха, образовательного туризма. Активно развивается негосударственный сектор дополнительного образования, что отвечает интересам граждан и способствует привлечению в эту сферу инвестиций» [2]. Большинство специалистов, участвующих в этой работе, имеют слабое представление о дополнительном образовании, подменяют его досуговой работой и просто развлекательными мероприятиями, поэтому все

являются потенциальными участниками повышения квалификации.

В-пятых, в российской системе образования идут активные **инфраструктурные преобразования, создаются многопрофильные организации** за счет объединения профессиональных, общеобразовательных, дошкольных организаций и центров дополнительного образования детей. В процессе реорганизации в Москве произошло сокращение организаций дополнительного образования детей со 157 до 32: большинство вошло в состав образовательных комплексов.

Укрупнение – это международная тенденция, вызванная не только финансово-экономическими причинами, но и необходимостью концентрации ресурсов для расширения возможностей каждого ребенка. Но важно не формально объединить организации, а подготовить педагогов к работе в новых условиях. Так, например, при укрупнении организаций не были обеспечены условия для развития дополнительного образования, которое воспринимается как вспомогательный компонент школьного образования: поощряется подмена дополнительного образования внеурочной деятельностью, а ведь это разные виды образования. Для устранения этих нюансов непосредственно в школах реализуются проблемно-ориентированные курсы.

В-шестых, информатизация дополнительного образования стабильно определяется как государственная задача. К тому есть и все предпосылки: спрос на рынке труда, внедрение ИКТ в повседневную жизнь, все возрастающая открытость образовательного пространства, внедрение технологий дистанционного образования. Лучше всего дело обстоит с оснащением организаций современным оборудованием и техникой, на это выделяются средства. Но недостаточно поставить оборудование, надо научить педагогов работать с этим. Дополнительное образование детей в этом вопросе значительно отстает от уровня школ, несмотря на то, что информационные технологии внедряются в образовательный процесс, разрабатываются Информационные порталы по дополнительному образованию (<http://dopedu.ru>) и создаются ресурсные центры, разрабатываются дистанционные программы для детей. Реализация образовательных программ предусматривает использование интерактивных технологий, виртуальных коммуникаций, электронных ресурсов для разных категорий детей, дистанционных форм, способствующих их профессиональной ориентации и профильному обучению. Все это сегодня еще не достаточно освоено педагогами дополнительного образования, и этому надо учить, в том числе на курсах повышения квалификации, где педагог может получить понимание той сложной социокультурной динамики, которая свойственна нашему времени и повысить свою информационную грамотность на курсах.

В-седьмых, в настоящее время одной из актуальных проблем повышения квалификации педагогов является его подготовка к работе с **разными категориями детей**, в том числе, **в инклюзивной образовательной среде**, доступной для образования и развития детей с разными нуждами. Это - ключевая идея Профессионального стандарта педагога. Для осуществления этой задачи педагогу необходимо изучить психолого-педагогические особенности развития детей, проблемы нарушений в психофизическом развитии, познакомиться со схемами диагностики, овладеть методами коррекции отклонений, научиться работать с разными детьми: одаренными, девиантными, имеющими проблемы в поведении и здоровье, а также с социально запущенными

детьми.

СЛАЙД 8

Обозначенные перспективные направления развития дополнительного образования, конечно, не исчерпываются этим перечнем. Они настолько сложны, что очевидна необходимость модернизации системы повышения квалификации педагогов, в которой происходит формирование и развитие профессионального мышления специалистов, стимулируется их развитие; оказывается компетентная помощь в вопросах осмысления профессионального опыта, выявления и разрешения проблемных ситуаций; регулируются образовательные процессы, происходит интенсивное формирование и внедрение в практику инновационных идей; предоставляется возможность профессионального самовыражения, самоутверждения и самоанализа.

Новые требования к дополнительному профессиональному образованию: изменение требований к результатам обучения, структуре содержания и условиям образовательных программ (компетенции, личностное развитие), акцент на интерактивных способах и средах изучения предметов; технологизация образовательного процесса с расширением сферы применения электронного обучения, дистанционных образовательных технологий и сетевых форм обучения, обратная связь.

Существующие организационные формы и технологии дополнительного профессионального образования преимущественно ориентированы на учет и изменение индивидуальных характеристик отдельного педагога, взаимодействующего исключительно с детьми, и почти никогда – на его способности взаимодействовать с коллегами. Эту позицию необходимо усиливать и создавать на курсах повышения квалификации пространство общения, обмена знаниями между педагогами для их профессионального развития, как в ситуации непосредственных контактов, так и в сетевом формате.

Одно из современных требований к повышению квалификации заключается в том, что должен быть заметен эффект даже от краткосрочных курсов: важно получить **практический результат** и по окончании курсов иметь готовый проект или программу, с которой педагог вернется в школу и будет работать. Акцент перенесен на интерактивные формы обучения, расширение использования дистанционных технологий. Кроме того, создана система контроля, включающая **задания и тесты**.

Для общения и решения возникающих вопросов на каждом курсе работают **форумы и консультации**, на которых педагог в любое время может получить квалифицированную помощь.

СЛАЙД 9

Повышение квалификации становится открытым и прозрачным – все действия вынесены в информационную среду. Любой педагогический работник города Москвы может выбрать в реестре программу повышения квалификации от 16 до 250 часов и записаться на нее на портале <http://www.dpomos.ru> и оформить договор на обучение.

СЛАЙД 10

Соответствующие инструкции размещены на сайте ГАОУ ВО МИОО <http://www.mioo.ru/obrazovatelnye-uslugi-mioo/povyshenie-kvalifik.html>. В настоящее время на портале размещено 1110 дополнительных профессиональных программ от 16 часов до 1200. В соответствии с законодательством педагогические работники имеют право на дополнительное профессиональное образование по профилю педагогической деятельности не реже чем 1 раз в 3 года. [7, ч.5, ст.47].

СЛАЙД 11

Курсовое обучение организуется с дистанционной поддержкой на портале <http://moodle.mioo.ru/>, что позволяет экономить время педагогов, осуществлять индивидуальный подход и выстраивать индивидуальные образовательные маршруты, получать образование в удобном темпе и формате, не прерывая рабочего процесса.

Педагоги – занятые люди, поэтому дистанционное обучение для них актуально, особенно в условиях московского мегаполиса и больших расстояний. Поэтому проводится работа по переводу повышения квалификации в дистанционную форму, размещаются в информационной среде учебные материалы соответственно учебному плану: лекции и видеолекции, вспомогательные материалы, образцы уроков и программ, тесты и контрольные задания.

Например, ДПП «Технология разработки и оценки качества рабочей программы курса внеурочной деятельности» (72 ч.), где формируются первоначальные представления о технологии составления программы и совершенствуются соответствующие профессиональные компетенции. Программа реализуется в двух форматах – в очном и в дистанционном, что позволяет работать и с регионами. Аналогичный модуль в объеме 6-12 часов включен во все дополнительные профессиональные программы.

СЛАЙД 12

В 2015-16 году разработана новая образовательная услуга – «*Педагогический абонемент*» (<http://dpomos.ru>) - форма повышения профессионального уровня педагогических работников, которая оказывается на базе образовательных организаций города Москвы, может содержать любой набор учебных мероприятий и позволяет оперативно реагировать на запросы педагогов. Сами школы определяют количество учебных часов, число участников, тематику, время и место проведения занятий. Выбрать можно и форму занятий, которыми могут быть консультация, обучающий семинар, тренинг, круглый стол (от 3 до 12 часов).

СЛАЙД 13

В системе повышения квалификации активно развивается *неформальное образование педагогов*, отличием которого от традиционного является то, что оно не завершается выдачей документа, но при этом удовлетворяет потребность педагога в самообразовании, повышает культурный уровень и расширяет профессиональный кругозор, а также акцентирует внимание на вопросах общественного признания результатов деятельности.

Среди неформальных форм образования в последнее время активно стали развиваться Ассоциации, в числе которых есть и Ассоциация педагогов дополнительного образования (<http://www.enap.info/predmetnye-associacii/associaciya-pedagogov-dopolnitelnogo-obrazovaniya/>) – это общественная организация, в которой добровольно участвуют активные, инициативные педагоги. Здесь у педагогов появляется возможность создать команды специалистов, готовые содействовать профессиональному росту коллег, обсуждать новые идеи и пути внедрения их в образовательную практику, реализовывать совместные проекты, отстаивать профессиональные интересы. Ассоциация проводит профессиональные конкурсы, крупные мероприятия, организует общение и взаимопомощь, проводит мастер-классы, конференции, круглые столы.

Преимущества неформального образования состоят в его мобильности и гибкости, но важность данного вида образования недооценена, и его развитие имеет во многом стихийный характер. В неформальной форме проводятся:

семинары, дискуссии, тренинги, которые предлагаются на любом этапе образования или педагогической деятельности;

общественно значимые мероприятия, на которые педагоги добровольно регистрируются в соответствии со своими профессиональными интересами (<http://mioo.ru>; <http://mgdu.dogm.mos.ru>; <http://продод.рф/>, <http://mosmethod.ru/>);

методические объединения, которые создаются в рамках одного профиля или приоритетной проблемы развития образования;

сетевое общение (Facebook и Twitter, Youtube, Google и др.), в процессе которого педагоги имеют возможность развиваться, взаимодействовать и общаться с коллегами; кроме того, блоги хорошо встраиваются в курсовое обучение и работают как средство обратной связи преподавателя и обучающихся;

мастер-класс - интерактивная форма обмена опытом, объединяющая формат тренинга и семинара, на котором демонстрируется авторская педагогическая система;

профессиональные педагогические конкурсы (<http://pedagog.mosedu.ru/>) – массовые педагогические соревнования, где педагог заявляет о себе с целью демонстрации своих достижений, мастерства, общается с другими педагогами, организаторами и экспертами на профессиональном уровне; участие в конкурсах стимулирует педагога развиваться и совершенствовать свое педагогическое мастерство.

Такие разнообразные формы организации деятельности педагогов способствуют изменениям в их профессиональном мировоззрении, выработке собственного стиля, готовности к принятию нового, развитию восприимчивости к педагогическим инновациям и способности к непрерывному образованию, в первую очередь, через освоение дополнительных профессиональных программ.

СЛАЙД 14

В заключении необходимо признаться, что нам есть над чем работать, и все красивые слова, написанные в стратегических документах, не дадут ожидаемого эффекта, если профессиональный уровень педагогических кадров, их знаниям и умения не будут отвечать поставленным задачам.

На сегодняшний день значительно расширилась возможность выбора форм обучения; возросло информационное и научно-методическое обеспечение курсов, которые организуются с опорой на личный опыт педагогов; расширяются возможности неформального образования педагога, которые не позволяют ему замыкаться в себе и расширяют круг общения. Как известно, один из принципов повышения квалификации гласит: *эффективное обучение взрослого человека возможно только в группе и только при поиске решения личностно значимой и социально актуальной реальной проблемы.*

Опыт совместного действия по разрешению профессиональных затруднений, разработке и защите проектных работ, погружение в проблемное дискуссионное пространство в процессе обучения, творческий характер взаимодействия с коллегами на основе общих интересов позволяют современной системе повышения квалификации быть успешной.

Дополнительное образование детей сегодня находится в центре внимания, задачи обозначены, и уже ясно, что в новое время со старыми установками нельзя. У педагога дополнительного образования не осталось выбора – меняться или нет. Нужно соответствовать вызовам времени, нужно меняться, максимально используя как современные технологии, так и новые подходы к организации повседневной работы. А система дополнительного профессионального образования поможет педагогу эффективно решить проблемы.

Литература

1. Государственная программа Российской Федерации "Развитие образования" на 2013-2020 годы (проект) // Сайт Министерства образования и науки РФ. [Электронный ресурс] - URL: <http://минобрнауки.рф/документы/>.
2. Концепция развития дополнительного образования (утв. распоряжением Правительства РФ от 4 сентября 2014 г. № 1726-р)
3. Порядок организации и осуществления образовательной деятельности по дополнительным общеобразовательным программам (утв. приказом Министерства образования и науки РФ от 29 августа 2013 г. № 1008)
4. Приказ Министерства общего и профессионального образования Российской Федерации от 10 апреля 1998 г. № 997 «О дополнении классификатора специальностей среднего профессионального образования». [Электронный ресурс] - URL: http://www.lawrussia.ru/texts/legal_689/doc689a825x930.htm
5. Приказ Министерства образования и науки РФ от 13 августа 2014 г. N 998 «Об утверждении федерального государственного образовательного стандарта среднего профессионального образования по специальности 44.02.03 Педагогика дополнительного образования».
6. Профессиональный стандарт «Педагог дополнительного образования детей и взрослых» (утв. приказом № 613 Министерства труда и социальной защиты РФ от 08.09.2015)
7. Федеральный закон «Об образовании в Российской Федерации» от 29 декабря 2012 г. N 273-ФЗ.

Развитие гражданского образования в России

Пахомов Владимир Петрович
руководитель Самарского регионального центра гражданского образования

В Российской Федерации после распада СССР и ликвидации монополии коммунистической идеологии, одной из актуальных являлась задача формирования новых ценностных ориентиров, достижения духовного единства общества, консолидации всех его социальных групп.

Несомненно, ключевая роль в этом процессе отводилась системе образования. Роль образования на этом этапе развития России определялась задачами ее перехода к демократическому, правовому государству, к рыночной экономике, необходимостью преодоления опасности отставания страны от мировых тенденций экономического и общественного развития.

Эти процессы получили свое отражение и закрепление в Законе Российской Федерации «Об образовании» (1992 г.) и Федеральном законе «О высшем и послевузовском профессиональном образовании» (1996 г.). В соответствии с этими нормативными актами, государственная политика стала базироваться на принципах утверждавших, что система образования должна:

- Носить гуманистический характер с приоритетом общечеловеческих ценностей, свободного развития личности, воспитания гражданственности, трудолюбия, уважения к правам и свободам человека.
- Поддерживать единое культурное и образовательное пространство во всей стране, защищать и развивать национальные культуры, региональные культурные традиции и особенности.
- Создавать условия общедоступности качественного образования вне зависимости от доходов и местожительства, формирование целенаправленной работы с одаренными детьми и талантливой молодежью.
- Иметь светский (т.е. не религиозный) характер.
- Поддерживать свободу и плюрализм в образовании, внимательно относиться к различным мнениям и подходам.
- Носить демократический, государственно-общественный характер управления образованием.

Однако реформирование системы российского образования можно подразделить на два периоды: 90-е годы XX века, когда государство несколько ослабило уровень регламентации

сферы образования, давая регионам возможность проявить инициативу в формировании своих образовательных моделей, и 2000-е годы, когда оно восстановило утраченные позиции и свое влияние в этой важной сфере.

В российском образовании в 90-х годы XX века, был осуществлен целый ряд актуальных практических мер:

- развитие вариативности образования;
- появление новых типов образовательных учреждений (лицеев, гимназий, колледжей и др.);
- внедрение новых форм организации учебного процесса, создание новых образовательных комплексов типа «детский сад – начальная школа», «детский сад – гимназия», «школа – профессиональное училище», «школа – высшее учебное заведение» и др.;
- развитие системы негосударственного сектора образования;
- разработка и внедрение широкого спектра программ и учебников нового поколения;
- переход к нормативному подушевому бюджетному финансированию образовательных организаций общего образования;
- широкое внедрение в общее образование современных информационных технологий обучения, в том числе и дистанционного;
- создание современной системы повышения квалификации и переподготовки педагогических курсов (без отрыва от производства – дистанционные, заочные при педвузах, посредством Интернет; с учетом индивидуальной образовательной программы педагога и др.)
- введение государственных стандартов общего и профессионального образования. Однако, в рамках общеобразовательной школы он содержал только инвариантный минимум допустимого (достаточного) уровня содержания и перечня требований к подготовке выпускника.
- внедрение трехуровневой модели Базисного учебного плана образовательного учреждения в составе: федерального, регионального (регионально-национального) и школьного (профильного) компонентов. Новинкой матрицы этого плана был второй его компонент, который отводил определенное время для изучения школьниками материалов о регионе (местной истории, экологии, географии, родного языка), либо дисциплин, содействующих социализации личности в условиях социально-культурной среды конкретной территории.

В начале 2000-х годов, в условиях новых политических реалий, государство усилило свои позиции и влияние в сфере образования. Начались формирование модели образования, отвечающей требованиям инновационного развития социально-экономической сферы и современным потребностям общества, задачами геополитической конкурентоспособности России в глобальном мире.

Для решения этой задачи осуществляется целый комплекс практических мер.

- Переход к уровню высшего образования (бакалавр – магистр).
- Заметно повысилась роль общественности в управлении и контроле качества образования, как на уровне учреждений, так и на муниципальном и региональном уровнях (наблюдательные, попечительские и управляющие советы).
- Учебные заведения стали обеспечивать потребителей и общественность информацией о собственной деятельности (функционирование сайтов, общественные слушания) о результатах

работы образовательных структур.

- Обеспечение всеобщей компьютерной грамотности обучающихся.
- В системе общего образования завершен переход на принципы профильного образования, которое строится и как возможность построения школьниками индивидуальных траекторий.
- Введение нового историко-культурного стандарта, который дает наиболее современное и научное толкование истории России.
- Система Единого государственного экзамена ставится важнейшим институтом оценки результатов общего образования (2004 г.). Она позволяет говорить о следующих его характеристиках: - это более объективная форма оценки работы ученика, учителя, школы по сравнению с прежней системой, она расширяет доступность высшего образования для выпускников школ из отдаленных территорий России, создает равные возможности для выпускников из сельской местности, единственная форма допуска к высшему образованию и комплектования высших учебных заведений.
- Новые федеральные государственные стандарты общего образования (2009 г.) базируются на принципах развития личности учащихся на основе освоения универсальных способов деятельности (системно-деятельностный подход). Все учебные программы и методы обучения обновлены с использованием компетентностного подхода.

Важнейшим компонентом новой модели школьного образования является ее ориентация на практические навыки, на способность применять знания, реализовывать собственные проекты. Деятельностный характер содержания современного образования обеспечивает учащимся приобретение опыта коммуникативной, практической, творческой деятельности, то есть целого ряда компетентностей.

В целом, в системе образования России в эти годы XX века был взят курс на личностно-ориентированное обучение, выработку у учащихся критического мышления, навыков анализа источников, организации самостоятельной творческой деятельности и коммуникативно-диалоговых форм общения школьников. Данные изменения находили свое отражение в региональной образовательной политике.

Самарская область по многим параметрам реформирования образования являлась пионером. Именно здесь в 1994 году была апробирована модель повышения квалификации учителей в режиме Именного образовательного чека, когда 4 тематических модуля по 60 часов каждый, педагог в течение 5 лет мог освоить в разных учреждениях, имеющих лицензию на повышения квалификации, в удобное для себя время и наиболее актуальной для него проблематике.

Впервые в России здесь в 1998 г. перешли на систему подушевого финансирования общеобразовательных организаций - в зависимости от количества учащихся и реализации образовательных программ.

Региональная система управления образованием с начала 2000-х годов начала функционировать посредством образовательных округов, в которые стали входить несколько субъектов (районов, городов) Самарской области.

Показателем оптимизации регионального образования стали образовательные центры,

оригинальной конструкции укрупненные школы с составом педагогов высокой квалификации, полным набором оборудования для школьных кабинетов, современным компьютерным оснащением, комплексом спортивных объектов, куда школьников из ближайших сел привозили желтые школьные автобусы.

Самарская область находится в центре России на великой русской реке Волге, в ней насчитываются 3,3 миллиона жителей, причем 84 % населения проживает в городах. Это крупный индустриальный регион, где развита аэрокосмическая, автомобильная, химическая отрасли, а с другой стороны, обладая плодородными землями, область имеет и развитый аграрный сектор.

Исходя из приоритета в системе образования России компетентного подхода, в Самарской области по инициативе правительства региона в 2004 году был принят Закон о компетентном образовании.

Именно здесь в 1994 году была апробирована оригинальная версия регионального компонента Базисного учебного плана, когда эти 2 часа в неделю в вертикали с 1 по 11 классы распределялись по следующей схеме: один час – по выбору школы выделялся на преподавание информационной культуры или экономической культуры, а другой – на новый образовательно-воспитательный курс «Основы жизненного самоопределения» («ОЖС»).

Поэтому, губернатор Константин Титов и руководитель регионального образования Ефим Коган при определении содержательных приоритетов регионального комитета образования хотели, чтобы молодежь видела потенциальные возможности этой привлекательной, с точки зрения экономики и природы территории, и стремились связать с ней свою судьбу.

Одновременно, они желали, чтобы молодежь активно осваивала азы правовой и политической культуры, обретало не только социальные знания, но и социальные навыки. Курс «ОЖС» на местном уровне начал реализовывать задачу гражданского образования, которое только пробивало себе дорогу в российском обществе.

Главной целью гражданского образования является воспитание гражданина для жизни в демократическом государстве, гражданском обществе. Такой гражданин должен обладать определенной суммой знаний и умений, иметь сформированную сумму демократических ценностей, а также готовность участвовать в общественно-политической жизни местного сообщества.

В 1993 году мне предложили перейти из педагогического университета, где я, как доцент, читал курс Отечественной истории XX века, и возглавить кафедру исторического и социально-экономического образования Самарского областного института повышения квалификации и переподготовки работников образования (СИПКРО). И первым большим делом, которым я стал заниматься на новой должности, была разработка содержания и программного обеспечения нового социального курса.

Курс «ОЖС» структурно делился на ступени. В 1-4 классах в его рамках преподается цикл «Самоопределение», учебно-методический комплект которого разработали самарские педагоги Алла Гудзовская и Галина Сураева. Познавая в общих чертах себя, свою сущность, ощущения и чувства, нравственные аксиомы, размышляя на этические темы, проводя простейший анализ

жизненных ситуаций, дети пытаются понять и избрать наиболее оптимальные инструменты обеспечения «самости», своего «Я» в сложности жизни.

В цикле «Самоопределение» изучаются модули: «Самоопределение дома», «Самоопределение в школе», «Я и другие», «Я в мире», «Каким я хочу быть», «Что делать, если мне трудно», «Конфликты и мир», «Я – гражданин», «Я и экономика».

На второй образовательной ступени (5 – 9 классы) ведется цикл «Граждановедение», который был разработан сотрудниками Московского научно-методического Центра «Гражданин» под руководством Якова Соколова. Этот цикл призван мотивировать у школьников гражданское достойное поведение в непосредственной практике межличностных отношений, раскрыть структуры и основы функционирования общества, государства, семьи, привить важнейшие навыки обеспечения безопасного личного существования, обогатить социальный опыт гражданина.

В цикл «Граждановедение» входят модули: «Человек и гражданин», «Человек в обществе», «Права и свободы человека и гражданина», «Российская конституция», «Правонарушение и наказание», «Современная семья», «Гражданин и собственность», «Жизнь дается один раз», «Наш выбор: без наркотиков».

В 10 – 11 классах преподается цикл социального знания на базе учебного пособия «Основы жизненного самоопределения», написанного группой самарских ученых и педагогов. В старшей школе курс раскрывает мир человека в философско-культурологическом аспекте, он подводит учащихся к осмыслению движения мира и жизни, индивидуального и социального бытия, самооценности личности человека в многообразии нравственно-этических связей в семье, школе, социуме.

В цикле старшей школы изучаются модули: «Философско-этическое самоопределение», «Социальное самоопределение», «Политика и политическая культура гражданина», «Право в нашей жизни», «Экология», «Экономика», «Эффективное поведение на рынке труда».

Концептуально основная цель всего курса «Основы жизненного самоопределения» заключается в подготовке учащихся к жизни в демократическом правовом государстве, гражданском обществе путем формирования устойчивых представлений о мире, обществе и государстве, его институтах, основных социальных связях и отношениях, политических и правовых средствах регулирования общественной жизни. Методика проблемного, деятельностного обучения содействует накоплению каждым учащимся способов реализации своих планов, вариантов практических действий.

Это означает переход от знаний того, «что такое» настоящий гражданин, к освоению того, «что делает настоящий гражданин», то есть, чтобы учиться демократии, ученики должны сами участвовать в демократической жизни.

После того, как была отработана структура курса «Основы жизненного самоопределения», его программа с системой практических заданий, учебно-методическое оснащение, СИПКРО подготовил более 2,5 тысяч компетентных преподавателей, в школах, гимназиях и лицеях региона началась интенсивная работа по эффективному использованию его ресурсов. Образовательные учреждения региона активно содействовали развитию гражданского

образования на основе внедрения в педагогический процесс активных форм и методов обучения, в том числе дискуссий, деловых и ролевых игр, моделирования проблемных ситуаций и др., способствующих развитию у учащихся навыков решения разнообразных проблем.

К концу 90-х годов стали заметными позитивные изменения в политической и электоральной культуре молодых самарцев, росте их ответственности за благополучие в местном сообществе. В районах и городах региона стали успешно функционировать творческие объединения учителей граждановедения.

В 1998 году с целью научно-методического обеспечения и развития системы гражданского образования в регионе, одним из первых в России, был создан Самарский региональный Центр гражданского образования (РЦГО).

Исходя из новой парадигмы образования школьников, развития у них широкого круга компетентностей, сотрудники РЦГО развернули разработку и внедрение новых технологий действенного граждановедения. Осознавалось, что курсу «ОЖС» нужен реальный выход за пределы школ, требуются методики соприкосновения учащихся с реальными социально-экономическими процессами, актуальными проблемами развития своих территорий, приобретения опыта сотрудничества с властными структурами, общественностью.

После анализа различных видов социальной практики, был сделан вывод о том, что наиболее эффективным ресурсом приобретения гражданских и социальных компетентностей является социальное проектирование. Было изучено несколько зарубежных и российских методик социального проектирования, вопросов их включения в систему внеклассной деятельности школы, индикаторов эффективности этих проектов.

В 1999 году была отработана оригинальная технология социального проекта «Гражданин» и началась его апробация. Вскоре он завоевал популярность среди самарских педагогов и школьников.

Данный проект имеет следующую структуру:



Он предполагает проведение учащимися анализа актуальных социально-экономических проблем конкретной территории, изучение юридической базы и материалов СМИ по тематике проекта, проведения социологических опросов населения, изучения механизма принятия решений властными структурами и формирование пакетов предложений по изменению ситуации в сферах жизнедеятельности граждан, а также активного участия самих школьников в реализации различных аспектов проекта.

Для российских школьников социальный проект «Гражданин» весьма актуален тем, что в процессе конкретной деятельности знакомит их с методами и процедурами, принятыми в общественно-политической деятельности и дает им практические навыки участия в изменении социальной инфраструктуры родной местности.

В 2000 году было утверждено положение об областном конкурсе проектов «Гражданин». С тех пор он стал ежегодным, а практика социального проектирования получила одобрение и поддержку различных органов власти региона. Проект «Гражданин» стал неотъемлемой частью образовательной системы Самарской области. В самарской модели социального проекта «Гражданин» предусмотрен принцип равноуровневости проектной проблематики. В течение учебного года проводится два конкурса социальных проектов: «Моя малая родина» (в первом полугодии), на который выносятся проекты, посвященные решению узко локальных социальных проблем (школы, микрорайона, села, поселка) и «Родному городу (району) желаем...» (во втором полугодии), на котором защищаются проекты, затрагивающие проблемы крупных муниципальных образований – городов и сельских районов.

Позитивной чертой технологии этого социального проекта является его универсальность: данная деятельность учащихся может реализовываться как в рамках учебно-воспитательного процесса (на занятиях обществоведческих и гражданско-правовых циклов, факультативных занятиях, элективных курсах), так и вне стен школы – в учреждениях дополнительного образования, общественных детских и молодежных объединениях.

Социальные проекты дают возможность учащимся соотнести общие представления о тенденциях развития общества, полученные в ходе уроков, с реальной жизнью, в которую вовлечены они сами, их друзья, их семья, учителя; с социальными и политическими событиями, происходящими в масштабах микрорайона, города, края, наконец, страны в целом.

Развитие этого движения в регионе вызвало интерес у министра образования Российской Федерации Владимира Филиппова, когда он познакомился с некоторыми проектами самарских школьников на Неделе гражданского образования, организованной «Учительской газетой», в Подмоскowie весной 2000 г. Находясь вместе с Президентом России В.В.Путиным в сентябре 2000 года в Самарской области, он побывал и в региональном Центре гражданского образования, ознакомился с перспективами внедрения проекта «Гражданин» в образовательных организациях области, опытом взаимодействия старшеклассников с органами власти по реализации своих предположений, методическим инструментарием проекта.

Вскоре Министерство образования Российской Федерации приняло решение развернуть в 2000/2001 учебном году Всероссийскую акцию «Я — гражданин России», которая завершилась в июне 2001 г. большим конкурсом проектов школьников из разных регионов страны

во Всероссийском детском центре «Орленок». Учредителями акции стали: Министерство образования РФ, «Учительская газета», Межрегиональная ассоциация «За гражданское образование», Самарский региональный Центр гражданского образования. В основу положения о проведении этой социально-патриотической акции была взята самарская версия социального проекта «Гражданин», а Самарский региональный Центр гражданского образования стал осуществлять ее научно-методическое сопровождение. В финале конкурса участвовало 50 школьных команд из 39 субъектов Российской Федерации.

И вот уже 16 лет в системе образования России существует феномен ежегодного смотра гражданской инициативы тысяч неравнодушных, активных молодых граждан нашей страны. В 2006 году акция вошла в контекст Приоритетного национального проекта «Образование» и по итогам финалов акции ежегодно 15 лидеров лучших школьных проектов получают премии в номинации «Поддержка талантливой молодежи».

За годы существования «Всероссийской акции «Я — гражданин России» в регионах реализованы десятки тысяч социальных проектов: восстановлены многие исторические памятники, благоустроены уголки родных сел и городов, спасены уникальные островки природы, увековечена память героев-земляков, а главное, выросло и возмужало целое поколение молодых людей, умеющих компетентно выявлять актуальные социальные проблемы, находить пути их решения и выполнять задуманное в команде с единомышленниками.

Участники проекта, реализуя собственные идеи, приобретают не только бесценный личный опыт гражданского участия, но и формируют вокруг себя своеобразные островки гражданского общества.

Расширение формата гражданского образования, возрастание требований к знаниям и методическому мастерству учителя вызвали необходимость подготовки новых педагогических кадров в этой области не в режиме краткосрочной переподготовки в СИПКРО, а в контексте обучения будущих учителей в педагогических вузах.

В это время СРЦГО установил партнерские отношения с целым рядом зарубежных образовательных организаций. Его сотрудники побывали в рабочих командировках в США, Бельгии, Франции, Болгарии, где знакомились с опытом организации гражданского образования, спецификой подготовки педагогических кадров.

В результате этих контактов в 2001 году начинается реализация емкого международного проекта «Университетское партнерство в сфере гражданского образования». В ходе этого проекта Самарский региональный Центр гражданского образования, Самарский государственный университет, государственный педагогический университет, социально-педагогический колледж, а так же Рассел Сэйдж Колледж штата Нью-Йорк и Бостонский Университет (США) создали консорциум с целью подготовки в высших и средних специальных учебных заведениях Самарской области преподавателей гражданского образования. СРЦГО стал координатором этого проекта с российской стороны.

В ходе реализации проекта группа преподавателей данных учебных заведений прошла стажировку в США, знакомясь с опытом преподавания граждановедческих знаний в американских школах и университетах.

В течение пяти семестров в трех самарских педвузах велся курс «Основы гражданского образования», разработанный самарскими специалистами. Большая группа преподавателей проводила занятия по теории и методике гражданского образования, обсуждала со студентами актуальные проблемы общественно-политической жизни, знакомила будущих учителей гражданского образования с опытом преподавания общественных дисциплин в России и США.

После завершения теоретического курса 120 выпускников программы прошли педагогическую практику в школах Самарской области, применяя в работе с детьми знания и навыки, приобретенные в университетских аудиториях.

Данная группа самарских ученых - обществоведов в 2003 году подготовила солидный учебно-методический комплект по теории и методике гражданского образования в который вошли учебные пособия «Основы гражданского образования» и «Современная методика гражданского образования», сборник «Основы гражданского образования: документы и материалы», учебный фильм «Методическая мастерская современного учителя граждановедения».

Результаты проекта были представлены в феврале 2004 года на международной конференции в Самаре и получили высокую оценку российских и зарубежных специалистов, а созданный в ходе реализации проекта комплект пособий позволил начать работу по подготовке учителей гражданского образования в педагогических вузах других регионов России. В Самаре до сих пор продолжается практика подготовки граждановедческих кадров в данных педагогических вузах.

В рамках новых образовательных стандартов достижение планируемых результатов освоения Основной образовательной программы обеспечивается также Программой внеурочной деятельности. Данная программа должна объединить все виды деятельности школьников, в которых решаются задачи их воспитания и социализации.

Хорошим воспитательным ресурсом самарской школы стало внедрение с 2010 года в более 150 образовательных организациях области новой воспитательной программы «Я – гражданин России», включающей в себя комплекты из 15 пособий, которые посвящены актуальным проблемам гражданского становления подрастающего поколения, их действенной социализации («Наша Родина – великая Россия», «Наше государство и его символы», «Гражданин России: наши права и обязанности», «Жизнь дается один раз», «Наш выбор – здоровый образ жизни», «Закон и ответственность», «Твой трудовой старт», «Мы – граждане независимой России», «Достоинства и недостатки человека», «Мы - в обществе», «Наши права и ответственность», «Антитеррор»).

Уникальность данной технологии состоит в том, что она становится инструментом воспитательной деятельности классного руководителя при проведении тематических классных часов или каких-то внеурочных мероприятий со школьниками 5 – 9 классов, продолжая на новом уровне содержательные линии курса «Граждановедение».

Одна из особенностей региональной модели гражданского образования является проведение ежегодных областных олимпиад по граждановедению. Специфика данной олимпиады состоит в том, что в ней принимают участие школьники по трем возрастным группам:

6-7 классы, 8-9 классы, 10-11 классы. На первом этапе школьники дистантно готовят эссе по актуальным проблемам государственного и политического устройства России, реализации конституционных прав граждан, геополитической ситуации в современном мире. После анализа эссе авторы лучших работ приглашаются на очный этап, который проходит в традиционном режиме.

Данная олимпиада проводится ныне в России только в одной Самарской области и является показателем развития гражданского образования в регионе.

В активе РЦГО немало различных форм гражданского воспитания школьников: конкурсы творческих работ «На защите моих прав»; «Права человека глазами ребенка»; «История моей семьи – страница многовековой истории Отечества»; «Гражданин Самарской области – гражданин России», проведение научно-практических конференций педагогов, смотры школьных краеведческих музеев и др.

Ныне в Самарской области идет постоянный поиск новых, оригинальных форм гражданского воспитания школьников, их действенной социализации.

Библиографический список.

1. Болотина Т.В., Воскресенская Н.В. и др., Всероссийская акция «Я - гражданин России: воспитание патриота. Научно-методическое пособие, М.: Издательский дом «Учительская газета», 2003.
2. Воспитание детей и молодежи в современном образовательном пространстве. Сборник тезисов межрегиональной научно-практической конференции. Самара, «Порто-принт», 2016.
3. Гражданское образование в российской школе. Образование в документах и комментариях. М.: Издательство «Астрель», 2003.
4. Данилюк А.Я., Кондаков А.М., Тишков В.А. Концепция духовно-нравственного развития и воспитания личности гражданина России. 2-е изд., М.: «Просвещение», 2011.
5. Иоффе А.Н., Пахомов В.П. Современная методика гражданского образования. Самара, Изд. «НТЦ», 2003.
6. Новая школа – школа гражданского становления. Материалы Всероссийской научно-практической конференции. М.: АПК и ППРО, 2010.
7. «О национальной стратегии действий в интересах детей на 2012-2017 гг.» Указ Президента Российской Федерации от 01.06.2012 г. №761.
8. Основы гражданского образования. Учебное пособие. Под ред. Пахомова В.П., Шехтера С., Самара, Изд. «НТЦ», 2003.

9. Программа регионального курса «Основы жизненного самоопределения». 2-е изд., Самара, СИПКРО, 2002.
10. Фундаментальное ядро содержания общего образования. Под ред. Козлова В.В., Кондакова А.М., М.: «Просвещение», 2009.

講演の要約

「ロシアにおけるシティズンシップ教育の展開」

パホーモフ・ヴラジミル

サマーラ州シティズンシップ教育センター長

シティズンシップ教育との出会い

私は1975年にクイブシェフ（現サマーラ）大学の歴史学部を卒業してから同大学で歴史を教えるようになった。1979年から3年間はモスクワ国立教育大学の大学院に在籍し、1982年には博士候補(кандидат наук)の学位を取得した。その後、教育大学で教鞭を取っていたが、1993年にサマーラ州教員研修所の歴史・社会・政治教育の講座長に任命された。そのときは新生ロシアにおいてシティズンシップ教育は重要な課題になっており、私が発展に携わるようになった。

シティズンシップ教育の展開

1990年代を通して、ソ連解体・新生ロシアの成立は新しい教育内容を必要としていた。その新しい内容の根底には最重要な市民的価値(гражданские ценности)がおかれていた。それは、子どもの権利、基本的人権、市民社会の機能の基盤(основы функционирования гражданского общества)、市民の政治的、選挙的文化(политическая и электоральная культура гражданина)などである。この年代は学校の教育課程において「人間と社会(Человек и общество)」、「現代文明の基礎(Основы современных цивилизаций)」、「法教育の基本(Азбука правоведения)」、「市民科(Граждановедение)」、「民主社会における選挙(Выборы в демократическом обществе)」などのような科目が導入される時期であった。つまり、このときはこのような新しい教育内容に対して知識伝達アプローチ(знаниевый подход)が中心であり、児童生徒は人権などについてロシア国内と国際的な条約について学習し、理解し、将来使えるように学ぶことに重点が置かれていた。

2000年代はシティズンシップ教育において実践的なアプローチ(деятельностный подход)が増えた時期である。児童生徒の効果的な社会化(действенная социализация школьников)、彼らの社会、権力機関との能動的相互作用(активное взаимодействие с социумом, органами власти)、母校と地域社会の重要な問題の解決過程への参加が教育制度の課題になった。このような状況の中で社会的実践の様々な形態の方法(методики разных форм социальной

практики)が現れてきた。それは、例えば、学校レベル、市レベル、地方レベルの青年議会、大規模な市民的プロジェクト(масштабные гражданские акции)、ボラにティア、社会的プロジェクト(социальное проектирование)などである。シティズンシップ教育のこのような新しい方向は、当時ロシアの教育においてコンペテンシーアプローチ(компетентностного подхода)の導入傾向に対応していた。

アメリカのパートナーとの関係

アメリカのパートナーとの関係は、我々が直面していた一連の重要な問題の解決に役に立っていた。それは、若者の市民的育成(гражданское воспитание)の様々なモデル、市民科の効果的な方法の分析、法律の知識（一般市民の生活にかかわるような母国の憲法に関する知識、法律の様々な分野の特徴など）に関する大規模なコンテストの企画と実施である。特に、我々が興味深く学んだアメリカの実践は、ロシアにはなかった大学におけるシティズンシップ教育の実施である。

ロシアにおけるシティズンシップ教育の今後の展望

これからのロシアにおけるシティズンシップ教育は、市民的及び社会的コンペテンシー(гражданские и социальные компетентности)を十分に習得できるように展開していくことが課題である。現在成長している世代は自分たちの広範囲にわたる権利と義務を習熟しなければならない。それは生活の次なような分野に関わる。権力機関への適切な代表者の選定への責任(понимание ответственности за выбор достойных представителей в органы власти)、生まれ育った地域の環境保護(защита экологии родного края)、高齢者の(забота о старшем поколении)などである。若者にロシアの市民社会の形成に積極的に参加してもらう必要がある。例えば、現在は生徒たち自身のイニシアティブによるロシア全国生徒運動(Общероссийское движение школьников)、学校での歴史博物館の設置、大規模な環境保護プロジェクトの実施がみられる。このような活動がもっと増えることを願いたい。

研究課題番号 15H05198
平成 27～29 年度 科学研究費補助金
基盤研究 (B) 海外学術調査

ロシア及び CIS 諸国における教育改革と
教師教育の現代化に関する総合的調査研究

平成 28 度中間報告書

平成 29 年 (2017 年) 3 月

研究代表者 嶺井明子
(筑波大学 人間系)